

INSIDE

Kosovo
Bosnia and Herzegovina
East Timor
Rwanda



BUNKYO VOLUNTEERS 2003

目 次

I.	生まれ出る小鳥は自ら殻を破る	国際学部教授 中村恭一	3
II.	東ティモール活動報告(2003 春・夏)		5
	* 活動スケジュール		6
	* 活動総括		7
	* オイスカ農業研修センター		12
	* かまどプロジェクト		13
	* マングローブ植林活動		15
	* 日本大使館・PKO について		18
	* 支援物資収集		19
	* バギア村孤児院		21
III.	コソボ・ボスニア活動報告(2003 夏)		24
	* 活動スケジュール		25
	* 地図		27
	* 活動の経緯と概要		28
	* コソボ活動		30
	* ボスニア活動		37
	* スレブレニツァ和解再統合青年キャンプ		41
	* コソボ・ボスニア活動総括報告		44
IV.	コソボ・ボスニア視察活動(2003 春)		48
	* 活動スケジュール		49
	* 視察の目的		50
	* コソボ概要		50
	* コソボ視察活動		50
	* コソボを訪ねて		53
	* ボスニア・ヘルツェゴビナ概要		54
	* ボスニア視察活動		54
	* ボスニアを訪ねて		60

V.	国連開発計画(UNDP)コソボインターンシップ活動報告	61
	* 活動スケジュール	62
	* 活動の経緯	63
	* 活動内容	63
	* 反省と感想	65
VI.	ルワンダ活動報告	66
	* 活動スケジュール	67
	* ルワンダについて	68
	* 活動の経緯と目的	68
	* ムリンディ/ジャバン・ワンラブ・プロジェクトでの活動	69
	* 孤児院、バナナリーフカードのアトリエ	71
	* 虐殺現場となった学校へ	71
VII.	東ティモール・コソボ会計報告	73
VIII.	お世話になった方々	76
IX.	アンケート集計結果	79

生まれ出る小鳥は自ら殻を破る

文教大学国際学部

教授 中村 恭一

スレブレニツァは山あいの小さな町である。バルカン半島の中央ボスニア・ヘルツェゴビナの東北端、2003年現在の人口は周辺の村をすべて含めてもわずか1万数千。ボスニア・ヘルツェゴビナの数ある都市の中で、こと人口や経済活動でみる限り、その存在感はほとんどない。しかし1990年代前半バルカン半島を揺るがした旧ユーゴスラビア連邦の崩壊過程を振り返るとき、スレブレニツァの名はあまりにも大きい。スレブレニツァの悲劇こそが、国際社会を震撼させ、ボスニア戦争を一気に終結へと向かわせる導火線となった。その結果生まれた Dayton 協定は、バルカン半島の西半分、アドリア海に面したほぼ全域を支配していた旧ユーゴスラビア連邦を歴史の中に葬り去った。

私は2003年春と夏、文教ボランティアズの学生と共にスレブレニツァを訪れた。それまでも訪れた地ではあったが、2003年の訪問は特に感慨深いものとなった。何よりも私の心を打ったのは、スレブレニツァもまた、ボスニア戦争終結8年目にしてようやく紛争後の復興に向けて本格的な一歩を歩みだしていたことである。スレブレニツァの悲劇により、力づくでセルビア系単一民族社会に変えてしまった残虐さと冷酷さを象徴していた町が、ボスニアの複合民族社会がかもし出す多様性を多少とも目に見える形で取り戻し始めていた。

ボスニア戦争が何であったかを語るのとは別の機会に譲るとして、民族浄化と呼ばれたセルビア系によるボスニア人（モスLEM）に対する追放・虐殺行為は、第二次大戦後ヨーロッパで起きた最悪の民族浄化事件となった。国連安保理が安全地帯と宣言し、平和維持軍を配していたその真ただ中で、7千人以上の男が数日のうちに犠牲になったのである。命こそ奪われなかったものの、女、子供たちは、肉親が殺害される悲鳴を聞き、道端に転がる故郷の同胞たちの遺体を目にしながら町を追われた。国連安保理決議により送られた国連平和維持活動の無力ぶりを見せ付けられると同時に、文明社会の人間でもかくも残酷になれるものかを思い知らされる事件でもあった。スレブレニツァはボスニアで起きた数ある悲劇の頂点に位置するものとして記憶される。

2003年春のスレブレニツァ訪問は、これら犠牲者たちの確認遺体のうちの最初の600体がスレブレニツァの町はずれで初めて埋葬される式典の日に重なった。殺害され、その証拠を隠すために埋められ、ハーグの戦争法廷の検察の手で検証され、そしてスレブレニツァに送り返された遺体である。生存している家族の大半は、95年7月の事件以来サ

ラエボなど避難先で生活を続けており、身内の遺体だけが先にスレブレニツァに戻った格好だった。

国連開発計画はこのスレブレニツァの地域復興計画に、2002 年秋やっと本格的に乗り出した。スレブレニツァで生活を支える産業を確保し、住宅を再建し、学校その他の社会基盤を整備して初めてスレブレニツァの元住民を復帰させることが可能になる。戦争前スレブレニツァの人口は 2 万数千を数え、その大多数はボスニア人（モスLEM）だった。今始まったばかりの復興計画は、周辺の村に千人あまりのモスLEM住民を帰還させたところである。大半は母子家庭だ。なぜなら男たちは非人道的殺戮の犠牲者になってしまったからである。男のいない家庭の経済自立策は容易ではない。それでもボスニア人（モスLEM）もセルビア系も、元住んでいた町や村に帰還させることにより、ボスニアの複合民族社会の復活・再建が初めて軌道に乗る。

春に次いだ夏の訪問では、学生たちはこうした帰還ボスニア人たちの村を訪れた。ひとつの村はドリナ川の峡谷を見下ろす稜線にあった。ドリナ川。イボ・アンドレッチが川を取り巻く住民の数百年にわたる苦節を描いて1961年度ノーベル文学賞を受賞した「ドリナの橋」のあのボスニアとセルビアを仕切る川である。平らなのは家を建てるためにならした場所だけ。峡谷は深い緑の森に覆われ、一気にドリナ川に落下している。林業の可能性は推測できても、女世帯の手に負えるものでないことは明らかだ。

学生たちは、日本で集めた衣類や文房具、スポーツ用品をこの村に届けた。今建設されている学校ができれば、子供たちはその日握り締めた鉛筆を今度は文字を学ぶために握り直すだろう。平地らしいものはまずないこの地で、子供たちは届けられたサッカーボールを谷底に蹴落としては競って急斜面を駆け下りる体力競争に興じるだろう。寒気が忍び寄るとき、スポーツ店から寄贈されたスポーツジャケットや多くの協力者から託されたセーターは人々の戸外での活動を可能にすることだろう。

紛争地を訪れたとき、学生たちは戦争について、非人道的行為について、大量殺戮について、民族について、宗教について、国際社会と国連について、日本の存在感について、女所帯の生活について、学校再建の必要について、地球を共にする個人の役割について等等、多くの問題を自らの問題として目の前に突きつけられる。生まれ出る小鳥が自らタマゴの殻を破るように、学生もまたこのとき初めて、平和な日本に生まれ育った殻は自ら破らなければならない作業が待ち受けていることを学ぶ。

文教ボランティアズはまもなく 3 年目の活動を終える。これまで活動に参加した学生たちは何に苦勞し、何を得たか。今回国際学部国際ボランティア委員会の委員の先生の指導の下に総合的なアンケート調査を行った。この報告集にはとりあえずその集計結果を掲載する。さまざまな読み方があるのは当然だが、私たちとしては、調査結果に示された意識や問題とそのさらに裏にある意志までも読み取って、学生の将来の可能性を広げる一助にしたいと考えている。

東ティモール 春



支援物資をリキシャ中学校とバギア村孤児院に届けました。



子供たちと。
(リキシャ中学校)



歓迎会にて物資を渡している様子。



ピアノカで遊ぶ子供。(バギア村孤児院)

マングローブ植林



マングローブ植林の準備をする。横断幕(上) 苗の選別(右)



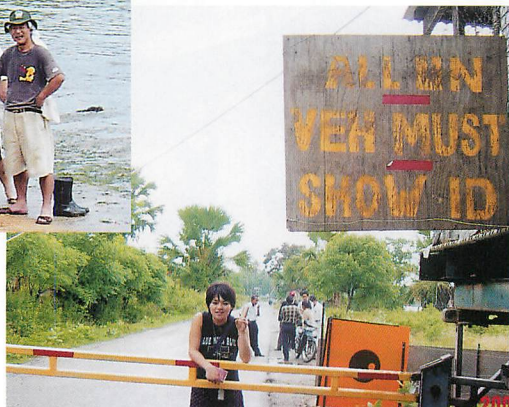
マングローブの苗取り。



共に働いた現地の仲間と。



春のメンバー(マングローブ植林)



東ティモールと西ティモールの国境。



春の活動に参加した島袋節子さんは、帰国後急性骨髄性白血病のため亡くなりました。

東ティモール 夏

出発前

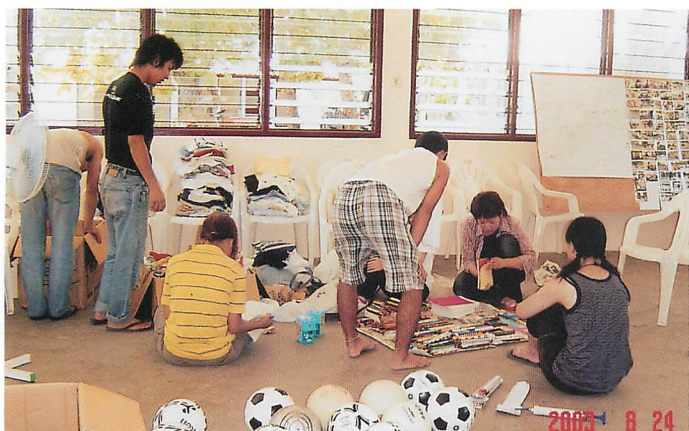


成田空港にて。



茅ヶ崎駅前での募金活動。

オイスカ農業研修センター



支援物資の仕分けと最終確認。



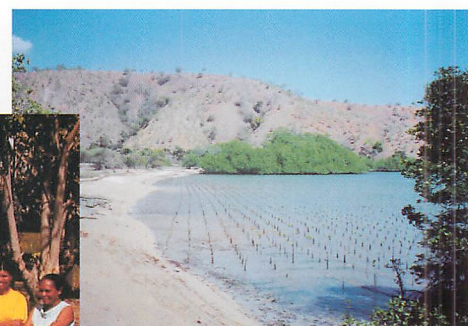
研修センターの畑で、研修生と共に農作業。



マングローブ植林で支柱に使う竹の準備。



全員で「ハイ、チーズ!」



マングローブ植林後。
(奥の方が今回植林したところ)

バギア村



最後の夜、子供たちとお別れパーティー。



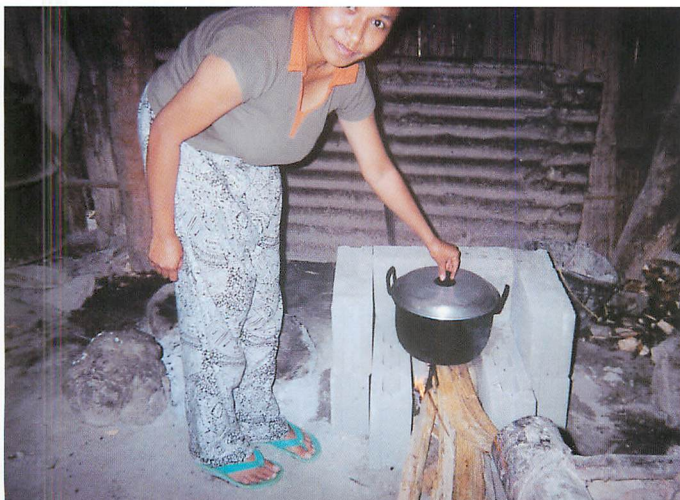
孤児院の子供たちに支援物資を渡す。「みんな大切に使ってくれよな!」



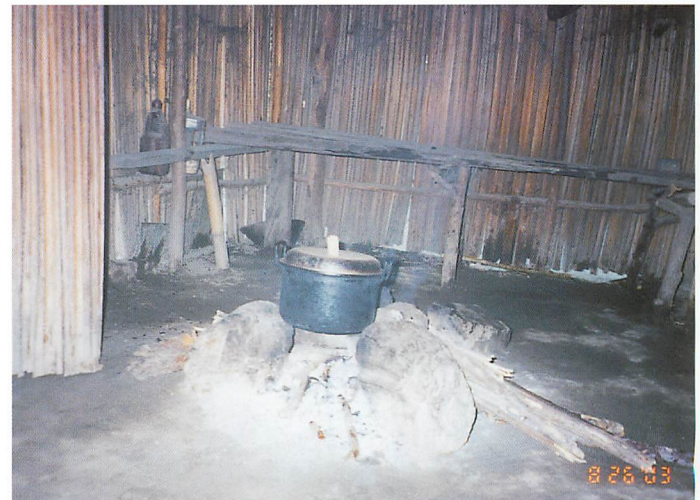
村の子供たちと一緒にゴミ拾い。空き缶、ペットボトル、ビニール袋などたくさん捨ててあった。



村の人々を集めて「ブロックを使ったかまど」と「石を使ったかまど」のデモンストレーションの風景。皆、熱心であった。



小学校の先生宅に設置させていただいたかまど。使い心地はどうかしら?



リキシャの近所の家で見た伝統的なかまど。



昨年12月の暴動の跡。



被害を受けたスーパーマーケット。



バギア村に向かう途中、パウカウの町の市場で食糧調達。



リキシャの中学校の校長先生の自宅。調布第五中学校からいただいたメッセージ。



リキシャの孤児院。「日本からのプレゼント!」



AFMET（東ティモール医療友の会:ロスパロス）の松田さん。訪れる患者の多くが下痢だという。

東ティモール活動報告

2003年2月18日～3月4日

8月22日～9月5日

参加者

<2月18日～3月4日>

文教大学国際学部国際関係学科

同

同

同

同

同

文教大学国際学部国際コミュニケーション学科

同

4年 菊地領治

4年 太田弓子

4年 関谷香織

3年 五十嵐美穂

3年 櫻田やよい

3年 堀江俊太

3年 岩井史絵

3年 長橋宏明

<8月22日～9月5日>

文教大学国際学部国際関係学科

同

同

同

同

同

4年 関谷香織

4年 太田弓子

4年 湯田彩子

3年 島袋節子

3年 白羽根竜

3年 鈴木麻衣

アドバイザー 文教大学国際学部教授

中村恭一

活動スケジュール

春

2月18日	成田空港発	インドネシア・デンバサール着
19日	デンバサール発 東ティモール・ディリ着	オイスカ研修センター(リキシャ)へ マングローブ植林の横断幕作成
20日	バギア村孤児院へ 途中、バウカウのホテルで1泊	
21日	バギア村孤児院訪問	
22日	マングローブ植林のための苗木採取	オイスカの事務所にて苗木整理
23日	マングローブ植林(ティバール湾)	
24日	モバラの学校訪問、交歓会、JICAディリ事務所訪問	
25日	PKOマリアナ駐屯地訪問、現場視察	西ティモールへ視察 ソエ着
26日	ソエ発 アタンブア着	
27日	アタンブア発 東ティモール入国、センターへ	
28日	ディリの港の起工式参加	日本大使館、UNMISSET本部表 敬訪問
3月1日	日本のPKO本部基地へ表敬訪問(ディリ)	
2日	マングローブ植林	
3日	ディリ発 デンバサール着 夕食後、成田空港へ	
4日	成田空港着	

夏

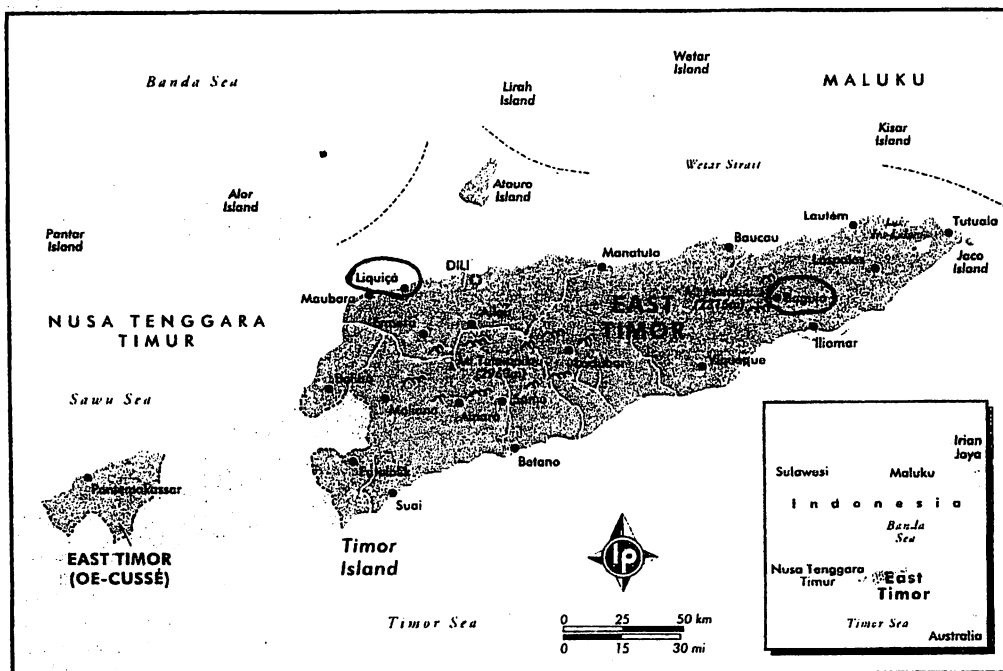
8月22日	成田発	バリ・デンバサール着
23日	デンバサール発 東ティモール・ディリ着	OISCA職業訓練センターへ
24日	リキシャ教会、日本軍要塞見学	支援物資整理
25日	職業訓練センターにて活動	
26日	ディリ市内で物資調達	JICA、UNDP表敬訪問
27日	リキシャ孤児院訪問	職業訓練センターにて活動
28日	東ティモール農業副大臣ならびに日本大使職業訓練センター視察の準備	
29日	職業訓練センターにて活動	
30日	マングローブ植林準備	マングローブ植林活動
31日	バギア村へ向け出発	バギア村着
9月1日	かまどのデモンストレーション、設置	孤児院にて活動
2日	小学校の先生宅訪問、かまど設置	支援物資贈呈 お別れパーティー
3日	ロスパロスへ AFMET 訪問	職業訓練センター着
4日	ディリ市内へ買い出し	お別れパーティー
5日	ディリ発 デンバサールへ	空港にて解散

ボランティア活動総括報告

21世紀最初の独立国東ティモール

東ティモール問題は植民地支配の時代に端を発し、未だにその歴史に引きずられている。16世紀、インド洋に進出したポルトガルはティモールにたどり着き植民地とした。その後、進出してきたオランダとの植民地争奪戦の結果、19世紀に、東はポルトガル西はオランダと分けられた。1880年代人頭税の導入によって大きな反乱が起き、反乱は20世紀初頭まで続いた。1942～1945年は日本軍がティモール島に侵攻し4万人以上が犠牲になったことも忘れてはならない。第二次世界大戦後、アジアで民族運動やアフリカで植民地支配からの独立運動が起き、東ティモールもこの影響を受けた。1974年ポルトガルでのクーデターによる独裁政権の崩壊によって東ティモールでも独立の準備が進み政党が誕生した。400年に及ぶ他国からの植民地支配から解放されるはずの東ティモールの独立をインドネシアが拒み、軍事侵略を行った。1975～1988年までの13年間、各国の議員や国際機関の視察や活動をインドネシアは受け入れず、多くの犠牲がでていながらも関わらず外の世界から閉ざされている状態であった。軍事占領下の生活は、経済的支配、暴力や虐殺、文化的抹殺など相当なものだった。1999年8月30日独立のための「直接投票」後、併合派民兵及びインドネシア軍により破壊活動が行われた。破壊や暴力の激化にやっと国際社会も事態の深刻さに気づき、国連や多国籍軍などが展開した。インドネシア併合時代（1975～1999）に建設された施設の殆どが破壊されて東ティモールの人口約80万人がゼロからの出発を余儀なくされ、21世紀初の独立国として2002年5月20日、命をかけた望んだ独立をつかんだ。

<地図>



概要

私たちは、2002年の春、夏に続き、2003年も春・夏と東ティモールでボランティア活動を行った。主な活動は、バギア村孤児院支援活動、日本の農村開発国際 NGO オイスカ・インターナショナル東ティモール研修センターでの活動、マングローブ植林、簡易かまど推進活動である。

春活動に参加したメンバーは、文教大学国際学部4年生3人（女子3）と同3年生3人（女子2、男子1）の計6人。夏の活動では、文教大学国際学部4年生3人（女子2、男子1）と同3年生5人（女子3、男子2）の計8人が参加した。

出発前の活動

春・夏ともに、私たちは、事前活動として支援物資収集、募金活動を行った。学校では、校内にはチラシを貼り、昼休みには横断幕を持ってキャンパス内で呼びかけをし、茅ヶ崎駅では一般市民の協力を求めた。孤児院の子供たちのために、大量の子供服や文房具が必要なので、私たちの活動に賛同してくださっている中学、幼稚園、メンバーの母校である小学校や、アルバイト先の学童保育にも呼びかけをした。その結果、多くの衣料品、文房具が集まった。スポーツ用品や楽器類も、スポーツ用品店や幼稚園の協力で集めることができた。

募金活動は、主に茅ヶ崎駅前でを行った。多くの通行人が私たちの活動に賛同してくださった。私たちの活動が、茅ヶ崎タウンニュースで紹介されるとまたさまざまな市民から物資提供の申し出があった。

長期休暇に入ると、支援物資の整理に追われた。衣類、文房具が大量に集まったので仕分けは大変であったが、みなさんの善意でいただいた支援物資なのでなるべく多く持っていけるようにダンボールに詰め込んだ。飛行機での移動には、一人20キロまでの重量制限がある。春の活動では150ドルの超過料金を支払った。夏の活動では重量超過を考え、ダンボールに入りきらないものは、個人の荷物として重量制限ぎりぎりまで支援物資を詰め込んだ。

バギア孤児院支援

昨年の夏から支援を続けているバギア村の孤児院での活動を春・夏ともに行った。春・夏ともレンタカーを借りバギア村孤児院へと向かったが、春は首都ディリとバギア村の中間地点のバウカウで2台のうちの1台が故障したためバウカウでの一泊を余儀なくされた。孤児院で一泊し子供たちと一緒に過ごす予定であったのだが、車のトラブルのためバギア村に3時間だけの滞在となってしまった。

夏は、孤児院に3泊して孤児たちと一緒に生活をした。その中で、孤児たち、村の子供たちと一緒にあって、村の道端や孤児院前に落ちているゴミを拾い、清掃する美化運動を実践した。手洗いを呼びかけるポスター作りもした。子供たちと、サッカーをしたり、踊ったり、歌ったりして、孤児たちにも心から笑えるほどの開放感と励ましを与えることができた。最後の夜は孤児院の子供たちとお別れパーティー。私たちは日本から持ってきたカレールーで、

カレーを作り、孤児たちをもてなした。孤児たちは、残さず食べた。パーティーでは、日本の歌を歌った。聞きなれない日本語の歌でも子供たちは真似をし、一緒になって歌った。私たちが歌い終わった後に、子供たちが東ティモールの歌やダンス、遊びを教えてくれて、一緒になってはしゃいだ。

かまどプロジェクト

今回、新たな試みとして簡易かまどプロジェクトをバギア村とモバラ村で行った。バギア村では、かまどのデモンストレーションをし、石を使用した通常のかまどとブロックを使用したかまどでどちらが早く水を沸かせることができるかを比べた。その時には、急な呼びかけにもかかわらず、多くの村人たちが来て熱心に見てくれた。中には、ブロックかまどの方が良いのは分かっているが、2ドルもかかるのでは高額すぎて買えないと、バギアの経済状態を教えてくれる人がいた。その話では、バギア村の小学校の費用は生徒一人月1ドルであるが、ほとんどの人が苦しい中でやりくりしているという話だった。モバラ村でも同様に30セントの学費を払えない人がほとんどだという。この話を聞いたとき、私たちは、東ティモールの経済状態の厳しさを痛感した。かまど調査を通じて、東ティモールの人々の生活、経済状態を見ることができた。

リキシャ中学校訪問

春の活動からオイスカ研修センターのある地域の中学校（Escola Primeria N:2 Mamboque）訪問をして、生徒たちの実表理解と支援活動を始めた。この活動に共鳴して東京・調布第5中学校の先生の呼びかけで生徒が激励と交流のためにポスターを制作してくれたので、支援物資と共に校長先生と生徒（480人）に手渡した。春の訪問で文房具や楽器などの教材が不足している現状を知り、夏は文房具、楽器類を多く用意した。学校が夏の長期休暇に入っており私たちの滞在期間中に生徒に直接渡すことは実現しなかったが、支援物資は校長先生に責任を持って渡すことができた。

オイスカ農業研修センター（OISCA Training Center）

春、夏とも日本の農村開発国際 NGO であるオイスカ・インターナショナルの東ティモール研修センターで宿舎をはじめとしてお世話になった。私たちの活動の拠点とさせていただきだけでなく、センターの農業開発研修と、マングローブ植林を体験させてもらった。センターは2003年6月、それまであった施設を全面的に改修して新たなスタートをきった。9月私たちが訪問時にいた研修生が第1期生だった。

春の活動ではセンターで使用する苗の買い付けのために西ティモールに同行して、東西両ティモールの生活格差の違いを実感した。西ティモールでは騒乱時に罪を犯したために東ティモールに帰還できずにいる難民との問題もおきていた。

同センター主催のマングローブ植林プロジェクトにも昨年の夏から数えて計3回参加し

た。そしてついに 2003 年夏の活動で、リキシヤの町近くのティバル海岸をマングローブの幼木で埋め尽くした。私たちも参加して、大勢の人々と協力して一つのことを成し遂げたという達成感は何物にも変えがたい。

出会いから学ぶこと

東ティモールの人々は始めとても恥ずかしがりやだった。だが、一度親しくなると陽気で優しく積極的で「熱血」という言葉があてはまる人たちという印象を受けた。人々のこのような活気ある気性が東ティモールを独立に導いたのだろう。だが、独立を手放しで喜んでばかりはいられない彼らの複雑な心情を垣間見ることもあった。会話の中で「ライク ジャボン。ライク ユー。」と何度も繰り返して言ってくれた人がいた。私たちはとてもうれしくなり東ティモールに来て本当によかった、みんなに会えて嬉しかったと一生懸命伝えようと「I like East Timor too.」言った。しかし、彼らは不思議そうな顔をした。長い苦しみの戦いを乗り越えてやっとの思いで手に入れた独立。彼らは強い愛国心を持っているものだと思っていた。しかし実際のところは独立の感動も徐々に薄れ、かつて自国のために戦った兵士も今や職にあふれ貧しい生活を強いられている。彼らは自分たちの生活や、自国の存在意義に疑問を持ち始めているのだという。

東ティモールの子供たちはカメラが好きだ。挨拶しても恥ずかしそうに、はにかむだけなのに「フォト！」と一声かけると何処からともなく集まってくる。何処の国でも子供の無邪気さは同じなのだとしみじみ思った。彼らは満面の笑みで私たちを歓迎してくれた。彼らとともに笑い、はしゃぎ回ったことは素晴らしい思い出となった。子供たちに物を与えるだけのことは一概にいいこととは言えない。特に顔の見えない援助は子供たちにとってただの「モノ」でしかないのではないだろうか。肝心なのは送る側がプレゼントにどのようなメッセージを込めるか。受け取った子供たちがいずれ込められたメッセージに気づき自ら行動を起こす「きっかけ」を含ませてもらわなければならないのではないだろうか。だからこそ私たちは道なき道を延々と走り、数々のアクシデントを乗り越えてまでも遠く離れたバギア村の子供たちに長い時間をかけて会いに行くのだろう。ごく限られた時間ではあるが、子供たちの笑顔に出会い、手から手へ物資を渡したことに意義があったと確信している。

私たちの活動はたくさんの人々の助けがあったからこそ、実現できた。私たちの活動もまた多くのボランティアに支えられていることを改めて実感した。誰かのために無償で何かをする、人を助けるということは、経済面、精神面、全てにおいて自分自身が安定していなければならない、技術や知識など一緒に共有していくための「何か」を身に付けていることの必要性を感じた。今の私たちにはそのようにできるまで成長していない。しかし自発的に問題を抱える地域に向かい多くの助けを受けながらも、農作業やマングローブを植える少しばかりの労力を提供し、孤児院の子供たち研修生を激励することはできたと思う。そして素晴らしい出会いと未知の経験を私たちは得た。人に「どうしてボランティアのために高い旅費をだしてまで危険な場所に行くのか。」と尋ねられることがある。人を成長させる要因は人そ

れぞれ異なるが、私たちは東ティモールでの経験を通して新たな自己を発見し、人それぞれが持つ多様な価値観を理解することの重要性に気づくことができたことは私たちが行く意味の一つだと思う。今後、国際協力やビジネスなどフィールドは様々であっても個々の存在が周囲に良い影響をもたらす様な人間を目指して日々努力し成長していきたい。

今回の活動を終え、独立して間もない国でのボランティア活動を通して、実際に起こっている様々な問題や課題を直接肌で感じるという貴重な経験を積むことができた。

学生がこのような支援活動をしていく上で、ネックになるのが活動資金である。NGOのように大きなプロジェクトを動かせる資金はない。だが、学生には時間がある。その時間を活用していくことで、資金を使った活動とは別な貢献の方法があることを私たちは確認できたように思う。たとえば孤児院の支援がそうである。心のこもった子供たちを励ます活動は私たち学生だからこそ、子供たちにもっとも喜ばれる形で行えるように思う。

また私たちが行っているバギア孤児院支援活動のように、毎年続けていくことで村人たちとの信頼関係も生まれ、村人たちが何を求めているのかもより正確に理解できるようになるのだと思う。こういう信頼・友情関係から次の支援活動も見えてくるのだろう。

ボランティア活動もまた継続していくことこそ重要であると感じた。

私たちの活動を支えてくださった学内、学外の多くの皆様、ありがとうございました。

中村恭一ゼミのメンバーであり、春の活動にも参加した島袋節子は帰国後すぐに体調を崩し闘病生活をおくっていましたが5月に急性骨髄性白血病のため亡くなりました。あまりにも早すぎる彼女の死に戸惑いました。私たちに出来ることは彼女の意志を受け継ぎ、これからの東ティモールを見とどけることだと思えます。この場をお借りして節子のご冥福をお祈りいたします。



オイスカ農業研修センター

私たち文教ボランティアズにとって東ティモールでボランティア活動をするうえで、活動の拠点となったのが日本の国際農業開発支援 NGO であるオイスカ・インターナショナルが主催するオイスカ農業研修センター (OISCA TRAINING CENTER) だった。センターの協力で、3年生は8月23日から9月5日まで、4年生は9月10日まで、バギア村訪問の4日間を除く全期間センターに滞在した。このためセンターで現地の研修生と共にした生活を通して得られたものが多くあった。

まずセンターの概要を報告したい。OISCA TRAINING CENTER は、もともとインドネシア政府が95年4月に設立した施設だが、99年の騒動の際に破壊されたままになっていた。このためオイスカ・インターナショナルが東ティモール政府の要請を受けて日本の ODA で修復、このほど日本の草の根無償資金で東ティモールの青年たちに農業技術を訓練する場として活動を再開した。

日本やインドネシアから農業をはじめ、養鶏、環境保護の専門家を招き、現地研修生に理論と実技を訓練している。

センターで研修中のスケジュールは、月曜から土曜日まで朝6時起床、10時消灯の規則正しい生活で、農業研修に加え夕食後は自主的な日本語研修も行っている。

研修センター長はオイスカ・インターナショナル常務理事で、現在東ティモール駐在代表の新屋敷道保さん。私たちが滞在中の第1期研修生の年齢層は20歳から30代半ばで、女性が3人、男性が8人の計11人だった。みんな地元のベテランズ協会などから推薦されたいわば地元のホープである。

それぞれの分野で指導をするスタッフは、新屋敷所長の他に日本人とインドネシア人の農業専門家各1人、地元の専門家2人、それに通訳の日本人女性が1人、3食の食事担当の現地女性が1人。

私たちが滞在している間の研修内容は、農作物の栽培、農業の基本である土壌改良・コンポスト作り、養鶏などだった。

東ティモールは島全体が火山島で、生活用水にも石灰成分が多く含まれている。そのため農作物にふさわしい水とは言えない。加えて東ティモールは、乾季と雨季がはっきりしており、乾季の間は雨らしい雨が全く降らない。このため土壌作りが何よりも重要である。センターのコンポスト作りに使う肥料は牛糞で、この牛糞は牛の糞を集めて商売としている人々から買い取っている。2日ごとにトラックで運び込み、乾燥させてから砕いて土とよくまぜる。この作業に私たちも参加したが、重労働だった。大量の肥料をスコップで砕くが、機械で行えば難作業でないのは明らかだが、現地の人が、現地にある道具だけを使って効率よく作業する訓練が必要で、これが農業開発の第一歩だとスタッフの専門家たちは強調していた。

センターでの滞在中は共同生活であったため、私たちはできるだけセンターのスケジュールに合わせて生活した。朝は6時起床、6時45分から点呼と体操。7時から朝食。そして8時からそれぞれ分野ごとに分かれての研修の開始。

農業経験のない私たちも多くのことを経験した。水まきや植え、牛糞のコンポスト作り。この外、生簀の清掃、料理の手伝いや後片付けの手伝いをした。

現地のほぼ同年代の研修生と一緒に生活できたことは、私達にとってかけがえのない経験であり、出会いとなった。研修生とは、英語もインドネシア語も日本語もあまり通じないため、研修生達が普段使うテトゥン語という現地語を使い、私達は英語・テトゥン語の辞書を片手に片言の会話に挑んだ。もちろん十分なコミュニケーションではなかったが、それでも色々な事を話し、活動を共にした。

現地の人たちと生活していて、文化の違いをととても感じた。言葉はもちろんのこと、習慣や価値観、その他多くのことで、異文化を意識させられた。日本では紙の上でしか知ることができなかったものを、直接、現地に行って感じる事ができたと思う。そして、ここでの出来事はこれからの私たちに多くの影響を与えるものになると確信できる。多くの人に支えられながらの農業研修体験は、本当に有意義だったと思う。新屋敷所長はじめ現地の関係者の皆さんに心から感謝している。

かまどプロジェクト

昨年からの援助を続けている東ティモールのバギア村で、今回私たちは『簡易かまど推進プロジェクト』に挑んだ。バギア村は東ティモールの東部、東ティモール第2の都市バウカウからさらに4輪駆動車で険しい山道を3時間南に入った陸の孤島のような村である。石ころが露出し、急な上りや下りの坂が続く。そして乾季で激しい流れこそなかったが、川床も越えていく。雨季には車での移動も日によっては不能になるとも聞いた。

東ティモールの一般家庭で使われているかまどは、3つの石を三角形に頂点の位置に置き、その上に鍋をのせるという、いたってシンプルなものである。この一般的なかまどの欠点は、石を置いただけであるため三方に大きな隙間ができ、風通しがいいため薪はよく燃えるものの燃え上がる火がどんどん逃げてしまうので熱効率が実に悪い。その結果当然多くの薪が必要となる。「薪となる木を毎日のように山から切り出すために、東ティモールの山ははげしてしまい、今大きな環境問題となっている」と聞いた。「少しでも熱効率をよくし、薪の使用量を減らせるかまどを普及させれば山林の保護にも役立つ」と先生から聞いていた話から、私たちは簡易かまどプロジェクトに取り組むことにしたのである。

私たちが考案したかまどは、8個のブロックを組み立てるだけという実に簡単なものであ

る。つまり 2 段に積んだブロックで 3 方を囲い、その内側に左右 1 個ずつのブロックを置いて、鍋を載せる台にする。その下で薪を燃やすのである。当初セメントで固定することを考えたが、セメントで固めないことによって、むしろ風向きやその他の都合で設置場所や焚き付け口の向きを自由に変えられるという利点がある。また例え 8 個のブロックのどれかが破損しても、壊れたブロックだけを取り替えればよい。

ブロックを使用する理由は、まずブロックを使用することによって周囲の隙間をなくして火の逃げるのを防ぎ、熱効率を大幅に高めることができる。次いで東ティモールでもブロックを購入することができる。3 番目に、1 つのかまどを製作するのに必要なブロックは 8 個で、現地ではブロックが 1 個 25 セントのため 2 ドルでかまどを作ることができる。ともかくも実際にどれだけ有効か、また現地の人たちがどのように反応するかを見るために、私たちは首都ディリの建材店でブロック 50 個を購入し、試しに数件の家に無償で提供して、効果を見てもらうことにした。

そこで孤児院支援が第一目的のバギア村訪問で、同時にこの簡易かまどプロジェクトも試すことにした。村人たちは周囲の山から薪を切り出してくるが、適当な薪が取れる場所も次第に村の中心地から距離が伸びているという話も聞いていた。

バギア村の人たちにまず試作品を見てもらったうえで、同意を得られた 3 軒の家にモデルかまどを設置することになった。第 1 番目はバギア村の孤児院の管理人であり、いわば村長でもある村代表のルイスさんの自宅。村のリーダーの自宅に設置すれば、多くの村人に見てもらえる。組み立て終わって、試験的に薪を燃やしてみると、ルイスさんの奥さんがとても気に入って、ただちに「もう 1 つ作ってほしい」と要望した。つまり 6 個のブロックで作った囲いに、さらに 4 個を加えらるともう一つ隣接したかまどができ、内側に 2 個ずつの鍋台用のブロックを据えれば、大きな鍋を同時に二つ火にかけることができる。

2 番目は小学校の先生であるルイス・マニエル・ダ・コンセイソンさんの家。バギア村の中心部にある教会の前で、村の人々にかまどを披露したとき、誰よりも早くブロックかまどの効果を理解してくれたのが先生だった。熱効率向上による薪の節約と環境保護効果をたちまち理解してくれたコンセイソンさんはさすがに学校の先生だ。先生がかまど効果を確認してくれれば、また理解の広がりにつながるはずである。先生の自宅に設置すると、先生はすぐに近所の家にもと紹介してくれた。

そして 4 つ目のかまどは、首都ディリ東方約 40 キロの私たちが滞在したオイスカ訓練センターのあるモバラという村の家に設置された。この家はセンターの研修生マリアノの自宅。東ティモールの普通の民家のかまどがどんなものか最初に見せてくれた家である。マリアノはセンターの空き地で実験かまどを作ったとき、すぐ欲しいと思ったそうだが、2 ドルも出してブロックを買う余裕はまったくないということだった。

かまどプロジェクトを試すことで、バギア村をはじめとする東ティモールの問題点も私たちには見えてきた。かまど 1 つ作るのにかかる費用 2 ドルは、現地の人々にとっては実に大金であることが分かったのである。バギア村の人々は基本的には自給自足の生活で、どうし

でもお金が必要となれば自分たちの家畜（にわとり、豚、牛等）を売ってお金にする。日常的には現金の定収入がないために、お金の余裕はまったくない。子供の教育費にも苦勞している。バギア村の小学校に通わせるのに、子供 1 人に月 1 ドル、中学校は 2 ドル。かまどを買うお金で子供を小学校に 2 カ月通わせることができる。2 ドルを払って新しいかまどを作るなら、子供の教育費に充てたいという。かまどは大きめの石ころ 3 個拾ってくればいつでも作れる。薪は山から取ってくる。山林破壊の問題とか環境保護とかは、余裕のある人々が考える話である。私たちは貧しい途上国の現実を突きつけられた。

また例えかまどの効果が理解でき、2 ドル用意できたとしても、すぐにかまどを設置することは不可能だ。交通手段は十分でない、山道は険しい。バギア村ではブロックなど売っていないため、3 時間かけてバウカウまで買いに行かなければならない。車を持っている人でさえも町に行く燃料費がまず問題だ。このような状況からバギア村で村人自身の力でかまどを普及させることは、事実上不可能だということが分かった。モバラでも同様で、やはり収入を考えたら新しいかまどを購入することは、厳しいということであった。両村ともそうだが、無償で提供してもらえらるなら是非ほしいというのが、村人たちの反応だった。

目の前で同じ大きさの鍋の水を沸騰させるのに必要な薪の量の違いを見せられると、効率という問題は村人たちにも十分理解されたようだ。その点で私たちのかまどプロジェクトの試みは、意味があった。私たちは今回の活動でかなりの情報を得ることができた。次回の訪問時には、今回の反省と発見を生かして、このプロジェクトを続けていきたいと思う。

マングローブ植林活動

2003年 春

私達は、日本の NGO オイスカ・インターナショナルのマングローブ植林にボランティアとして、参加した。用意されたマングローブの苗木を植えても、ただ植える体験をするということに終わるだけに、私達はマングローブの苗木採取というマングローブ植林の全過程を体験することに挑んだ。

2月22日午前6時半、私達は、首都ディリの西方40キロにあるモバラ村に位置する、施設が完成したばかりのオイスカ訓練センターを出発して車で40分、ディリ市内を通り抜けてモバラ村とは反対のディリ東方にあるマングローブ林に到着した。オイスカが雇った約10人の現地の人に案内されて、マングローブ林に入った。美しい穏やかな海も、引き潮になると茶色の粘土質の地面が顔を出す。いざ粘土質の海岸に入ると、足が膝まで泥に沈み、身動きがとれなくなる。やっと片端を泥から引き抜いたかと思うと、今度は踏ん張ったもう一方の足が泥に沈んでまた動けないという有様。こういう繰り返しをしながらやっとのことで少し前へ進む。そして泥の中深く根を張った約50センチの高さの苗木を見つけうまく引き抜い

た時は、大きな喜びと大きな達成感を得ることが出来た。

採ったマングローブの苗を一箇所にまとめ、植林する際に持ち運びが出来るよう分ける作業を行った。ただ揃えて紐で縛っていくのではなく、どのようにしたら持ちやすく、作業が分かりやすいかという気遣いや配慮を学ぶことが出来た。

翌 23 日、午前 7 時にセンターを出発し、車で約 20 分の所にあるリキシヤの海岸に到着。この日の植林活動参加者は、私達の他に現地住民や JICA 東ティモール駐在員、東ティモール PKO 部隊の非番の陸上自衛隊員 50 人らに加えて、総勢 100 人以上に上った。

文教ボランティアズを代表する中村恭一先生や自衛隊代表らの挨拶も終わると、1 チーム約 15 人の各組織混成のチームをつくり、植林がスタートした。用意された苗木は全部で 3000 本だ。引き潮を待って海に入り、苗木を運び、スコップで土を掘り、60 センチの長さの支柱を立て、苗木と竹を次々と紐で縛っていく。苗木が潮の干潮で流されたり、あるいは支柱の竹にすれて茎が傷ついたり折れたりしないように丁寧に作業を行っていくことは、凸凹が激しく安定しない足元のまま中腰で作業するという神経を使う作業だった。しかし作業の合間にも、東ティモールの国連機関で働く日本人職員や大使館関係者、同じ年頃の若い自衛隊員ら多くの人とコミュニケーションがとれ、仲良くなり、作業がとても楽しかった。

引き潮の 2 時間余りの作業で、用意されたマングローブの苗木が植え終わった。縦・横ときれいに整列して植えられた苗が海面からすくと立っている光景を目にしたときは、今まで味わったことがない満足感がこみ上げてきた。

東ティモールの人々の多くは、農業で生活している者も、仕事のない人も非常に多い。私達が植えたマングローブによって、海中に植物プランクトンが発生し、それを食べる魚も集まるようになるという。またマングローブガニなども棲みつくようになる。そうすれば漁業で生活することも可能になる。マングローブ林の育成は 1 石 2 鳥にも 3 鳥にもなるという話である。

マングローブ植林一つ取っても、かけがえのない地球の自然を守り育てるということは、とても大変なことで生半可な気持ちでは出来ないと実感した。今回のマングローブ植林活動から、その活動の意義や目的をしっかりと考えることの大切さを学んだ。東ティモールは、マングローブの成長ぶりをすぐ見に行けるようなところではないが、私達が植えたマングローブが無事成長し、人々の役に立つことを心から願っている。

2003年 夏

2003年夏訪問のボランティアズもまた、マングローブを植樹することになった。

嬉しいことに春植えたマングローブは立派に成長していた。背が伸び、茎も太くなり、何より大きな葉がついていたことが驚きだった。マングローブのおかげで小魚が浜辺にまでやってくるようになり、投網を打つ猟師親子の姿がマングローブ幼木の間にずっと見えていた。春には見られなかった光景で、既に小魚が棲みついている証拠だ。栄養がないといわれていた海が少しずつ変わりつつあった。

夏のオイスカ主催のマングローブ植林活動はすでに終わっていたが、私たち文教ボランティアズのために苗木と植林する海岸が新屋敷オイスカ訓練センター所長の配慮で確保されて

いた。春とは違い、今回は文教大学生の他には自衛隊員のボランティア 2 人とオイスカセンターでインターン中の大学院生 1 人だけの活動だったが、文教大学生に任された植林場所は思っていたよりも広がった。

マングローブ植林をする前日、私達はまず竹割りを行った。この竹割りは植林になくてはならない、最も重要な作業の一つである。竹はマングローブの添え木に使われる。そのため、丸い竹を 60 センチほどの長さに切って、8 等分に細く割る。マングローブが傷つくので竹のふしを取り除き、片方の先端を三角に槍のように尖らせる。そうすることで泥の中にうまく竹を刺して、しっかりと立てることができる。この竹割りも経験と慣れとコツが必要だ。竹を割るのにナタを使うのだが、そのナタが使いづらいものばかりだったが、オイスカの現地研修生に手伝ってもらいながら、意地と根性でなんとか竹割りを終えることができた。

植林当日は潮が引く時間を見計らってすべての準備を整える。この作業も容易ではない。オイスカの研修センターに保存されていたマングローブを 500 本引き抜き、20 本ずつの束にまとめる。竹とマングローブを縛るビニール紐を用意する。いざトラックに積み込むだけというとき、竹の数が足りないことに気付いて慌てて再度竹割りをを行うという出陣前のあわただしい作業が続いた。

午後 2 時ごろ、私達が植林する海岸に行ってみると、まだ潮は満ちている状態だった。2 時間経っても一向に潮が引かない。5 時になってもまだ膝まで海水があった。だがこれ以上待っていたら日が暮れて植林ができなくなってしまうとのことで作業を強行した。

今回中村先生と私も含めて文教大学の春の活動に参加した 4 年生 3 人、それに自衛隊員 1 人、オイスカの研修生と経験者がいたために、総数は少なくとも作業を分担しながら経験者が未経験者に教えるかたちでスムーズに行えた。しかし十分に潮が引いていなかったのでマングローブがなかなか植えられなかったり、浜辺にマングローブを植えてしまったり、困難との格闘だった。まさに潮時を見るという言葉のとおりだが、迫る日暮れとの時間との闘いでもあった。

日没となる 6 時半ぎりぎりまでマングローブを植え、研修センターに帰ってきたときはすでに空には星が瞬いていた。500 本すべてのマングローブを植えることはできなかったが、私達の胸は心地よい充実感で満たされた。

翌朝バギア村へ向かう途中、前日植林した海岸を通りかかった。太陽の光に反射してきらきら輝く海面から私達の植えたマングローブが顔を覗かせていた。去年の夏から行ったマングローブ植林でリキシャの海岸はすっかりマングローブの幼木で埋められた。やがて緑いっぱい文字通りのマングローブ林になるだろう。爽やかな朝の空にマングローブの健やかな成長と東ティモールの緑化の成功を願った。

日本大使館 PKO について

日本大使館

在東ティモール日本大使館はインドネシアの日本大使館と連携していて、訪問時は 7 人の館員が両国を往来しているとのことだった。主な任務は農業の開発や元兵士の雇用支援を行っている。

東ティモールでの農業開発は主食である米、つまり水田の開発に力をそそいでいる。農業が主産業であり 8 割の住民が農村部で生活。しかし、都市部への人口流入が増加しており、生産力が低下している。そのため国家のコメ消費量の 3 分の 1 しか生産されていないため、輸入米、密輸入が出回っている。実際、マーケットで売られていたほとんどが輸入米であった。(オーストラリア、タイなど)

元兵士の雇用対策も支援項目とのことだったが、兵士の身分の区別がはっきりしていないため、そこから整理していかなければならないという。また真実和解委員会という東ティモール人の組織がある。背景には、99年の住民投票で独立派が上回ったため、反対派と独立派が対立し内乱が発生した。反対派は西ティモールへ逃げて難民となり、東ティモールが独立した後も帰還できない状況にある。その和解を促進するために設置されたのがこの委員会である。99年の内乱以降、約 29 万人の住民が西ティモールから避難したという。2002年5月時点で 20 万人くらいが帰還したが、数万人が今もなお残っている。

PKO

東ティモールで活動しているのは国連東ティモール支援団 (UNMISSET=United Nations Mission of Support in East Timor) という組織。その本部を私たちは訪問し、事務総長副特別代表の長谷川祐弘さんから、話を聞くことができた。主な任務は安定と行政能力の確保、法執行の支援、治安維持への貢献 (軍事、警察を含む)。2002年9月30日現在の派遣規模は総数 4629 名である。

現在さまざまな問題を抱えていて、特に問題なのが治安である。西ティモールとの国境付近ではいまだに反政府集団とのにらみ合いが続いていて、各国から派遣されている軍隊で警備をしていた。来年 6 月に撤退する UNMISSET だが、いまだに帰還しない難民がもし押し寄せてきたら、内戦に発展しかねない状況にあるという。さらに国連が必要な援助をしているため、独立後の団結心が薄れてきており、外国の支援に頼ってきているという。

UNMISSET 本部のほかに、私たちは春の活動期間中に自衛隊の基地を訪問した。そのときに派遣されていた部隊は東北方面隊で、首都のディリ、マリアナ、スアイ、オクシのそれぞれ基地に派遣されている。日本の PKO の主な任務は、(1) 主要幹線道路および国連施設の維持補修 (2) 他国部隊および現地住民が使用する給水所の設置 (3) 民生支援の 3 つの任務からなる。

(1) 主要幹線道路（PKO活動に必要な道路）の補修はマリアナを視察する際にその現場を車で通った。この基地は派遣隊の中で最も高い所にあり、1時間程かけて上った。崖にはビニールがしきつめられ、また道路に凹凸がある場所は土で補修されていた。またディリ近くにあるシャナナ・グズマン大統領私邸付近の道路も同じく崖の補修が成されていた。

国連施設の維持補修はUN宿舎の土嚢積みを行ったという。これはバリ島のテロをきっかけとした作業で、1つ1トンからなる土嚢で高さ2メートル、長さ40メートル、全部で140個近くを使用。

(2) 給水はコモロ給水所の維持運営、生活水の供給。給水車3台で1回に5000リットルを運ぶ。私たちが泊まったセンターは非常に水が豊富でまったく苦労しなかったが、いざ停電などで給水が止まると、トイレ、食事、風呂（現地では水浴び）等の行為が麻痺してしまった。

(3) 民生支援では主に現地住民に対する教育。その内容は施設器材操作で、目的は東ティモールの自立的な土木作業能力を向上させ、器材を有効利用できる能力を向上させること。さきほどの主要幹線道路補修の時にも同時にこのような実習が行われている。

まとめ

東ティモールはインドネシア併合地域からの独立のために、国としての機能はまだまだ果たせず、国連が撤退したあとも国としての機能を果たせるかという不安の声が現地の人からも伺えたという。主産業の農業も水田や畑の整備不足や都市部への人口流入により生産力が低下して、流入した人々も職を見つけることができずに都市部をさまよっている。そのなかで、お世話になったオイスカ訓練センターの役割、国連による軍隊などの教育やNGOなどの人材育成といったものの必要性を実感した。

支援物資収集

衣類、文房具、楽器の支援

私たちの活動は多くの支援で成り立っている。春、夏の活動のためにたくさんの方々から協力をいただいた。

春の活動前に昨年の活動内容が報道された読売新聞を読んだ調布第五中学校から、生徒たちの前でぜひお話をしてほしいとの連絡が入り、中学校を訪問した。そこで何かできること

で協力をとの話になり、春の支援物資としてサッカーボール、文房具、衣類などの寄贈を受けた。横須賀にある三笠幼稚園も新聞で私たちの活動を知り、春にピアノなどの楽器類を用意してくれた。その後、春の活動報告とお礼を兼ねて幼稚園を訪問したところ、引き続いて夏も物資支援の協力をいただけることになり、その際に折り紙をいただいた。また、幼稚園も夏休みに入ってしまう、なかなか私たちとの予定が合わなかったのだが、忙しいにもかかわらず、同市内にある私たちメンバーの一人の自宅まで、木琴やカスタネットの楽器類を届けてくださった。

メンバーの関谷香織の母校で足立区にある淵江第一小学校では、夏休みに行われた夏祭りに物資収集会場を設置していただけることになり、夏のメンバーで実際に小学校へ足を運び、夏祭りに参加し、相当な量の衣類や文房具を、生徒たちのご両親、地域の方々から収集できた。この夏祭りで集まった衣類は、その多くが子供服だったので、ほとんどを現地に持って行くことができたのである。

メンバーである堀江俊太が以前アルバイトでお世話になった茅ヶ崎にある学童保育、「なかよしクラブ」に文教ボランティアズのチラシを配り、協力をお願いしたところ、「なかよしクラブ」の方々が声をかけてくださった他の保育園から衣類、文房具などをいただくことが出来た。また、菊地領治がお世話になった茅ヶ崎市内のマリンキッズからも衣類、文房具、楽器などの物資支援にご協力いただいた。

夏の活動では、地域広報誌であるタウンニュース茅ヶ崎支社に記載をお願いし、物資支援協力の呼びかけをしたところ、短期間の募集にも関わらず 4 人の方々から協力を得ることができ、衣類などの支援物資をいただいた。また、茅ヶ崎市民活動サポートセンターにも協力を呼びかけたところ、快くセンター内に物資収集箱を設置させていただけた。

そして、春夏ともに、文教大学内での呼びかけによって、多くの文教大生、その友人や家族など、さまざまなネットワークによって衣類、文房具、楽器など相当な量の物資支援にご協力いただいた。また、駅前での募金活動の際に配ったチラシに夏前に新しく作った文教ボランティアズのメールアドレスを記載したところ、ぜひとも協力したいと何件かのメールが寄せられた。今回はメールをいただいたのが出発直前だったために、物資を収集することができなかったが、一般の方々からの協力を得る手段としてメールアドレスを公開することはなかなかの名案であったのではないだろうか。

サッカーボール調達

東ティモールでは、サッカーが国民的人気であることを、先輩たちの活動報告によって知ることができた。そのため、昨年から続けているサッカーボールの寄贈を、今回もおこなうことになった。

サッカーボールの調達にあたって、以前にもお世話になった、藤沢にあるスポーツショップ「B&D」と茅ヶ崎にあるスポーツショップ「コワダスポーツ」への協力をお願いする案があがった。両店とも、私たちが昨年おこなった呼びかけに快く賛同してくれ、活動意義、具

体的な活動内容を理解したうえで、数個のサッカーボールを寄贈してくれたのである。「コワダスポーツ」が「株式会社モルテン」と協賛し、新品のサッカーボール12個を無償で寄贈してくれることが決まった。無償でサッカーボールを提供してもらえることは異例であり、昨年につき、私たちの活動にご理解を頂いた「コワダスポーツ」には感謝の思いでいっぱいである。

また新たな試みとして、Jリーグの各クラブへサッカーボールの寄贈を呼びかけた。その理由として、プロの選手が使用したボールをストックして、譲って頂こうと考えたからだ。文教大学の小林謙二教授にご協力を頂いて、日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）の藤口光紀理事にコンタクトを取ることができたのである。大学が神奈川にあるため、神奈川の4チーム（横浜マリノス、湘南ベルマーレ、横浜FC、川崎フロンターレ）に呼びかけて頂けるということであった。結局のところ、トップで使用したボールをユースで使い、更にジュニアユースに回すというように、使えなくなるまで使うことが普通であるため、ボールの寄贈は難しいということであった。しかし藤口光紀理事は、今度の件は色々な意味で考えられるとのことで、検討して頂けるということであった。今回、Jリーグのクラブチームから寄贈して頂けなかったが、私たちの活動を少しでも多くの人々に知ってもらえたことは間違いないだろう。

ちがさき サッカープロショップ
コワダ スポーツ
神奈川県茅ヶ崎市東海岸北5-6-21 TEL 0467(82)4444(代)

molten[®]
東京支店/Tel.03-3625-7581

バギア村孤児院

私たち文教ボランティアズは、昨年の夏、今年の春そして夏と3回にわたりバギア村孤児院で活動を行い、支援物資を直接渡してきた。1回目の訪問から1年経った今、バギア村孤児院はどうなっていたか。

バギア孤児院の現状

バギア村は、首都ディリから車で約7時間離れた山奥にあり、そこまでの道のりは悪路の連続で、距離以上に遠く感じた。そのためか孤児院は、国際機関やNGOの支援をほとんど受けておらず、厳しい生活を送っている。唯一受けていた世界食糧計画（WFP：World Food Programme）からの食糧援助も打ち切られた。東ティモールにある孤児院は、教会によって運営されており、シスターが孤児たちの生活の世話をしているというのが一般的であ

るが、バギアの孤児院は、シスターもおらず、寮母さんが一人いるが、バギア村の村長であるルイスさん夫妻がボランティアで孤児院の世話をしている。昨年、訪問したとき常駐の寮母さんはいたが、今年は15歳の少女がボランティアで孤児たちの世話をしていた。また、料理をする際に使う薪のストックがなく、その日しのぎのようだった。

孤児院の建物は古く、コンクリートでできている床ははがれ、ドアノブははずれており、鍵はかからない状態だった。ライフラインである貯水槽には、ヒルがはりついており、衛生状態は悪い。電気は、午後6時から午前0時まで使用できる。だが、私たちが訪れた初日は、配電盤の不具合で電気がつかず、ろうそくで生活をした。孤児院にあるベッドで寝ていたのだが、ダニに喰われたり、ゴキブリやノミがたくさんいたので、なかなか寝つけないメンバーもいた。衛生面の悪さを身をもって体験した。このような劣悪な生活環境の中で孤児たちは生活をしているのだ。

文教ボランティアズが、以前に2回持ってきた支援物資はきちんと使われていた。楽器、サッカーボールは孤児院の倉庫に置いてあり、決められた時間になると子供たちは遊んでいた。また、夏休み中はほとんどの孤児は親戚の家に帰るので、楽器を持ち帰って練習しているという。大統領がバギア村を訪問した時には、その楽器を使って演奏し、歓迎したという。文房具は、小学校の先生の話によると、もうすでに使い果たしており、今また不足しているということだった。村長さんの話によると、医薬品（風邪薬、消毒液等）は、使い終わっており、不足している。衣類は、不自由しない程度になった。

バギア孤児院での活動

今回、私たちはバギア村では正味2日間活動を行った。短い時間の中で何ができるかをみんなて話し合った。まず、私たちが気になったのは、道や孤児院の前にゴミの山がたくさんあったことだ。そこで、私たちは、孤児たちや村の子供たちとゴミ拾いを行った。空き缶やペットボトル、ビニール袋が多く捨てられてあった。「hamos!」（そうじ）と呼びかけながら、とにかく拾い続けた。多くの子供たちが、ゴミ拾いをやった。中には、「hamos lagosta」（そうじなんて嫌いよ）、という子もいたが、しつこく「hamos! ,hamos!」と言い続けたら、いやいやごみを拾っていた。ごみを燃やすときに子供たちは、燃えないごみまで燃やしてしまう。このことを村長に聞いたが、この村ではまだ分別するという習慣がないということだ。確かに、やっと首都ディリでペットボトルのリサイクル回収が始まったばかりである。

台所の煙突が掃除されていないために油とススで排煙口が塞がってしまっていて、料理をするたびに台所が煙で充満し、視界が悪く料理しにくいばかりか、健康にもよくないことは一目瞭然だった。この問題は昨年訪問した時、中村先生が村の青年といっしょに掃除をしてきれいにしたのだが、1年経った現在、またもや汚れていた。今回は、孤児たちといっしょに屋根に上り、煙突を掃除し、ススの塊を取り除いた。その結果、光が差し込み、見事に煙突の機能を取り戻した。孤児たちは、驚いた顔をしたが喜んでくれた。

孤児たちは、手を洗う習慣がなく、衛生状態が悪化してしまうので、手洗いを呼びかけるポスターを作成した。このポスターをトイレ前、台所前に貼った。

感じたこと

今回の活動を通して感じたことは、昨年の夏の活動が生かされていないということだ。ゴミ拾いしても、袋に集めたゴミを違う場所に捨てる子がいた。煙突掃除をした跡も無く、1年間ススが積もりに積もったという感じであった。このような活動は、長期にわたって継続的にいき、習慣化させていくことが大切であると感じた。

他の孤児院との違い

今回、バギア孤児院の他にモバラ村の孤児院を訪問する機会があった。この孤児院は、オイスカ職業訓練センターから、車で西へ20分走ったところにある。孤児院に着き、建物を見て驚いた。建物の外観は非常にきれいである。孤児院内を見学させてもらったが、寝室、勉強部屋、台所の設備は充実し、なおかつ全室清潔であった。バギア村孤児院は比べものにならなかった。夏休み中にもかかわらず、シスターが常駐しており、洗濯、掃除といった世話をしていた。孤児たちが着ている服もきれいだった。

同じ孤児院でも、施設、生活環境がこんなにも違うのかと感じ、バギア村孤児院の生活環境の悪さを改めて感じた。



るせむ利きハ我年、アのらまじアハ出紙ハ銀片中前、>おの野宮ハ我年、おさお見通
。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。

さつごじ製

で。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。
「>紙ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。
紙ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。
。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。

ハ紙のさつごじ製

す、お見通のこ。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。
。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。
。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。
。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。式ハ想ハ前酒台、前ノトイホーヤス本のご。



Kosovo・ボスニア活動報告

2003年7月28日～8月20日

参加者

- | | | |
|-------------------|----|------|
| 文教大学国際学部国際関係学科 | 4年 | 佐藤裕美 |
| 同 | 3年 | 菊地厚子 |
| 同 | 3年 | 高久和也 |
| 同 | 3年 | 松本興太 |
| アドバイザー 文教大学国際学部教授 | | 中村恭一 |
| 同 文教大学国際学部助教授 | | 生田祐子 |

活動スケジュール

- 7月29日(火) 10時10分(日本時間) 成田発 <オーストリア航空 OS52 便>
 13時10分(現地時間) オーストリア・ウィーン着
- 7月30日(水) 13時20分 オーストリア・ウィーン発<OS773 便>
 14時45分 ベオグラード着
- 7月31日 8時45分 ベオグラード発バス
 コソボ・ミトロビツァ着

KCHR (Kosovo Center for Human Rights) の Dr.Neshad Asllani らの出迎えを受けインターンの2人とも合流、コソボ・ペヤへ
 文教生のホームステイ先 (RAGIP RUSTA さん宅) に到着

8月1日(金) KCHR での人権教育セミナー1日目

- ・関係者挨拶<ペヤ市長 Ali Lajqi さん、UNMIK・OSCE 代表者>、参加者自己紹介/KCHR の紹介とその役割について (Dr.Neshad Asllani) / 講義「人権とは何か？」 / 講義「コソボの文化遺産と異文化・他国とのつながりについて」 (Prof.Dr.Hivzi Muharremi) / ルゴバ溪谷へ

8月2日(土) KCHR での人権教育セミナー2日目

- ・「The Road from Pain to Hope」(コソボの人権ドキュメンタリーフィルム) の鑑賞とディスカッション / ワークショップ「子供の人権について」(Ali Asllani) / マーケット(週1度開催) 視察

8月3日(日) KCHR での人権教育セミナー3日目

- ・ペヤ郊外セルビア人の帰還村 (Pijero Polje) 訪問
- ・アルバニア人大量虐殺のあった村 (Lybeniq) 訪問、生存者面接

8月4日(月) KCHR での人権教育セミナー4日目

- ・アルバニア人伝統家屋美術館へ (Glllogjan)
- ・中世からの商業都市プリズレン (Prizren) 視察

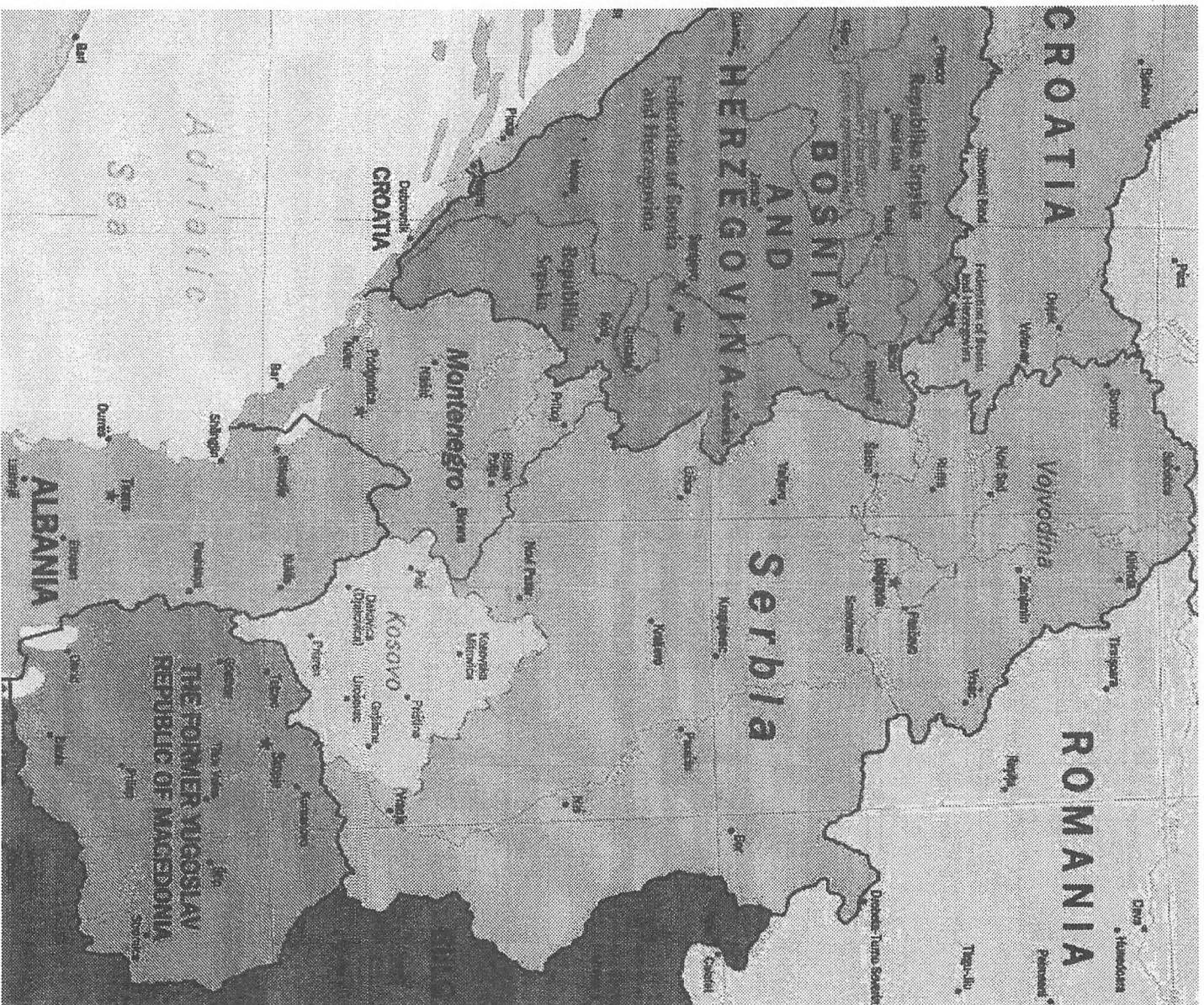
8月5日(火) KCHR での人権教育セミナー5日目

- ・コソボ首都プリシュティナでコソボ博物館訪問、文化省大臣表敬
- ・文教大主催コソボ関係者感謝レセプション

8月6日(水) KCHR での人権教育セミナー6日目

- ・ベシアナちゃんの住むプレカズ (Prekaz) 村へ
- ・アデミ・ヤシャーリ一家惨殺現場視察
- ・シュティエ市長の案内でラチャック村大量虐殺現場視察
- ・ペヤ・ラジオ局で「広島原爆記念日夕食会」で懇談

- 8月7日(木) KCHRでの人権教育セミナー7日目(最終日)
- ・参加者自国における人権問題についてのプレゼンテーション
 - 日本の人権問題(中村恭一教授・文教生)、アメリカの人権問題(フロリダ州立大学、テイギン・スティーブンソン)
 - ・参加者一人一人の、KCHR人権教育セミナーを通してのコメント
- KCHRのみんなに別れを告げ、バスでコソボのペヤを出発
- 8月8日(金) バスの中でコソボとモンテネグロの境界、クロアチア国境を越える
ドブロブニク到着
- 8月9日(土) バスでドブロブニクを出発
ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボへ到着し宿泊先へ
- 8月10日(日) 首都サラエボ市内・市外の戦時の傷跡をレンタカー移動にて見てまわる
- ・エアポート・トンネル、Sonia(レイプ)レストラン「ボゴスチャ」、
 - メモリアルパーク「サラエボオリンピック時のサッカー場」、
 - カラジッチの本拠地「パレ」
- 8月11日(月) 15日からのUNDPキャンプに備え、自己紹介など構成準備(午前中)
2時30分 ボスニア・ヘルツェゴビナ、サラエボ日本大使館へ訪問し、
臨時代理大使・小滝義昭さんにお話を伺う
5時 サラエボのUNDPオフィスへ訪問、スレブレニツァ地域再生
プログラム(SRRP-Srebrenica Regional Recovery Program)
担当者、Judith Selmanさんにお話を伺う
- 8月12日(火) UNDPの迎いでサラエボを離れ、スレブレニツァUNDPオフィスへ
難民キャンプから帰り始めた村(Ljeslovik)へ訪問、物資贈呈
- 8月13日(水) 近くの村(Hranca)へ訪問/地域住民・UNDP間の会議に参加/メモ
リアルパークへ(7000人が埋葬される)/
- 8月14日(木) スレブレニツァの一部であるスケラニ(Skelani)村のNGO訪問、ク
リーン活動が行われるドリナ川へ
- 8月15日(金) UNDPユースキャンプ初日、式典
- 8月16日(土) ワークショップ①(ボスニアの若者のこれから)
- 8月17日(日) ワークショップ②(//)
- 8月18日(月) ミリッチ(Milici)へ行き、川の清掃活動
- 8月19日(火) ワークショップ③(若者参加のNGOと政府との関わり方)
- 8月20日(水) UNDPキャンプを離れ、サラエボにて解散



© OCTOBER 2005 OCHA (UNHCR) 05/05/05 (X) H.P.H. 2005-05-05 (X) 1102 R.2

活動の経緯と概要

2003年夏にコソボ・ボスニアでの活動を行うきっかけとなった経緯は、同年春中村教授がバルカンを訪問した際にさかのぼる。現地を訪れた時に具体的な話を始め、コソボについては民族和解のための人権教育に励む NGO コソボ人権センター (KCHR) と連絡を取り合い、またボスニアの UNDP ユースキャンプに関しても現地 UNDP 代表らとの継続的連絡によって可能になった。ただ、資金面の問題や現地のコンピュータの不調などがからみ、活動の具体的内容や細かい日程に関しては、なかなか情報を得られず現地に行ってからの方が推測しにくい中で、出発寸前まで不安な気持ちを抱えていた。そのような状況ではあったが紛争の背景について勉強したり、東ティモールへ行くメンバーと共に、物資集めや募金活動を行って準備を進めたのだった。

募金活動

今回の活動では、支援物資集めと募金活動に力を入れた。この夏の活動は、コソボ・ボスニアと東ティモールの2つのプロジェクトを予定しているため、2つに均等に物資を援助するためには、あまりに少ないとそれぞれで予定している物資援助活動ができないと考えたからだ。そこで学内での募金活動だけでなく、茅ヶ崎駅での学外の募金活動も計画し実行した。学外で行うことにより、活動を広く知ってもらうということにも役立った。そして、今回もう一つ新しい試み考えた。それは文教ボランティアズとしてのメールアドレスを作ったことだ。去年の活動で新聞に連絡先として学部のファックス番号をのせてもらったところ、大変な反響があったとの話を聞いていたため、募金活動時に配るビラに私たちのメールアドレスを載せることにした。これを行ったことにより集まった物資も少なくなく、市民の方々の協力を得られることができた。

しかし、募金活動をする中で問題もあった。それは、休日メンバーが揃って活動するのが難しく募金の呼びかけに迫力が欠ける事態が生じたことだ。駅前で2人で募金の呼びかけをすることもあり、あまり成果のない日も少なくなかった。次はこのようなことがないように、予定を合わせる努力をしなければならない。しかし、大学の職員などの協力もあわせた学内と茅ヶ崎駅前での募金を合計すると、215、448円という金額になり、正直こんなに集まるとは思っていなかった私たちは驚いたが、たくさんの人達の協力を得て順調に活動を進めることができた。ここに今一度、募金にご協力くださった皆さんに感謝したい。

物資調達

今回非常に多くの物資の協力を得ることができた。衣類、文房具、スポーツ用品など学部から借りた倉庫に保管した品物が日を追うごとに増えていった。今回友人、先生、学校の職員のみなさん、アルバイト先の人、地域の住民からと幅広い人に支えられ活動できたことを感謝する。

特に同じ学生仲間からの協力は大きかった。一人暮らしが多い中わざわざ実家から送ってきてもらい支援してくれたり、鉛筆一本をわざわざ持ってきて来てくれたりした。継続的に続いている活動なので、今回のためにとっておいてくれた人もいた。物の状態もみんな比較的よいものばかりで荷造りしているとき、こんな立派な品物をと感心するものまであり、絶対現地の人々に届けなければと思ったものだ。私たちの力だけではなく、協力してくれたすべての人たちのおかげでスレブレニツァの村人たちに笑顔が生まれたのだと思う。

これからの物資輸送と転換

多くの人たちからの支援を少しでも多く持っていきたいと思いダンボールに詰めた。当初旅行会社の話ではボランティア活動ということもあって、航空会社に無料輸送荷物量が多めに見てもらえるよう交渉してくれる話だった。毎年苦勞している問題なので、今回も少しでも多く認めてもらえるよう期待した。しかし出発前に荷物の個数、重量、種類と万端用意できたところで旅行会社も航空会社も取り付く島のないような返事になった。当初の話と違うと旅行会社に掛け合ったが、旅行会社は直接航空会社に問い合わせしてくれといい、そのとおりすると、そういう問題は旅行会社に聞いてくれと断られる。最後は空港で様子を見るしかない、ともかくダメな場合には空港から大学にまた送り返す覚悟で物資を成田に送り出した。

出発当日にチェックインするときやはり荷物を全部計量され、その結果超過料金として 12 万 5 千円を請求された。私たちにはそのような大金を荷物輸送に充てる余裕はない。バルカン半島の帰還難民たちへの日本からの善意の贈り物だと粘り強く交渉した結果、ウーンから先の航空運賃 2 万 5 千円を負担するという条件で話し合いがついた。搭乗時間ぎりぎりまで冷や汗をかきながらの出発となった。

現地でも、ことあるごとに荷物代を別途徴収されトータルで考えるとかなりの額になった。そればかりかモンテネグロからクロアチアへの国境を越える時、総量 80 キロの段ボール箱 7 個と個人用ザックを持って急な上り坂の道を 1 キロ近く歩かねばならなかったときは、体力に自信のある若い私たちもさすがに疲労困憊した。しかもちょうどお昼ごろで真夏のきらぎらの太陽が照り付ける。途中何度も投げ出したくなかったが、これを届けるためにやってきたのだからと全員歯を食いしばったのが忘れられない。また旧ユーゴスラビアの地域の治安上の事情から、各国境での段ボール箱の中身検査も厳しかった。厳しい口調の質問、またダンボールを勝手に開けられたこともある。検査官の扱いが乱暴なために、スレブレニツァの村に届けるころには箱はボロボロになっていた。物資を運ぶことはこんなにたいへんだったとは思いつけなかったが、いい経験になった。

今回の旅でこれからの物資の転換を考えさせられた。いままでは、文房具、衣類など一般的に集めやすいものであげて喜ばれるものと考えていたが、これからの活動は、現地のニーズも配慮して、支援物資の種類を再考する必要がある。コンパクトなもので超過料金や輸送費を払わなくてすむものに限り、できるだけ現地で物資を購入すれば少しは現地の経済に

も貢献できる。NGO が支援物資を日本で集めない大きな理由が納得できる。将来の検討課題だ。

物資の内訳

- <文房具>鉛筆950本、消しゴム80個、ノート25冊、定規50本、
クレヨン・クーピー13箱、絵の具5箱、笛（アルト・ソプラノ）21本
ピアノカ12個
- <衣類> 長袖（トレーナー、シャツ）54着
防寒着（ベスト、セーター、コート）21着
ウィンドブレーカー 24着
- <遊具> テニスボール81個、サッカーボール8個、バスケットボール6個
ビーチボールセット1つ

多くの物資の支援ありがとうございました。

コソボ活動

現在、セルビア・モンテネグロという国名からなるこの地のセルビア南西部に位置するコソボは、旧ユーゴスラヴィア時代からすでに9割を占めるアルバニア人と少数派のセルビア人との間で争いが絶えない地であった。セルビア人優遇政策をとるミロシェビッチが現れてからは、コソボの大多数を占めるアルバニア人が虐待を受け、NATOの空爆を区切りに、国連の暫定行政府のもとで、現在も独立是非をめぐる厳しい状況が続いている。

私たちは、7月31日から8月7日までの約一週間、コソボ南西部に位置するベヤというコソボ第2の町に滞在した。ベヤは、コソボ地域の入り口である北のミトロビツァから車で約2時間行ったところにある。セルビア・モンテネグロの首都ベオグラードからは約7時間かけてバスでコソボ入りしたので、ベヤまでは10時間近い旅だった。

ベヤでは一週間、地元NGOの人権教育セミナーと呼ばれる活動に参加した。お世話になったのは、セミナー主催者であるコソボ人権センター（KCHR-Kosovo Center for Human Rights）で、民族和解こそコソボを救う道との信念のもとに両民族の和解と人権教育を専門に活動している団体である。私たちは、7日間の間ここで取り組まれている人権教育についての講義を受けたり、数々の現場訪問を行った。

NGO コソボ人権センターの人権教育への取り組み

KCHR は、医者であるネシャッド・アスラニ (Dr.Neshad Asllani) さんを筆頭に日々、人権教育活動に取り組む団体である。コソボ紛争時、医者や教育者など公職についていたアルバニア人は、職を奪われ追放されて他国に逃れた。しかしネシャッドさんはペヤにとどまり、医者としてセルビア人、アルバニア人の区別なく傷ついた人々の治療にあたったのだという。

今回の活動の話があってから、私たちは中村先生とネシャッドさんのメールでのやり取りを見てきたが、実際に会ってその人柄に触れ、様々な話を聞く中で、彼が人権教育活動の先頭をきって活動している意味がよく理解できた気がした。ネシャッドさんだけでなく、そこで活動に取り組む人たちは一度ペヤの街を歩けば、多くの人と挨拶を交わし、地域のなかで尊敬されている様子が見て取れたのだった。

KCHR は NGO としてコソボ紛争終結後 1 年経った 2000 年 7 月に設立され、2000 年 9 月には暫定政府である UNMIK (UN Interim Administration Mission in Kosovo) に公式認定されている。すべてのコソボの人々の人権を促進また保護し、享受する力を高めるというビジョンとともに人権教育によって、偏見や差別そして紛争を防ぐという使命を掲げている。そしてこの使命を達成するために、「擁護」「調査」「監視」の三つの柱の活動を遂行している。

また、KCHR は「コソボの教育者への民主主義の上での人権教育トレーニング」や「教育者へ向けた人権教育パンフレットの作成」に関して UNESCO (United Nations Educational Scientific and Cultural Organization - 国連教育科学文化機関) と提携している。他にも、アメリカの機関と協力し「都市・地方行政の選挙監視活動プロジェクト」、「健康と人権の発展を促す活動」や、「人権に磨きをかける」活動として「選挙監視訓練」「刑務所の監視」、さらには、OSCE (Organization for Security and Cooperation in Europe - 欧州安全協力機構) の「信頼できる政府と市民の参加プロジェクト」に関わっている。KCHR オフィスには、独自で設立した図書館や資料室がある。

これらの活動は、コソボにおける人権教育の強化を目指す人が中核となって成り立ち、ほとんどの活動は若者にゆだねられている。実際に私たちはこのセミナーを通してアルバニア人の青年たちと行動を共にした。本当に彼らはみな優秀で、高校を卒業したばかりの 18 歳ながら英語を完璧なまでに使いこなし、その凛とした姿には身が引き締まる思いであった。

KCHR は次の 5 つの目標を掲げている。まず、コソボの人権教育を強化させること、コソボの人権侵害を減らすこと、人権侵害に責任がある国・組織・個人を把握すること、コソボの人権に対する認識を高めること、そしてコソボを本当の民主的な地にすることである。KCHR の理想は社会に人権というものの認識を幅広く根づかせることだ。

彼らは設立から常に「教育的アプローチ」を行ってきた。なぜならば“自分たちが権利というものをもっと知れば、他人の権利を侵害することを減らすことが出来る”という視点に立っているからなのだ。この精神は、活動のすべてにおいて絶対的だ。人はよく悲劇や過ち

から何かを学ぶ。コソボでもまた、長年にわたる人権侵害を紛争を通して経験することによって、初めて「人権教育」というものが大切であると気づいた。また一方で、彼らがこの人権活動を始めたころは、人権教育の難しさ、それを阻もうとする障害、危険、復讐そしてサポートが十分に整っていないことに気づかされたという。活動の初頭に UNESCO などと提携しプログラムを進めたことは、「国連人権教育の10年」のもとで人権教育を託す良い動機付けとなったようだ。実際の活動としては、人権教育の具体的方策を教師を始めとする教育者に伝え、育成する。また独自の図書館や資料室を設立し、ドキュメンタリーフィルムの制作や、教師向けに人権教育のための小冊子を作成している。また、こうした形式的なものだけではなく、活動は多岐にわたる。

KCHR は、人権教育の継続がすべてのコソボの人々にそれを根づかせ、未来の人権侵害や差別行為や偏見、そして紛争を防ぐことが出来ると信じて活動しているのである。

帰還セルビア人村

人権教育セミナーの3日目である8月3日日曜日に私達が訪れたのは、ペヤ郊外に位置し「Bijelo Polje」英語で White Valley という意味を持つセルビア人の村だった。私達が下り立ったその場所は高台になっており、眼下に広がるアルバニア人居住区やその向こうの山々までもが一望でき、ここからの眺めは本当に素晴らしいものだった。だが、この村もまた破壊され家々はレンガの壁や骨組みが残るだけで雑草が生い茂る様は、アルバニア人居住区と同様の光景であった。

この村からセルビア人たちがペヤのアルバニア人を襲ったという話で、それだけにアルバニア人のセルビア人に対する憎しみの最も深い地域であった。しかし紛争終了後アルバニア人たちが復讐に転じると、村の300戸余りのセルビア人は難民となり他の土地へ移らなければならない状況に追い込まれた。この村からアルバニア人居住区は目と鼻の先に位置することもあり、過激なアルバニア人は夜この村を自動車で走り去りながら銃でセルビア人を攻撃し、セルビア人がこの村を出て行くように仕向けたようだ。村の家々が破壊されているのは、セルビア人が出て行った後にアルバニア人たちが自分たちの家を修復するために使える建築材料などを持ち去ったからということだった。

現在は治安もよくなり以前は立ち入り禁止であったアルバニア人も今では自由に村の中へ入ることができる。治安部隊であるイタリア軍 KFOR (Kosovo Force—コソボ国際軍) の再三の巡回はあるものの、このおかげでセルビア人が安心して暮らせるのだ。以前はパスポートをチェックされたが、今ではそのような物々しい雰囲気は無く、わずか3年で復興がここまで進んでいることに中村教授も驚きを隠せずいた。最近ではコソボのルゴバ大統領らアルバニア系政治指導者が難民、避難民となっているセルビア人にコソボの元の村に戻って来るよう声明を出し、これに対しプッシュミ大統領も歓迎の意を示したようだ。セルビア政府もこの呼びかけに呼応して帰還を勧め、特にこの一カ月でかなり状況がよくなったということだった。

今この地には2週間前に帰還したばかりのセルビア人が NGO の援助を受けながら生活を営んでいる。現在はまだ男性のみ 24 人の帰還者だったが、彼らは近い将来家族を呼び寄せまたこの地で暮らしたいと考えている。

見晴らしの良いこの広場には、墓地があり、その隣に大きな軍用テントが2棟張られ、1つのテントにつき2段ベッドが5つ程、他は水周りの充実した仮設のトイレやシャワー、そして食事のためのテーブルが置かれており、生活に必要な物は一通りそろっているようだった。彼らがアルバニア人居住区の町に買い物に出ることは絶対にないという。食料は NGO からの支援と少しの自給自足でまかなっているのだそう。私達が詳しく話を聞こうと席につくと、彼等はジュースや地元のお酒でもてなそうとしてくれた。NGO からの援助でまかなわれている物で彼らにとっては貴重なものだろうから遠慮したが、それでも勧めて出してくれ、大切に思いながらごちそうになったのが思い出される。現在このキャンプで暮らすラドミール・コスチッチさん(66)は、セルビアのクルーシャという村に家族を残してきたが、この地(生まれ育った場所)に戻ってくる事ができて気分がいいと言い、今一番必要なのは自分が住む家だと語っていた。コソボの冬は大変寒くマイナス30度近くなるというから、冬を迎える前に対策を立てる必要がある。生活費として彼自身はセルビア政府から一カ月120ユーロの年金を受け取っているそう。ここではかなりの金額だそうで、例えばアルバニア暫定政府である UNMIK から支払われるコソボでの年金は月平均35ユーロ、看護婦の給料なら115ユーロが相場ということだ。彼等は毎日畑仕事や荒れた家の取り壊し作業をしているそうで、この日もキャンプ場にいたのは少数の年配の人だけで、若い人はみな労働を行っているという。作業現場では、大人数で廃墟となった家の廃材などを持ち出しているようであった。

コソボに来て、セルビア人の村を視察するのは初めてだった。人権センターの方々がこの村でセルビア人と接する事は、我々の想像を超える葛藤があったに違いない。彼らは昔の強制教育により皮肉にもセルビア語を話すことができ、私たちの通訳までもしてくれることになった。私たちと同行して下さったアルバニア人の男性、ジェバット・アーメタイさんはセルビア人におじを殺害され、感情的な痛みをもつ一人であった。セルビア人地区に身を置き、仇とも言える民族を目の前にして尚且つその民族の言葉で会話をすることがどういふことなのか、私はそれまで想像してみたいものの、実際目の当たりにして一層の衝撃を感じずにはいられない。彼の表情は終始硬く、この場に居ることが一時もままならないといった感じを受けた。おじの遺体は今もまだ見つからない。彼自身もおじの殺される場所を見たわけではない。おじを知る人が見たというから間違いないと言う。ジェバットさんはこう言っていた。

「虐殺はミロシェビッチや政府がやってきたことで、目の前のセルビア人がしたことではない。この村のセルビア人は何もしていない。だから彼らが謝ることは難しいだろう。しかし兄弟でさえも喧嘩をすれば声を掛けていくことが大切であり、その一言が解決の道になるのだと。今は何とも言えないが、お互いの言葉を話すことは大切であり、将来的には若い人

が学んでいくのではないかと期待している」。彼等は前向きに将来を開いていこうとしていた。

ジェバットさんをはじめ、同行してくれたアルバニア人の心境を思うと私は本当にいたたまれない気持ちで一杯になる。そして、この村を追われることになったセルビア人に対しても同じことがいえる。彼らもまた身内をアルバニア人に殺され、ここではお互いに同じ気持ちだったはずだ。彼らの立場からは、自分たちも被害者なのだと声を大きくして言いたいのではないだろうか。謝れるなら謝りたいと語るラドミールさん。双方が民族和解を願うのに、現実は大きな壁となり越えることができない。お互いの複雑な心境をふまえ、これからどう解決していくかが問題である。人権センターでは、これからのコソボを担っていく学生に教育をしているが、セルビア側でも若い人に向けて同様のセミナーを開催しているという。そして、それを支えていくのが大人たちであり辛い経験をした被害者なのだ。

今回の視察は、コソボ復興を考えるものとして大変興味深くアルバニア人とセルビア人の交流を目の前にしたことは本当に貴重であった。協力してくださった村の方々、機会を与えてくださった人権センターの方々に心からお礼を言いたい。

アルバニア人村を訪れて

帰還セルビア人村を離れ、アルバニア人の住むリボニッチという村に足を運んだ。ここは、一度に77人が殺害された場所である。閑散としたその場所には、アルバニア人社会の象徴である2羽の黒鳥が刻印された石碑が立てられ、その前には白い墓石が整然と並んでいた。その白い墓石には、犠牲者一人一人の生年月日と亡くなった年月日が刻まれており、中にはわずか2歳で命を終えた子どもがいた。危険を察知していち早くモンテネグロなどに逃げた人たちもいたが、逃げ遅れて残った人が殺されたそう。ここが襲撃された際、生き残ったのはわずかに9人で、納屋の草のなかに隠れていたり、撃たれたが偶然にも助かった人たちであった。わずかに生き残った彼らだけが、重要な生き証人である。

私たちは幸運にも、その当時大変な思いを経験したアルバニア人家族に話を聞くことができた。シャバン・ビナスカイさん一家は現在7人家族で暮らしている。生活はゆたかな方で、彼らが住む家は新しくとても立派だった。スイスで出稼ぎをしている兄弟に支援してもらっているという。突然やってきた私たちに飲み物をふるまい歓迎し、当時の生々しい話を、時には苦渋の表情を浮かべながらも丁寧に説明してくれた。アルバニア語で話をしてくれたのだが、時には声を大きく荒げる場面もあった。言葉は理解できなくても、その語る様子から、ここでどれほどひどいことが起こったのか推測するのは難しいことではなかった。

当時、村の人々は女性・子どものグループと戦闘年齢である18歳から60歳までの男性グループの二つに分けられ、女性と子どもは追い出された。男性はそこに残され、殺害されたのだ。セルビア軍をはじめ治安部隊や右翼集団までもがやってきて、アルバニア人の彼らが逃げられないように3方向から装甲車で囲み、一列に並べて殺したのだという。現在、77人のうち遺体はわずか12人しか見つかっていない。男性である家主の彼は女性・子どものグ

ループにうまく隠れることができ助かった。しかし彼の息子さんはベヤで殺され、まだ遺体は見つかっていない。また同じように近くのジャゴバという町では、1500人のうち1200人が行方不明となっている。かつてアルバニア人とセルビア人は隣人同士であったのに、セルビア人に武器を持たせて親しい隣人を殺害させたのだった。一度はセルビア人によって埋められた遺体も、犯罪証拠を隠すために掘り返されどこかへ持ち去られてしまった。そういった行方不明の人々はコソボの各地において計り知れない人数である。大切な家族を奪われ、遺体も未だどこにあるのか分からないのに、やはり簡単にセルビア人が村に戻ることを許すことはできない。

またセルビア軍は村の家畜までも殺し、それを井戸の中に放り込んだ。すると井戸の中の水はだんだんと腐敗してゆく死骸により汚染され飲むことはもちろん、生活に使うことはできない。人間の生活に水は欠かせないことを承知の上でこのようなことをし、村の生き残ったアルバニア人が元の村に戻ってきても、生活を困難にするようなことをしていたのだ。そしてやはりレイプ犯罪の事実もあった。民族浄化をする手段としてそれは使われた。アルバニア人はムスリムである場合が多く、もしもセルビア人との子どもを身ごもるなどすれば、それを訴えることなどできない。究極の精神的苦痛を伴うものだった。ただ単に人を殺すのではなく、レイプ犯罪にしても、集団虐殺にしてもその殺し方は極悪の限りを尽くしている。人間はここまでしてしまうのか。憎しみとはとてつもない力を与える。生で話を聞き、これは事実なのだと頭では理解しながらも、気持ちがついていかず不思議な感覚に襲われていた。

虐殺現場を訪れて

8月6日、私たちはアデミ・ヤシャーリというKLA（コソボ解放軍）の創立者の一族殺害現場に足を運んだ。その日もコソボの天候は快晴で、殺害された一族が住んでいた家2棟だけが孤立して建っていた。一族が襲われた家は4階建てになっており、今はこの虐殺があった現場を見物に来る人達のために足組みがされ、近づいて見るできるようになっている。建物には生々しく無数の銃弾痕が残されており、当時の砲撃のすさまじさが手に取るように分かった。私たちはなんとそこで、ヤシャーリ家の生き残った親族に当時の話を聞くことができた。31歳のムローツさんは事件当時父親とドイツにいたため助かったという。今は2歳半の息子と、9カ月の娘に恵まれ、それぞれに当時殺されたおじいさんの名とおばあさんの名を子どもに授けたのだという。

事件は、1998年にヤシャーリ一家と隣人の一族合わせて56人が、セルビア軍約5000人による2週間の包囲ののちに、一気に殺害されたというものだ。なぜ2週間もかけて包囲をする必要があったのかというと、包囲された一族は食料を得るために外に出ることはできず、昼夜包囲されていればいつ襲われるかもわからないという精神的圧迫の中に置くことで、窮地に追い込まれ、食料が尽き、疲労困憊したところで襲撃するためであった。殺された中にはわずか6歳の子どもも含まれていた。

なぜ彼らが殺されたかということ、セルビア側にとってコソボの独立を指すKLA、それも

その先頭を切って行動を取っていたヤシャーリ家は邪魔でしかなかったからだ。話をしてくれた彼は、生き残った自分がこの建物をはじめ家族の記録を残すために努力をしていきたいといった。また、彼も広島原爆の話に触れ、私たち日本人がわざわざ尋ねてきたことを喜んでいて。ここでも私たちが出来ることは、日本の人々に事実を知ってもらい、記憶の中に留めておくことだと改めて思った。私たちは、一家が眠るお墓で祈りをささげ、これからのヤシャーリ家の幸せと発展を願ってこの場所を後にした。

ラチャック村

次にもう一つの虐殺現場として知られるラチャック村を訪れた。村があるシュティミエの市長が私たちの訪問を待っていてくれた。このため市長自ら当時の状況について説明してくれた。ラチャック村では1999年1月15日に村人42人が虐殺された。この事件は国際社会にコソボでその時何が起こっていたのかを知らしめることとなり、あのNATOの空爆のきっかけともなったのである。村人は朝の時間帯に襲われた。犠牲者を埋葬している集団墓地は見晴らしのよい丘陵地にあり、皮肉にもそこから臨む景色は素晴らしいものだった。村の人々はこの丘陵地の下方と上方からセルビア人に挟まれ、身動きがとれずに殺されていった。朝だったため、家の中で朝食をとる姿のまま遺体で見つかった人もいれば、逃げようとして外で殺された人もいたという。またこの村の住人でほかの場所で遺体で発見された人も3人おり、ここの墓地には全部で45人の村人が眠っている。市長のいところで、当時16歳だった少年も被害にあったそうだ。

このふたつの虐殺現場を訪れて共通に感じたことは、このままきちんとした形、技術で現場が保存されなければ、雨や風にさらされいつこの見える証拠がなくなってしまうか分からないということだった。現地の彼らも、保存するための資金が足りず、虐殺現場の風化そしてそれにより記憶が風化されていくのではないかという危機感をもっており、どのようにして国際社会に資金面での協力を求めていくか考えている。市長は特に、国連職員としてコソボ復興の活動経験を持ち、毎年日本からのボランティアを連れてきてコソボ理解を推進している中村先生に日本からの協力の可能性について相談している。市長が私たちを待ち受けていた大きな理由のひとつでもある。

ボスニア活動

コソボでの人権教育セミナーを終え、次の目的地であるボスニア・ヘルツェゴビナに到着した。多民族が織り成すバルカンの複雑な社会があまりにも悲劇的な結果をもたらしたのが、ここボスニア・ヘルツェゴビナである。1991年のスロベニア、クロアチアの相次ぐユーゴ連邦からの独立が隣国ボスニア市民の独立を考える強い動機付けとなり、翌年ボスニアは独立を宣言した。その結果セルビア人、ムスリム（ボスニア人）、そしてクロアチア人によるヨーロッパの歴史上かつてない残虐な内戦、民族浄化の戦いへとなだれ込んだ。1995年末に紛争は終結し、現在はずいぶんと復興しているが、当時の無残な姿が数多く残っている。

首都サラエボに3日間滞在した。その目的は、戦争の真実を肌で感じることに、復興状況を知るためである。

サラエボ訪問

最初に訪れたところはボスニア紛争中使用されていた約800メートルにもものぼるトンネルだ。戦時中、サラエボ市民の「命のトンネル」として使われた。これは、セルビア人が空港を占領したためボスニアのムスリムは、食料、武器など供給が満足にできなかったことから、空港の滑走路の真下に地下道を造ったのである。防衛線に向けて進む市民兵も、食糧を求めて進む市民もこのトンネルを通して命を繋いだ。今は封鎖されているが、途中までトンネルに入ることができた。とても狭く一人通るのがやっとの幅で、これを食料や武器を持ちながら通るといのは大変辛いものだと思った。また当時のフィルムを見たが、かなりの人々がトンネルを歩いていた。中には途中で亡くなる人もいたようだ。生きるためにそうせざるをえない状況にまで発展した紛争を憎み、悲しく思った。

次に訪れた場所は「ソニアのレストラン」というセルビア兵が宿舎として使ったレストランであった。ここでは、ボスニア人の女性を連れこみ毎日集団レイプを行った忌むべき場所だ。この女性たちは、人間として扱われることはなかった。寝るところも地下の物置のようなところで、昼間は雑用として働き、夜はセルビア人兵士にレイプされた。このような扱いで頭がおかしくなったり、自殺したりする女性が現れたが、そのような女性たちを手当てすることはなく、裏山に捨てていた事実があったとされる。この残酷な行為は、紛争が終わっても未だボスニア人は忘れることはできないでいる。しかし、セルビア人側は、この惨劇を認めていない。だがいくつも証拠がでており、書物にも多く記載されている。

このおぞましい行為をまず認め、反省することからセルビア人は始めるべきであり、それが和解の第一歩であると思った。大変驚いたことに、近くこのレストランが再開されるのだという。確かに内部は改装されていたが、当時のベッドはそのままだということだった。このレストランの歴史や状況を見て、私たちは気分が悪くなり、早く立ち去りたいと言う者もい

た。モニュメントとして残すのではなく営業することは信じられなかった。また、そのオーナーというのは当時レストランの世話役をしていたボスニア人の子供であった。彼と電話で話を聞くこともできたが、レイブというものはなかったと言っていた。しかし、この行為は実際にあった。彼は少年時代だから覚えていなかったのか、店の評判、世間体を気にしていたのかわからないままだった。現代の戦争はミサイルや核などの物理的破壊が強調されるが、集団レイブなどの精神的屈辱を伴ったボスニア戦争の醜さをサラエボでは肌で感じる事ができた。

3番目に訪れた場所は、巨大な集団墓地である。この土地は元々は公園とサッカー場だった。それだけの広大な土地が墓地に変わるほど数多くの犠牲者が出た。墓標はほとんどが1992年で、小さい子供から私たちと同年代や老人までの多くの年代が眠っていた。またムスリムだけではなく、セルビア人やユダヤ人の墓地もあり、民族が多く住んでいるサラエボならではだと思った。もともとこの土地の人々は寛容で民族共存ができていた。それがセルビア人優越主義者ミロシェビッチや彼に呼応するラドバン・カラジッチというボスニアのセルビア人リーダーが民族浄化つまりムスリム追放を掲げて非人道的な行為に出たことを思うと、胸が痛み全員でささやかながら黙祷をし、二度とこのようなことがないことを祈り、墓地をあとにした。

次の日、サラエボ最後の訪問先日本大使館と UNDP ボスニア事務所に出向きブリーフィングを受けた。大使の話では、ある程度の復興は終わりこれからは発展であると述べていた。ボスニアの目標はEU加盟ということだ。日本は、ODAによるバスを援助しており、日の丸と ODA マークをつけたバスが町中を走っていた。バルカン全域にいえることだが、日本は比較的多額の援助をしており、他のヨーロッパの地域やアメリカの人より格段に評判が良い。これは、日本人にとってとてもアドバンテージになると思った。それから、今のサラエボの状態の話しを聞き、問題は山積みとのことだった。まず紛争後、世界からの援助が年々減っていること。それは、日本にも言えることで紛争終了直後に比べると援助額が減少している。そしてNGOの撤退である。イラクやアフガニスタンなど紛争や戦争が次々に起こるため、NGOも新しい紛争地へ活動を移す。また経済問題が非常に深刻なようで失業率は非常に高いとのだ。旧ユーゴスラビア時代でもクロアチアやスロベニア産業地域に頼りきりで自国の産業はこれとってなかっただけに、ボスニアは苦しい時代が続く。新しい紛争でも、数年前の紛争ですら忘れられていく。これはどうすればいいのか。

スレブレニツァでの帰還民の村訪問

7000人以上ものムスリムの男性が虐殺され、住んでいた男性の大半が姿を消した町スレブレニツァ。この町で起きた虐殺行為はあまりにも残酷であり、セルビアによる虐殺の証拠隠しのために持ち去られた遺体は紛争終了後、数年間も戻ってこなかった。いまだに行方不明者が存在しているのも事実である。このスレブレニツァの悲劇を忘れないために、広大な敷地の墓地とともにメモリアルパークが造られ、クリントン米元大統領が出席して開園式

典が行われたのは2003年9月20日のことである。

スレブレニツァでは現在 UNDP によるスレブレニツァ地域再生プログラムなどにより難民として避難していた人々が帰還し始めている。このような状況を踏まえた上で、私たちは帰還まもない彼らに何かできないかと考えた。中村教授を通じて UNDP の現地スタッフと連絡を取り合ったが、帰還間もない彼らは生活のあらゆる面において十分ではなく、もし衣類や文房具などの援助物資を持ってきてくれるのならとても助かるとの話を聞き、私たちは援助物資を集め、町への支援と現状を知ることが目的にスレブレニツァに向かった。現地に近づくとつれ、サラエボと同様激しく銃撃された家々が目に留まる。日本を発つ前に見た“スレブレニツァの悲劇”というビデオで見た風景よりは、幾分復興しているように見えるが、やはり紛争での犠牲と荒廃がもっとも激しかった地域のひとつであると感じた。

現地に到着し、UNDP の現地スタッフとの話の中でスレブレニツァの町の中心から、より山の奥に入ったところに、帰還したムスリムの人々の村があり、私たちが持ってきた援助物資はその村に届けば喜んでもらえるだろうということだった。その村は帰還後間もない村々の中でも最も貧しい村のひとつであるという。

UNDP オフィスから車で行くこと約2時間、山を登り悪路に体を左右に揺られながら険しい道りを移動した。行けば行くほど家は少なくなり、本当にこのような場所に人が住んでいるのか疑問に思うような、劣悪な状況の場所に村が存在していた。この村は山の傾斜が厳しく、電線はない。共同の水庭が1箇所あるだけ。私たちが住んでいる日本との驚くほどのギャップに彼らの生活の大変さを感じた。

村に到着すると、村の代表のベゴ・ホグルジッチさんが私たちを迎えてくれた。彼は代表としてはとても若く、長老のようなイメージを抱いていた私は少しびっくりさせられた。まず、彼の家に招待され、この村や人々の生活などについてインタビューをすることができた。彼らは紛争終了後、難民キャンプで生活し現在帰還して間もない。しかし、自分の村に帰還したからといってすぐにもとの生活に戻れるはずはなかった。彼らの生活状況は劣悪としか言いようがない。

2 部屋とキッチンしかない一軒家に3家族が住んでいるという。1家族5人ほどで、一部屋に1家族というのがこの村では普通だそうだ。しかもその部屋と言うのも6畳ほどの小さいもので、部屋には布団が積んであった。部屋に入れない人は廊下で眠るのだという。トイレやキッチンも共同で、本当に雨風を防ぐだけというものである。居住条件だけでなく、仕事がなくお金を得られないという問題点もある。ボスニアでは深刻な失業問題を抱えている。政府からの援助というのも月20ユーロほどでこの額で一家族が生活することはできない。また UNDP は羊を一家族に一匹支給し、自給を促しているものの、現実問題としては不可能だ。彼らの収入源は家族の海外での出稼ぎなどによってまかなわれているのが現状である。しかし、それでも生活は大変であり、今一番何が必要かと質問したところ、何でも欲しいと言っていた。冗談でもなんでもなく、心からの訴えのように感じた。

次の問題は子供の教育問題である。近くに学校がなく十分な教育を受けておらず、親の手

伝いなどで羊追いをしているという。しかし、現在学校が建設中で、村の子供たちだけでなく周辺の村の子供を集め授業を開始する予定だ。少しずつではあるが設備も整っていくようだ。ボグルジッチさんは最後に、このような困難な生活状況でも難民キャンプでの生活よりはいいと言った。キャンプでは、衣食住がある程度保証されているが、こちらはそうともいえない。それでも自分の家で生活するという困難な道を選んでいることに、これまでの生活の大変さとともに、彼らにとって自分の村で住むということが重要なのだと感じた。

インタビュー後この村の大人から子供まで全員に集まってもらい、なぜ私たちがここへ来たのか説明した。そして、私たちが持ってきた援助物資の説明をし、それらを手渡した。衣類は村の代表に預け、不公平のないように分けてもらうように頼み、文房具はこれからできる学校で使ってもらうように伝えた。鉛筆だけは私たちの手から直接子供たちに手渡すことができたのだが、数の都合上一人当たり3本しか上げることができなかつたのは少し心残りであった。しかし、ここまで物資を運んできた苦勞が思い起こされ、とてもいい経験となった。子供たちは初めて見る日本人に戸惑いを隠せない様子で、鉛筆を渡すときも少し怖がるそぶりを見せたが、手渡すと喜ぶ姿を見せてくれたのがとても心に残っている。そして、物資を渡し終えた後、みんなで記念撮影を行った。カメラを構え、いざシャッターを押すというのに子供たちはあまり笑顔を見せなかつた。コソボやサラエボの子供は写真を撮るとなると、我先にと近寄りピースサインをするのだが、この子供たちは違つた。もしかしたら写真を撮るのは初めてなのかもしれないと思い、写真の写り方を自分なりに教えてみた。撮つたデジタル写真を子供たちに見せると、とてもうれしそうな表情を浮かべ、もっともっととせがむ。あの顔は今も忘れられない。今回このような帰還間もない人々の村を訪れ、そこに暮らす人々の生活を見たり、今の生活について話を聞けたことはとてもよかつた。

翌日、フランカというムスリムの村を訪れた。ここもセルビア人の襲撃を受け、家々は当時の惨劇を今も色濃く残す。以前は150世帯約600人が生活していたが、襲撃を逃れるため多くはツヅラという町へ避難した。2000年から帰還し始め現在は13世帯がここで生活しているが、住居が不足しているため2世帯が一緒に暮らさなければならない状況である。

ここでは1992年に約170人の男性と小さな女の子1人が犠牲になつた。襲撃したセルビア人は、同じ村で顔見知りの可能性があるため、お互いの顔を知られないように黒いマスクをかぶっていたという。昨日まで隣人であり親しくしていた者が突然殺しにやってくる、考えられない事態が起きたのだ。

ここに住むムスリム女性ラミッチ・ベヒーヤさんもまたセルビア人に夫を殺され、ツヅラに非難していた一人である。彼女は3年前にここへ戻ってきたが、彼女の4人の娘のうち病気のため2人をツヅラに残してきたのだという。現在の住居は2畳程の小さな小屋で、木の壁にはナイロンやフェルトを貼り、床にはラグを敷き詰めるなど防寒対策をしているが、窓も無く、人が住むのにとても十分とはいえない様子だつた。水は近所の水道から引いてくるらしく、生活は楽ではない。NGOやUNDPの支援により、ラズベリーやとうもろこしの栽

培をしているが、彼らにとって十分な量ではない。今、最も必要なものは家と家畜だという。帰還しても誰からも支援の手が伸びず、ベヒーヤさんはスレブレニツァで殺されたのはスレブレニツァに元々いた人々よりも周辺の村の人々の方が多いのに、世界の支援者はスレブレニツァにばかり目を向けるのだと嘆いていた。つまり村を追われた人たちがスレブレニツァに避難し、そしてまた最後の大量虐殺の追い討ちで、夫や息子を奪われたのだ。

紛争が終わって8年、彼らは難民キャンプでの生活から自らの地に帰還することができたが、これから厳しい冬を迎える。NGOの手が届かず、国連の支援だけでも十分ではないというこのような村はたくさんあるという。それだけに私たち学生が援助物資を携え、訪れたことに少しでも意味があったと考えたい。そして、それにより大きな意味を持たせるには、このような人々から直接聞いた、今彼らがどういう状況下で生活しているのか、そして何が必要なかを私たちが伝えていかなければいけないと思っている。そして、文教ボランティアとしてこの村へ継続的に支援することができればとてもいいと思う。援助は継続的に行うことに意味があり、継続することによってこの村の復興状況がよくわかるし、彼らと直接コンタクトを取ることで、より確かなニーズにこたえることができる。現在世界各地で戦争がおき、支援はどうしてもそちらが重視されてしまう。国際機関などの援助も一カ所に集中することはできない。しかし、新たな局面をむかえた彼らを私たちは忘れてはいけない。自らの生活を取り戻し、本当の意味での復興を目指す彼らはこれからが正念場である。

スレブレニツァ和解再統合青年キャンプ

Youth Reintegration Camp in SREBRENICA, 2003

キャンプ概要

UNDP(国連開発計画)が主催した民族和解推進ユースキャンプ(YOUTH REINTEGRATION CAMP IN SREBRENICA)に参加することができた。このキャンプは、ボスニア・ヘルツェゴビナのスレブレニツァという町を中心に、プラトナック、ミリッチという隣り合った町を舞台とし、ヨーロッパやバルカン半島の国々の若い世代での民族和解を推進し、友情を育み、NGO間の連携を図り、相互に経験の交換することを目的に掲げ、発展的民族共存をするために今回初めて開催された。紛争中ここスレブレニツァは民族大虐殺がもっとも激しかった地域のひとつで、この村に住んでいる男たちのほとんどが姿を消し、未だに行方不明の人々が存在している。そのようなことが起こった場所でこのようなキャンプが開催されることはたいへん有意義のあることである。このキャンプの期間は8月15日～23日で、参加国はボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア・モンテネグロ、マケドニア、フランス、日本。年齢層は14～26歳までの男女だった。キャンプ場は、キャンプスタッフ20人、参加者約70人という大規模なものだった。参加者はそれぞれの地域でN

GOや何らかの組織に所属し、さまざまな活動しているという。

キャンプでの生活状況

キャンプ場に着くと、私たちは少なからず戸惑うことになった。泊まる場所は、本当にテントで、UNHCRが難民用に使っていたものだ。そして、キャンプ場は元サッカー場で、トイレは当初水が流れず、シャワーも蛇口が数カ所ついているだけの簡易なものである。水は消防車のタンクから支給された。これまで2週間旅をして肉体的にも精神的にも疲れが出てきた私達はこれからの5日間どうなることかと不安を覚えた。

テントに入り荷物を下ろしほっと一息していると、ほかの参加者が私達のテントにやってきた。彼らには、私たち日本人はとて珍しかったのであろう一躍有名人になり、あまり大きくないテントに20人ぐらい集まり、何人もテントの外にあふれた。言葉は、セルビア語を中心としたボスニア語、マケドニア語で英語を話せる人は多くなかった。彼らは、ほとんど言葉に違いはなく、日本で言うなら各地の方言程度の違いである。彼らも私達とコミュニケーションを取ろうと、自分たちが知っている日本のことを話題にしてきた。忍者、侍、中田（サッカー選手）、空手など。なかにはジャッキーチェンと言って来た。遠く離れた日本の情報はあまり伝わっていない。

キャンプでのメインとなる活動はワークショップとフィールドトリップ。一日のスケジュールは、午前中から3時までワークショップを行い、それからスポーツなどで交流し、夜は音楽を聴き、お互いを知るようになっていた。ワークショップは、三つのトピックがあり、ボスニアにいる若者がどうすればいいか？ NGOの若者とのつながり、ユース組織のネットワークづくりなどである。私たちは、ボスニアの若者がどうすればいいか？についてのワークショップに参加した。

まずトレーナーがボスニア人の2人で、NGOに勤めているひとたちだ。クラスは、15人ぐらいだった。まず驚いたことは、ルールを決めることである。タバコを吸わない、居眠りしない、時簡に遅れない、他人の話を聞く。これは、当然のことだが始めるまえに確認することでスムーズに進むようにしたことに感嘆したが、彼らは、ルールをすぐ破っていた。私達が注意する場合もあった。彼らは、忘れていいのか、ルールとしての認識不足なのかわからなかった。そして、ワークショップが開始し、まずボスニアはどうかと言う質問に参加者は、仕事がない。だから、海外に行きたい。つまらない、政治的問題が山積み、ドラッグ、民族問題などおおくのマイナス意見があった。そして、マルバツ形式で海外に行きたいかという質問でほとんどの人が行きたいと答えた。ただ旅行したいということではなく、勉強して、海外で仕事をしたいという切実な問題であった。現在のボスニアでは、お金を稼ぐのは困難であるといっていた。

また民族問題の話では、ムスリム人はなかなかカフェに行くことができないと言っていた。やはり、セルビア人との溝はなかなか埋まらないと感じた。しかし、ワークショップでは、

いろんな民族がいて初日は別れて座っていたが、日が経つにつれ民族に関係無く座ったのだとトレーナーの一人が教えてくれた。外見を見ただけでは私達には区別できない。そもそも民族の決定的違いは宗教である。お互いに理解し、寛容さを持てば近いうち共存できるかもしれない。またそうなってほしいと思った。ワークショップの後のサッカーでは民族関係なく混合チームを組んで楽しくできたことに、昔は一つの国として共存していたことを思い出した。

ギャップ

このキャンプでは、多くの人との交流を通して改善が必要な点など、いろいろなことがわかった。最も感じたのは、ごみ問題である。平気でごみを捨てる。これにはがっかりした。キャンプ中での活動の一つフィールドワークでミリッチに出向き、川掃除を行った。しかし、みんな余りやる気がないとかやりたくない感じだった。むろん好きでごみを拾う人はあまりいない。だが、あまりにもひどかった。小さいものは拾わなくていいとかタバコの吸殻はひろわなくてもいいとかなかなか理解ができなかった。

またある女の子がごみをさして拾ってというようなことを言っていた。しかし、そのごみは女の子の近くにあるもので、すぐそこにあるからあなたが拾ってとあったが、靴が汚れると拾わなかった。これには私達も苛立ちを感じた。一番熱心にごみをひろっていたのは私たち日本人だった。せっかくだからということでがんばっていたのもあるが、一生懸命に拾った。あとでトレーナーに聞いたが、ボスニアの人はあまりごみに対する意識がないという。十分な処理施設がないらしいが、すべて川に流すことに抵抗がないのだろうか。

キャンプを通しての感想と私達の意味

当初私たちは、不安でいっぱいだった。設備も十分ではなかったし、それ以上に言葉の問題があった。英語を話せる人は全体の四分の一以下で最初はコミュニケーションに困った。ワークショップもセルビア語で進行していたため十分には理解できなかった。通訳の人もいたが、あまり献身的ではなかったこともあった。そのため、最初の2日間は、私達が来ている意味があるのかと夜テントでみんなで悩んでいた。それに前述したようにごみの問題でこの人たちに失望もしていた。キャンプを途中で止めて帰ろうかと本気で悩んだくらいだ。

しかしなぜ私達が5日間キャンプに参加できたかという、キャンプに参加した人々の豊かな人柄に触れることができたがからだと思う。参加者はもちろん、スタッフは常に私達に気をかけてくれた。そして、私達のキャンプに参加した意味がなんとなくわかった。日本人は珍しくみんなが集まってきてくれて、私達だけの交流だけでなく、ボスニアの子とセルビアの子同士が話をしていたことが見られた。私たちが媒介役となり、まわりが民族を超えて仲良くなってくれたことはたいへん意味のあることだ。私達は、日本の文化として折り紙と習字をみんなに見せて交流をはかったところ大好評だった。中でも、それぞれの名前を漢字で当て字にしたものが、とても喜んでもらえた。なかにはタトゥーにすると行ってくれたり、

かえって飾ってくれると言う人もいた。また柔道をすることもでき、日本から持ってきた胴着をみんなが珍しがっていた。私達が、キャンプ最後の日にコンサートが催され、ステージで話す機会があったので、そのときにごみ問題を取り上げた。最初、場違いでどうなることかと思ったが、拍手をしてくれてわかってくれたと思う。最後に日本の曲「翼をください」と「上を向いて歩こう」を歌ったが、会場はとても温かい雰囲気だった。その後、みんなと写真を撮ったり、メールアドレスを交換したり、テントでそれぞれの国の民謡を歌い夜遅くまで別れを惜しみ話し続けた。夜空には、きれいな星がきらめき、地上では若者たちの未来が明るくともっていた。

早朝スレブレニツァを後にして、サラエボに向かうことで、予定したすべての活動を終了した。

コソボ・ボスニア活動総括報告

コソボ

民族対立の根深さと前向きな姿

普段は何ら変わりのない彼らも、ひとたび紛争当時の話になると、それを語る表情は幾分険しいものになった。コソボ人権センター（KCHR）で中心となって活動をこなす若い彼らも、当時のことを思い出すことは大変につらいことだ。当時彼らがどんなことを感じたかなどについて知りたいという思いと、聞いてもいいのかためらう気持ちとが入り交じっていた。

彼らは時には涙を浮かべ、声を震わせながら当時の様子を語ってくれた。今回常に私たちとともに行動をし、アルバニア語と英語の通訳を見事にこなしていた大学進学直前のザーナ（18）は、実際に紛争時ボスニアに逃れるという経験をしている。彼女の家族は幸運にも無事だった。しかしながら仲の良い友人の中には家族を亡くした人がいるそうで、彼女でさえもその友人に紛争の時の話を持ち出すことはとてもためらう、と言っていた。同世代の若い彼ら数人に、同じように紛争時の話をしてもらったが、みんな口をそろえて「とにかく恐ろしい」「酷すぎる」と言った。しかし、どんなに酷いことをされ苦しんだかわからないのにもかかわらず、彼女たちは和解のために日々活動している。とても前向きな姿を感じることができた。自分だったらどうなのだろうか。この紛争はたった数年前の事実である。彼らは自分と同年代でありながら、私たちは知ることのない「恐ろしいもの」を経験している。そしてそれは色濃く彼らの心の中に刻まれている、という事実を目の当たりにし、不思議な感覚に襲われたのであった。

現地 NGO の資金面の課題

日本における NGO でも資金面での厳しさについてはよくいわれると思うが、現地コソボ

の KCHR でもその問題は顕著であった。2003 年の資金源としては、UNESCO と提携の人権教育のための小冊子作りにより資金を受ける程度であるため、スタッフはほとんどボランティアで運営し成り立っている状況だ。このように多彩な人権教育活動を進める彼らにとって資金不足は、存続に関わる深刻な問題だ。コソボの明るい将来のために前向きに活動する姿を見た私たちは、何とか援助をすることが出来ないかと考えた。そこで当面の活動のために 1000 ユーロ（日本円で約 14 万円）の協力をすることにした。私たちにも十分な資金のめどがあるわけではない。これは中村先生、生田先生らの協力や、日本で募金活動をした際に集められた多くの人々の善意がこもったお金だ。KCHR の彼らの人柄や、希望をもった取り組みを理解した私たちは、募金をここに充てることは間違いではないと確信したのだった。実際、スタッフの彼らもこの NGO の仕事だけでは厳しいため、現在は他の仕事を探している最中だという。彼らの目標は、すべてのコソボの人々が人権の大切さを理解し、一人一人が尊重され、将来の悲劇を防止することだ。その彼らの活動を充実、そして存続させていくためにも資金面で安定を得ることは緊急の課題といえる。

日本の広島原爆に対する思い

8月6日の水曜日は、ちょうど1945年の広島原爆投下から58年目を記念する日であった。その日もKCHRの日程をこなしたが、私たちがその話題を出す前に彼らの方から記念日の話をしてきた。コソボの人々は本当に良く広島原爆について知っている。なぜかといえば、彼らコソボのアルバニア人のセルビア人に酷い仕打ちを受けたという悲劇が、日本の原爆による長年の苦しみと重なって映るのだという。その日はコソボのラジオ局総支配人のエクレムさんが、私たちのお別れ会を兼ねた夕食会を催してくれた。やはりそこでは広島の話、そして日本の千羽鶴の話に触れ、日本では広島原爆の際に白血病の少女が折り鶴を折りながら病気が治ることを願ったこと。そして中村教授が、日本では今でも大切な家族や友人が重い病気などにかかった時には、無事回復の願いを込めて千羽の折鶴を折り、ともに苦しみを耐え忍ぶというエピソードを語った。その話には皆が息をのんで聞き入っていたのだった。

英語の必要性を痛感した日々

私たちの活動は終始英語でのコミュニケーションが要求された。KCHR活動の初日からその大変さを思い知らされた。まず公式な場で、英語を使って自己紹介をしたりスピーチをしたりといったことに不慣れな私たちは、コソボのKCHRの学生の英語力に圧倒された。初めて、そしていよいよコソボに入ってきたという張り詰めた気持ちが重なり、英語を使うことへの緊張はさらに高まった。日程の中で何度か人権教育についての講義が行われたが、もっと英語を聞き取りたい、そして理解したいという思いとは裏腹に、自身の英語力の乏しさに愕然としていた。

スケンデライ市の市長に日本からの支援物資を贈呈した際にも英語を使う場面があった。物資の中身が文房具やスポーツ用品で、私たちが日本において学内で呼びかけたり、知人に

協力を得たりして集められたものであり、ぜひ授業が始まる時期になったら子供たちに渡し
て使ってほしいということ話を話した。市長さんをはじめ、関係者みんなが話を最後まで注意
深く聞いてくれたのだった。

人権センター最終日の日本の人権問題に関するプレゼンテーションについては、その時の
ことを考えるたびにもどかしさや悔しさがよみがえってくる。私たちは約 1 時間を与えられ
日本で起こっている人権問題についての発表を求められた。内容としては、アイヌの人々の
問題、北朝鮮による拉致問題そして在日朝鮮人に対する差別や偏見について発表した。最初
は英語でプレゼンテーションを始めたのだったが、英語を使うことの方に神経をとられ過ぎ
てうまく進めることができないでいた。それは聞いている側にも伝わり、とても悔しい思い
をしたのであった。日本語でプレゼンテーションを行い、中村教授の通訳で進めたらうまく
いくのではないかとの提案を受け、休憩を挟んで再び発表した。発表した中身についても納
得のいくものではなく、新聞などを読んで情報に敏感であることの大切さも学んだ。日ごろ
の英語学習に対する態度がこういった形で自分たちの身にはね返ってくるとは、予想はでき
たがこんなにも大きいとは思わなかった。こういった活動をする際には、英語を自由に使え
るというのは大前提であることを実感したのであった。

ボスニア

NGO の動き

ボスニアの地方では今様々な問題が浮上してきている。セルビア・モンテネグロの国境がす
ぐ目の前のスケラニ村では、子供の通学をはじめ、生活するために必要な交通手段の整備に
取り組んでいる。国境はすぐ近くにあっても、一山離れた自国に行くことの方が難しい状況
だ。また、どこの医者に診てもらうか、医療費はどうするかなど医療全般の問題。そして子
供たちの麻薬問題がある。麻薬汚染の低年齢化が進んでいる。大人はその日どう生きるかの
問題に直面し、子供たちの面倒をなかなか見ることが出来ない。また教育環境の不備で、勉
強するための文房具や教科書が十分でない。そのためすることのない子供たちは麻薬に手
を出してしまうこととなり、一度手を出すと止められず盗みをするようになるなど様々な問題
に発展している。経済の及ぼす影響はこんなにも色々なかたちとなって現れてくるのかと、
改めてこの国の抱える問題の深刻さに気づかされた。

地方議会に出席

私たちはスレブレニツァでの現在の UNDP の活動をここの地方議会に引き継ぐための会
議に出席する機会を得られ、それにより復興の真ただ中での地方の現状と自立のプロセス
を肌で感じる事ができた。しかし、地方議会だけの力で行政を進めることはまだまだ困難
であるという感想を抱かざるをえなかった。今回は主に帰還者の生活の再建や住民の仕事と
教育の発展に関する行政の引継ぎをメインテーマとし進められたのだが、始まってすぐに雰
囲気が悪くなり退席者が出たり、ムスリム側の発言のときにセルビア側はあまり聴こうとし

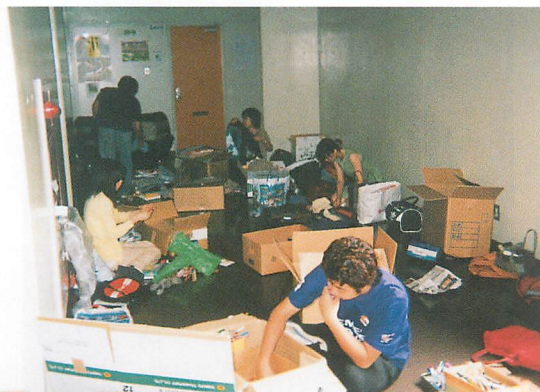
ないなど、議会が討論の場として成り立っておらず。UNDP 関係者も今日はあまり意味のない会議だったと評した。スレブレニツァの自立はまだ相当の時間を必要とするだろう。

今回スレブレニツァの町を中心に、紛争終了後の復興プロセスの多くを見ることができた。そして、数々の問題点を知ることができた。大きなトピックで挙げた活動とそれ以外のこのような視察により、それぞれに問題は深刻であり解決はまだまだ先であると感じた。しかし、現状は日々変わりつつある。この春訪れたときの話よりもこの夏は確実によくなっていたし、次に訪れるときはまた違って見えるだろう。



コソボ・ボスニア 夏

コソボ



支援物資の仕分け作業。トラブル回避のため、慎重に梱包する。



ミトロビツァのセルビア人地区から、重い物資と共に、いざコソボへ。



セルビア人の帰還難民キャンプ。仮設のトイレやシャワーもあった。



難民キャンプのテントの中。帰還まもない彼らの生活の厳しさがうかがえた。



帰還を果たしたセルビア人は、まず紛争で壊れた家の修復に追われる。



ベシアナちゃん(中央)と半年振りの再会。ちょっとお姉さんになったかな?



シュティミエ市長の案内で、虐殺された人々の集団墓地を訪れた。
(ラチャック村)



アデミ・ヤシャーリー家の惨殺跡。
襲撃のすさまじさを物語る。



7歳の子供も犠牲になった。
(アデミ・ヤシャーリー一族の墓地)



近所のスーパーで夕食の買い出し。コンボのスイカは甘い!!



コンボ人権センターの最終日。
調布第五中学校の生徒からのメッセージを託した。



ワークショップの様子。

ボスニア



ソニイズレストランの地下。
戦時中、ここにムスリム女性が収容された。



紛争により、スポーツパークも集団墓地と化した。



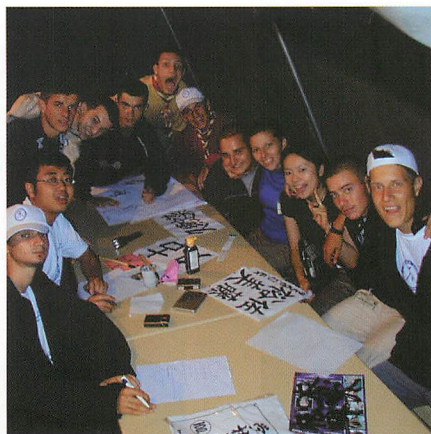
育ち盛りの子供たちもかかえ、
生活の不便さを切実に訴える女性。



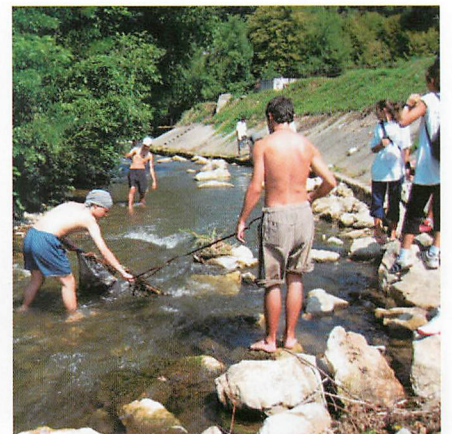
鉛筆をもらって喜び子供たち。では、記念撮影!!



柔道で異文化交流。柔道への興味は強かった。



習字を伝授。皆の名前を書いた。



ミリッチ川のクリーンアップ活動。

コソボ・ボスニア 春



UNDPの行うCPRプロジェクト。民族和解のために、対立していた者同士が協力して家を建てる。(コソボ)



「おかえり、ベッシー!」／東京での半年間の治療を終えて帰郷。



日本のODAで寄贈されたボスニア・モスタルのバス。サラエボでもとても目立った。



歴史的な橋も紛争の犠牲に。復元の始まった「スタリ・モスト」。(モスタール)



墓地の広がるサラエボの丘。紛争による犠牲者の数は計り知れない。

コソボ・ボスニア視察活動

2003年3月21日～4月6日

参加者

文教大学国際学部国際関係学科 4年 一丸静香
 同 4年 増村真理子

アドバイザー 文教大学国際学部教授 中村恭一

3月21日	成田出発	3月21日	成田出発
22日	キエフ(ウクライナ)到着、観光	22日	キエフ(ウクライナ)到着、観光
23日	キエフ(ウクライナ)出発	23日	キエフ(ウクライナ)出発
24日	ワルシャワ(ポーランド)到着	24日	ワルシャワ(ポーランド)到着
25日	ブダペスト(ハンガリー)到着	25日	ブダペスト(ハンガリー)到着
26日	ベオグラード(セルビア)到着	26日	ベオグラード(セルビア)到着
27日	コソボ(バルカン半島)到着	27日	コソボ(バルカン半島)到着
28日	コソボ(バルカン半島)出発	28日	コソボ(バルカン半島)出発
29日	サラエボ(ボスニア)到着	29日	サラエボ(ボスニア)到着
30日	サラエボ(ボスニア)出発	30日	サラエボ(ボスニア)出発
31日	日本大使館へ JEN/GO事務所へ	31日	日本大使館へ JEN/GO事務所へ
4月1日	サラエボ出発、オーストリア(ウィーン)訪問	4月1日	サラエボ出発、オーストリア(ウィーン)訪問
2日	ウィーン(オーストリア)出発	2日	ウィーン(オーストリア)出発
3日	キエフ(ウクライナ)到着	3日	キエフ(ウクライナ)到着

活動スケジュール

	<a.m.>	<p.m.>
3月21日	成田出発	チューリヒ(Zurich in Switzerland)到着
22日	チューリヒ出発	ベオグラード(Belgrade in Serbia)到着、観光
23日	ベオグラード出発	ミトロビツァ(Mitrovica in Kosovo)到着
24日	グラツァニツァ(Gracanice)へ	UNDP(in Prishtina)訪問、CPR project(peja)視察
25日	ブリーフィング(in UNDP)	ラチャック(Racak)訪問
26日	プリシュティナ(Prishtina)見物	ベシアナちゃん帰国歓迎(in Prishtina Airport)、 アデミ・ヤシャーリ(Ademia Jashari)記念地へ コソボ(Kosovo)出発
27日	ドブロブニク到着 (Dubrovnik in Croatia)	ドブロブニク観光
28日	ドブロブニク出発	モスタル(Mostar in Bosnia)到着、視察
29日	モスタル出発サラエボ(Sarajevo)到着	サラエボ旧市街を視察
30日	サラエボ、パレ(Pale)紛争跡地巡り	
31日	ブリーフィング(in UNDP) 日本大使館へ	JEN(NGO)事務所へ
4月1日	サラエボ出発スレブレニツァ (Srebrenica)到着、OSCE、UNDP 訪問	市長と会談、地元 NGO 訪問、 31日の埋葬式の墓地を訪問
2日	プラタナツツ出発	ベオグラード到着、日本大使と会食
3日	ベオグラード出発	チューリヒ到着 (6日 成田到着)

視察の目的

民族問題を実感することの少ない島国で育った私たちにとって、バルカン地域で起きた比較的新しい「民族対立」という出来事は非常に理解し難く、衝撃的で、興味深いものであった。昨日まで仲良く暮らしていた隣人同士がなぜ殺し合わなければならなかったのか、何が彼らを紛争という残虐な行為へ導いたのか。地球上で様々な「紛争」や「戦争」が進行している現在、過去に起こった事実を受け止め、自分なりに原因を追求する事がこれからの地球の未来を主観的に考える上で、大変重要な事だという思いが、私たちをバルカン地域の視察旅行へと向かわせた。

コソボ概要

面積：10,887 km²（岐阜県と同じ）

人口：約190万人（人口の約60%が25歳以下）

州都：プリシュティナ

民族：アルバニア系（88%）、セルビア系（6%）、スラブ系（3%）、ムスリムロマ系（2%）、

トルコ系（1%）

言語：アルバニア語、セルビア語等

宗教：イスラム教、セルビア正教等

政体：国連による暫定統治

GDP（2002年）：20億ユーロ（推定）

1人当たりのGDP（2001年）：944ユーロ

GDP成長率（2002年）：7%（推定）

失業率：56%

通貨：ユーロ

コソボ視察活動

ミトロビツァ

コソボ北部のミトロビツァは紛争後、イバル川を境に北部のセルビア系多数派地域と南部のアルバニア系多数派地域に分断され、セルビア政府による弾圧とアルバニア人による報

復や住民間の襲撃事件が繰り返された地域である。分断以来、NATO主体の国際部隊（KFOR）によって橋の往来は規制されてきた。

3月23日、14時15分ミトロピツアの北側（セルビア人地区）に到着。初めて訪れる私たちにとって、コソボへは一度もパスポートを見せることなく“入国”した。それはセルビア政府がミトロピツアはセルビアの一部として扱っているからである。現在もイバル川を隔てて、北側にセルビア系、南側にアルバニア系と分かれている。期待していた「共存」のイメージとは、まるで懸け離れた風景でもあった。未だに分断はされているものの、橋の上の通行を制限する兵士の規模の縮小や、走る戦車が一台も見られなかったことは大きな進歩と言えそうだ。

川を挟み、北側と南側の雰囲気には明らかに違いがあり、なかなか理解のし難い光景でもあった。この橋の上から兵士達が姿を消し、人々が安全に自由に往来できる日は果たしていつになるのだろうか。そんな事を考えながら、重いスーツケースを引いてゆっくり橋を渡った。

国連開発計画（UNDP）CPRプロジェクトの視察

3月24日、4年前のちょうどこの日、NATO軍の空爆が開始された。

UNDPコソボの更なる紛争の予防と和解のプロジェクトであるCPR（Conflict Prevention and Reconciliation Initiative 紛争防止ならびに和解促進事業）の現場を視察した。CPRプロジェクトは民族間の和解、相互扶助の関係をお互いの破壊された家を修復する作業を通して築いていくというプロジェクトである。帰還したいが、元々住んでいた家が破壊されていて帰る場所が無い少数派の人々の家や、同じく破壊されたアルバニア人の家をお互いが協力して修復作業を行う。一度家を建ててもらった家族は、次の家族の家を建てる。そしてまた次の家族の家を・・・というように、報酬をもらわずにお互いの民族が協力し合って作業を行なう、大変興味深いプロジェクトで、私たちは紛争時破壊の一番ひどかった西部に位置するペヤという町での修復作業現場を視察した。そこでは6人くらいのアルバニア人の男性たちが、夫を紛争で亡くしたロマの女性と息子の親子の家を建設していた。資材はすべてUNDPによって支給される。

建設中の家の横で、女性は目に涙を浮かべながら、紛争時の悲惨な体験を私たちに懸命に伝えようとしていた。そして、学校へ行っていれば小学4、5年生の息子が私たちが気遣ってか、切なそうな笑顔で母親を隣で見守っていた。その時、コソボに入ってから初めて紛争の悲惨さというものを実感した。紛争終結から4年が過ぎても彼女たちが心に負った傷は少しも癒えてはいないのではないかと思った。このプロジェクトにおいて最も厳しい事は、地域により民族関係が異なる事だと、UNDPの日本人スタッフの稲江さんが教えてくれた。

ラチャック事件現場

1999年1月15日、突然コソボ中部のアルバニア人地区、ラチャック村がセルビア治安警察軍によって襲われた。男たちは山の中へ逃げ込むが、待ち伏せしていたセルビア軍によって42人が殺害されたといわれている。

3月26日、私たちはその殺害現場へ向かった。斜面が急で険しい山を登り、その細い小道には今でも血のついたセーターや待ち伏せしていた兵士が食べていた缶詰の空き缶が散らかり残っていた。道に付けられた赤い印はここで殺害されたという事実を、私たちに訴えかけているかのようだった。胸が痛くなった。山の上からは村全体が見渡せ、当時の状況を中村教授の説明を聞きながら想像してみようとしたが、とても自分の頭の中では映像にはならないほど、理解し難い出来事であった。

説明を聞いている時、屋外授業をしていた小学生が無邪気に私たちの方に集まってきて、漢字のサインをせがんできた。とても元気で、先ほどまで聞いていた出来事をこの子どもたちも体験しているとは、とても思えなかった。

42人の犠牲者の墓地を前に、ひとつひとつのお墓に心の中で手を合わせた。

マリシェバ高校

ラチャック村視察後、一昨年と昨年文教大学生がボランティア活動を行ったマリシェバ高校を訪ねた。2年前に製作した壁画や1年前の衛生教育のポスターが今でも新品のように美しく残っており、先輩や友人の活動の跡を見る事ができた。日本のNGOアドラ・ジャパンの学校再建計画によって再建されたマリシェバ高校はとても立派で、教室にはパソコンも完備されていた。完成したばかりの体育館はまだ新しい香りがし、校長先生が嬉しそうな面持ちで私たちを案内してくれた。授業中の教室で挨拶したとき、学生の皆さんがかい笑顔で迎えてくれた。

ベシアナちゃん

3月27日、コソボ視察の最終日。日本から、火傷の手術を終えてお父さんと共に半年ぶりに帰国するベシアナちゃんをプリステナ空港で迎えた。私たちが空港に到着した時には既に、ベシアナちゃんのお母さんや兄弟、親戚がベシアナちゃんの到着を落ち着いた無き様子で待っていた。私自身も彼らを見て、とても興奮しながらベシアナちゃんの姿を探した。約30分後、大学の先輩であり、アドラのスタッフになって活動する伊丹知子さんと共に、無事ベシアナちゃんとお父さんが到着。最初は少し照れくさそうにしていたが、お母さんに抱き上げられ、すぐに笑顔に戻った。

ベシアナちゃんの家へ向かう途中、プレカツのアデミ・ヤシャーリのモニュメントを訪れた。ここは、コソボ解放軍(KLA)の指導者アデミ・ヤシャーリの一家が暮らしていた家であり、1998年3月にセルビア警察軍によって襲われた。アデミ・ヤシャーリは早くから示威運動に参加し、ヤシャーリ一族は愛国心を胸に、セルビアによる弾圧に立ち向かっ

た。アデミ・ヤチャーリはアルバニア共和国で戦闘準備をし、97年には初攻撃をコソボー
アルバニア国境でセルビア警察に対して行い、その後スケンデライなどで兵力を蓄え、紛争
が本格化する中で、98年からセルビア勢力により包囲攻撃が続いた。アデミ・ヤチャーリ
の肖像画が正面に飾られた家自体がモニュメントになっている。家の壁全面に銃弾の跡が残
っており、襲撃の残虐さを物語っている。

コソボを訪ねて

今回のコソボの視察旅行は3日間ではあったが、大変内容の濃いものだった。3日間で自
分の目で見、聞いたことは全て新鮮であり、また驚きでもあり、心の休まる時が無かったよ
うに思える。実際に起こった事件の跡の悲惨さや、紛争を体験した人の心の傷。ほんの少し
の時間、一緒に話を聞いたただけなのだが、そういったものを感じたということは、まだまだ
コソボの紛争における真の意味での解決はなされていないと思った。文献やメディアからは
あまり感じる事のできない人の命の重みを改めて実感すると共に、紛争によって生まれる人
の憎しみや悲しみにも計り知れないものがあるのだと気付いた。

しかし、一方ではコソボの将来に希望のもてる明るい場面にも出遭った。コソボに住む
人々から生まれる「笑顔」は、まぎれもなくその一つである。私は、実際に紛争を体験した
訳ではないし、特別悲惨な出来事を経験してきた訳でもないが、やはり人によって負わされ
た心の傷は人によってしか癒す事ができないのではないかと思う。完璧に心の傷が消える
とは思わないが、長い時間をかけて以前対立しあった民族同士がお互いを認め合い、向き合え
る日が必ずや来るのだと信じている。

こういった現場に直接足を運び、現地の人々の声を生(なま)で聞く事、事件現場を生(なま)
で見ることは、紛争地や貧困地域に携わる上で非常に大切な事であると実感した。今回のコ
ソボでの3日間、自分自身良い刺激を受けたし、国際協力の必要性を改めて感じた。今後、
ますます「現地に近い」勉強に力を注いで、国際協力に従事していきたいと思う。

最後に3日間ドライバーとして、コソボ中を案内してくれた UNDP のゼチャ・アデミさん、
UNDP の国際スタッフの方々に感謝の言葉を贈ります。ありがとうございました。

ボスニア・ヘルツェゴビナ概要

位置：南東ヨーロッパのバルカン半島に位置し、クロアチア、セルビア、モンテネグロに囲まれている。南のわずかな部分がアドリア海に面する。

面積：5.1万km²（九州と四国をあわせた程度）

人口：438万人（91年調査。紛争後国外に難民がおり、実際はこれよりかなり少ない）

首都：サラエボ(Sarajevo)

民族：ムスリム人（=ボスニア人、44%）、セルビア人（31%）、クロアチア人（18%）ほか

言語：ボスニア語、セルビア語、クロアチア語（この3つは方言程度の違いしかない。）

政体：共和制

GDP（1999年）：45億ドル

一人あたりのGDP：965ドル

失業率：ボスニア連邦 43.5%、セルビア(スルブスカ)共和国 36%

通貨：コンベルティビルナ・マルカ(Konvertibilna Marko) 1KM=約59,75円

地形：丘陵と山岳と谷の地形で国土の約50%は森林である。国土のうち約20%が耕作可能。天候：特徴は、夏暑く冬寒い。標高の高い地域では、夏は短く涼しいが、冬は長く厳しい。海岸沿い地域では冬は長続きせず、雨が比較的よく降る。

ボスニア視察活動

モスタル

クロアチアのドブロブニクから約4時間バスに揺られて、ボスニアの南部ヘルツェゴビナのモスタル(Mostar)に着く。モスタルは首都ボスニアの南西約70kmのところにある、ボスニアの歴史都市であり、バルカンの他の都市同様にトルコの影響が強く見られ、現在も多くのモスクが点在している。

モスタルの歴史は、1482年に街がオスマントルコに占領された事に始まる。そして町の中央を流れるネレトヴァ川に1566年、オスマントルコの建築芸術である美しい石造りのアーチ橋が建設された。この石橋はトルコ語で「古い橋」を意味するスタリ・モストと呼ばれ、モスタルの町の名の由来になった。スタリ・モストは長さ27.5m、高さ18mでセメントを使わず、鉄鋼で石を組み立てたといわれている。この橋は一見するとヨーロッパのどこにでもある石橋のように思われるが、強度の弱い石材で作られているため、完全なア

一チ型でないと崩壊するといわれている。そのため、この橋の建設を行った当時のオスマントルコの建築の技術は高く評価されている。なおこの石橋のたもとには小さな砦のような塔が立っている。これは「タラの塔」と呼ばれ、当時、火薬庫として使用されていた歴史的建造物である。このスタリ橋とタラの塔周辺のネレトヴァ川岸一帯に古い歴史的建築が多く見られた。石畳の素晴らしい扇模様の通りに入ると、ヨーロッパにいることさえ忘れさせる。

モスタルは16世紀に大きな地震に見舞われ、町のほとんどが被害を受けた。現在の古い建物の多くは地震後のものである。

紛争時、ここモスタルではムスリム人、セルビア人、クロアチア人の三民族構成率がほぼ均衡だったことから、モスタルの支配権をめぐり、三つ巴の激しい戦闘が繰り広げられた。残念ながらモスタル旧市街はボスニア紛争による被害が最も大きかった場所の一つで、ムスリム人とクロアチア人の戦闘がネレトヴァ川を挟んで行われた。スタリ橋は、その攻防戦によって無数の銃弾、数十発のロケット砲や迫撃砲を受けるも、何とか持ちこたえていたが、この歴史的な建造物であるスタリ橋が補給路になっているという理由で弾薬が仕掛けられ、完全に破壊された。1993年11月9日のことである。現在ではどちらの軍の誰が橋の破壊を命令したのか結論は出ていないが、破壊された石を川から回収し、スタリ橋の再建が始まっている。(クロアチア人勢力により破壊されたという説が多くある。)

現在では、仮の木造の橋が、ムスリム人地域の東側とクロアチア人地域の西側を結び、人の行き来も頻繁に行われているように見えた。しかしこれはごく最近の話のようだ。

サラエボ

モスタルからボスニア中央部へ、バスで約3時間、険しい山の間を縫って、首都サラエボ(Sarajevo)に着く。

1984年、冬季オリンピックの開催された近代都市として、サラエボに馴染みのある人も多いただろう。しかし、その後、このサラエボが民族紛争の場となってしまったのである。

サラエボは1992年4月から3年半という長い間、セルビア人勢力に包囲された。盆地を囲む丘には約400の戦車や大砲が整備され、大小数千の機関銃とともに銃口を市街地に向けていた。セルビア人側の包囲とともに、ボスニア政府(ムスリム主義)が一般人の市外への脱出を禁じたため、市民は「セルビア人側の標的」かつ「政府の人質」として、二重に苦しむことになった。

サラエボもモスタルと同様に、500年のオスマン帝国支配の後、オーストリア＝ハンガリー帝国に併合された歴史を経て、アジアとヨーロッパが共存、融合した独特の景観を作り出している。

中世には、西欧で迫害されたユダヤ人を受け入れるなど、民族や宗教の違いに寛容な伝統があり、紛争前には(紛争中も)近所同士、仲良く、食事に招待したり、民族・宗教の違いを越えての結婚も珍しくない。ちなみに、主要三民族といわれるムスリム人、セルビア人、クロアチア人とは宗教が違うがために分けられているのであり、人種的には違いはなく、外

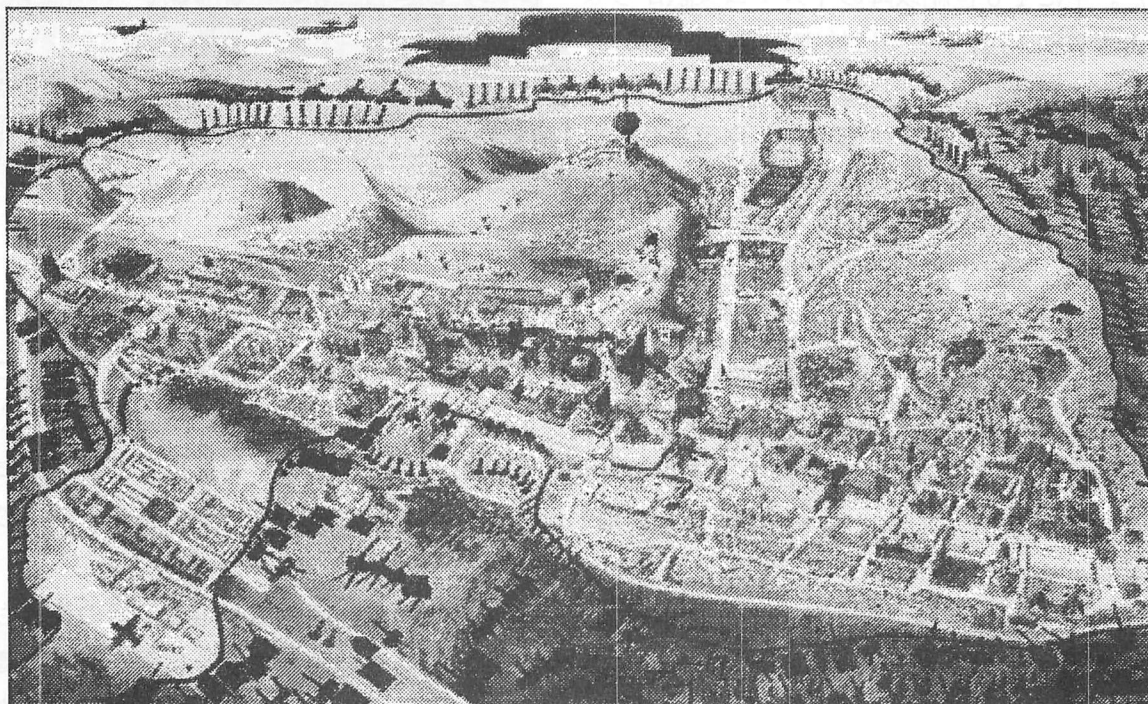
見では見分けがつかない。ボスニアの「ムスリム人」とは、オスマン帝国支配下で、改宗したセルビア人、クロアチア人のことである。

サラエボでは、紛争直前少くないセルビア人が町を抜け出して、セルビア人勢力軍に加わり、サラエボを包囲する側にまわった。一方、自らの意志で街を守る側に立ったセルビア人もかなりの数に上ったといわれる。ちなみにボスニア政府軍の参謀総長はセルビア人だった。

紛争が「民族紛争」だったことは確かだが、「民族主義セルビア人」対「多民族共存主義ムスリム人」の理論の衝突という側面もあると言える。

戦闘中の包囲下でも、町に残ったサラエボ市民は、民族の違いを超えて助け合った。戦闘でガスも水道も出なくなり、水を汲みに出るのは命がけである。攻撃を避け、建物の間の細い路地を選んで歩き、見通しのいい交差点では、水の入った重いポリタンクを下げたまま狙撃されないよう走る。一杯の洗面器の水で全身を洗い、その水を捨てずにトイレの水洗タンクへ。冬は街路樹や家具、蔵書を燃やして暖を取る。攻撃が激しい晩は、地下室や階段で眠る。テレビは停電で映らなくなったり、ラジオの乾電池は塩水でゆでると一時的に回復することが発見されたり、食糧の不足が続く非日常的な日常生活を耐えた。

ほぼ完全に国際援助物資に依存しつつ、それすらも十分に回ってこないため、サラエボ市民は平均で20キロもやせたという。ジョーク好きのサラエボ市民はこれを、“(ダイエットの)カラジッチ効果”と呼んだ。(※カラジッチ：ボスニアのセルビア人最高指揮官)



サラエボを拠点とするプロデューサーグループ、FAMA (ファマ) が制作したイラストマップ。1992年から96年までのサラエボの街の様子が描かれており、都市を包囲する重火器の配備も実際の調査に基づいている。

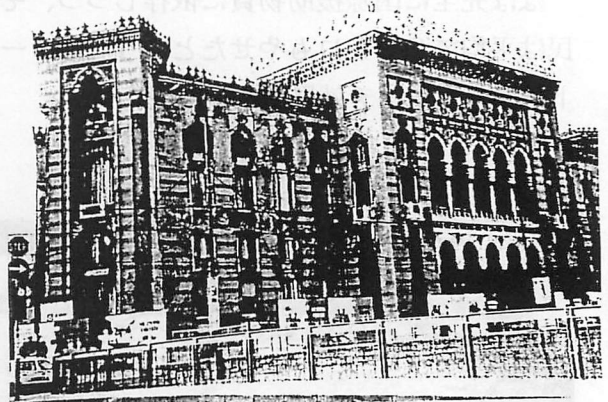
また、普段通りの生活を続けることが、サラエボ市民にとっての最大の「抵抗」だった。化粧して、きれいに装い、カフェで友人とおしゃべりを楽しむ。それが非日常的な戦争に対する精一杯の抵抗だと、市民たちは考えたのだ。極限状態の中でも、あり合わせの材料で作った料理を、近所で分け合って食べたり、おしゃべりをしながら、アネクドート（小話）を作って戦争を笑い飛ばしたという。

私はサラエボの街に活気を感じた。旧市街は、貴金属店や民族工芸品店が連なっていて、人々が通りを埋め、新市街には、オープンカフェが広がり、どこも満席状態であった。しかしその光景は、ボスニアの経済状況を物語っていた。田舎から出てきた若者や労働に適した年齢の人々がウィークデーの昼間から、カフェでおしゃべりできるなんて深刻な雇用不足の表れだ。

サラエボで印象を受けたところをいくつか紹介することにする。

・国立図書館

旧市街(バシチャルシア)に隣接したミリャツカ川岸に立っていた。オーストリア＝ハンガリー帝国時代に市役所として建設され、後に国立図書館として使用された。しかし、1992年8月25日、サラエボを包囲していたセルビア勢力により崩壊、外壁のみを残し、全焼した。蔵書の救出活動を試みた市民に対しても迫撃砲・機関銃による攻撃が加えられ、市のシンボルでもあった疑似ムーア様式の綺麗な建物は崩壊し、約300万冊の蔵書の大部分が焼失した。主に16世紀以降のイスラム文献からなる貴重書約15万5千点は被害を避けるために地下室に運ばれたが、そこでかなりひどい水害を被ったらしい。外壁はほとんど修復されていたが、入り口は閉められ、中を覗くことさえできなかった。



・スナイパー通り

名の通り、狙撃(そげき)兵通りである。戦時中、サラエボを包囲していたセルビア勢力により、動くものが全て狙撃された道である。サラエボを東西に貫く大通りで、見通しがよく、セルビア勢力にとって、射的台のようなものだった。川の対岸、高層マンションに潜んだセルビアの狙撃手(スナイパー)は、通りを歩く者、子供や老人に至るまで全てをライフルの標的にしたのだ。

今では片側3車線にひっきりなしに車が通り、市民を乗せた路面電車が走る、何の変哲もない大通りだが、おびただしい数の弾痕が残っていた。まるで舗装してすぐに雨が降った道のように穴があいていた。通りに面した建物にも模様のように弾痕が刻み、所々には砲撃を

食らった跡もあった。実際に歩いてみて感じたのは、確かにスナイパー通りには遮蔽物がほとんどないということだ。それでも、当時、サラエボ市民は食料や水の調達のために、この道を命がけて走り抜いたのだ。

・オスロボジェーネ新聞社

スナイパー通りの西に、ひときわ目に付く新聞社の廃墟がみえる。1992年4月にはすでに、激しい攻撃を受けていた。通信機関などは、紛争開始早々狙われた。原型がわからないほどに破壊されていた。これがサラエボの地元紙「オスロボジェーネ」の元社屋だ。社屋はこのとおり破壊されたが、それでも社員は地下室に避難し、そこで一日も休まずに新聞を発行し続けたのである。サラエボ市民を励まし続け、情報を与えてくれたその紙面は「水と同じぐらい」、人々の必需品だったといわれる。命がけて撮り続けた包囲下のサラエボの様子は、世界中のメディアでも使用された。この新聞社は、取り壊されることなく、このままの姿で保存されるそうである。

・サラエボ冬季五輪と墓地

1984年、冬季オリンピックのメイン会場となったスタジアムを訪ねた。メインスタジアムの隣にあったはずのサブグラウンドが墓地と化したのである。おびただしい数の、墓石と十字架。そして墓碑に刻み込まれている数字のほとんどが92、93、94、95のどれかで終わっている。生まれた年は当然さまざまだ。そして宗教も、キリスト教式、イスラム教式、キリル文字、アラビア文字……。紛争の犠牲者の数に、墓地が間に合わず、また近くに埋めざるを得なかったことを、想像させた。このグラウンドだけでなく、盆地のサラエボ市街から丘を見渡せば、至る所に白々と墓石が並んでいた。「スポーツは民族、宗教、人種を超えて人々をつなぐ」。これは五輪の理念であるが、サラエボの悲劇は、必ずしもその理念が現実の世界ではまだ実践されていないことを物語っている。

・日本からの贈り物—黄色の路面電車

サラエボを走り回る路面電車の中に、ひと際目立つ、黄色の路面電車にお目にかかることができる。日本政府により1999年、大小含めて80台、モスタルには45台のバスや路面電車が無償資金協力された。側面には日本のODAのロゴが入っていた。その路面電車を見ていたら、運転手さんに「これ、これ、日本の援助!!」という感じで、手を振られた。旧ユーゴを中心にサラエボでも活動を行うNGO・JENの話では、停留所は一つ一つ止まるのに、降りるのを知らせるブザー(日本風)がついているが、誰も使っていないらしい。

スレブレニツァ

首都サラエボからボスニア東部へ、タクシーで約2時間半、山道をひたすら走り、ブラタナツ(Bratunac)に着く。ボスニア内部は、山岳地帯である。急な山道は、「眠っていない

と酔う」ほどであった。プラタナツツのホテルに荷物を置き、日帰り、隣町に位置するスレブレニツツ(Srebrenica)に入る。紛争後のボスニアは、事実上ふたつのエンティティーから構成されている。ムスリム・クロアチア人による「ボスニア連邦」(領土51%)と、セルビア人による「セルビア(スルブスカ)共和国」(領土49%)から成る。スレブレニツツは「セルビア人共和国」に位置する。

紛争時スレブレニツツは、1993年から国連平和維持軍が駐留し、サラエボなどと共に「安全地帯」と安保理で宣言された。ところが95年7月、セルビア勢力に攻められスレブレニツツは陥落、他地域から危険を逃れてきた人々も含めて4万人近いムスリムたちが危険にさらされた。男たちは虐殺され、女や子供たちは町を追われた。平和維持軍オランダ部隊(4百数十人)では、最初から守れるはずがなかった。加えて、国連部隊を援護するはずのNATO(米軍)は、セルビア軍勢力の攻撃準備を偵察衛星で事前に知りながら、国連PKO幹部らとの連携も十分にとれず、陥落を事実上黙認する結果となった。国連PKOの歴史に大きな汚点を残したと言われている。

ほぼ90%を占めたムスリム住民地区であったスレブレニツツには、ムスリムはいなくなり、サラエボなどから、行き場を無くしたセルビア人たちが移り住み、セルビア人の町となった。

現在では、UNDPを中心に「スレブレニツツ地域復興計画(Srebrenica Regional Recovery Programme=SRRP)」が始まっている。ムスリムの帰還、インフラ・住宅の整備、雇用など多くの分野で復興計画を進めている。「我が故郷スレブレニツツに戻りたいが・・・」多くの問題や不安がある中、2003年3月現在、約千人のムスリムが帰還した。現段階では、雇用の不足や子どもの学校での「文字」の違い、通う距離の遠さなど、多くの問題も残る。

私達のスレブレニツツ入りは、実際より一日早く入る予定であった。しかし予定していた3月31日にスレブレニツツで虐殺犠牲者の最初の集団埋葬式があり、ボスニアの人々はもちろん私達も、関係者以外スレブレニツツに近寄ることができないということで、サラエボ滞在を一日伸ばし、スレブレニツツ訪問は4月1日になった。95年7月に起きたスレブレニツツでのセルビア人によるムスリム殺害から8年。7000人以上といわれる犠牲者の内、600人の埋葬が行われたのだ。その映像を、私達はサラエボで見っていた。紛争後近寄りもしなかつたスレブレニツツに、当時の住民(ムスリム)が愛するもののお墓を作りに来て来たのである。遺骨はないが、遺品を埋める家族の姿に、言葉がでなかった。遺族にとっては、まだまだ過去のことでないのである。

ボスニアを訪ねて

異様であった。オスマントルコとオーストリア＝ハンガリーによる支配の歴史が、確かに入り混じっていた。ヨーロッパにいることを忘れさせる、イスラム様式の建物や細工、そしてモスク、文化。そのようなものがここボスニアには強く根付いていた。振り向けばモスクが、振り向けばイスラム正教会が、ちょっと行けばユダヤ教会が、という世界であった。

停戦から8年のボスニアは、まだまだ不安定と言える。様々なものが壊れた、ボスニア。建物も、経済基盤も、仕事も、政治体制も、そして人間関係も。それでも人々は生きなくてはならない。戦争で生まれた、憎しみや悲しみを、乗り越え、もしくは共有して、人々は生きていた。

ボスニアの人々はどの世代も戦争体験者である。第一次・二次大戦を経験し、自国の独立戦争を体験した。私達とは、かなり異なった歴史を刻み、そしてこれからも、違う歴史を刻んでいくと思う。これから生まれる子ども達が戦争を体験せずに、生きていけるよう願わずにはいられない。最後に、私達のコソボ・ボスニアの視察旅行を可能にしてくださり、また、多くのサポートかつアレンジをしてくださった中村恭一教授に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

<概要の参考資料> 外務省ホームページ
UNDPホームページ

国連開発計画(UNDP)コソポインターンシップ活動

2003年5月12日～7月30日

参加者

文教大学国際学部国際関係学科 4年 増村真理子

アドバイザー 文教大学国際学部教授 中村恭一
同 文教大学国際学部助教授 生田祐子

活動スケジュール

5/9	成田空港発	16-20	オフィスワーク
10	パリ シャルル・ド・ゴール空港経由 プリスチナ(コソボ) 空港着	21,22	休日(ミトロピツァ橋の上の民族和解コン サートへ)
11	荷物の整理、買い物	23,24	風邪で発熱のため欠勤
12	UNDP 担当スタッフ、KYN スタッフと活動に ついて打合せ	25,26	オフィスワーク、スタッフ会議出席
13	オフィスの設備配置(デスク、パソコン等)	28,29	休日
14-17	パソコンへデータ入力(各 NGO のデータ)	30	オフィスワーク
18	休日	7/1	UNDP 小型武器回収プロジェクト概要の翻訳 作業、UNDP 新任の KYN 担当者との会議
19	日本大使館プリスチナ事務所へ(在留届記入)	2	「Youth Congress 2003」の会議出席
20,21	オフィスワーク	3	人権ワークショップ(プリズレン)
22	人権ワークショップ参加(ジラン)	4	翻訳作業
23	オフィスワーク	5,6	休日(5日、マケドニアへ)
24,25	休日	7	UNHCR フィールドトリップ
26	インターン活動について改めて話し合い	8	オフィスワーク
27,28	オフィスワーク	9	UNDP 小型武器回収プロジェクトオー ブニングレセプション参加
29	ID カード発行手続き、ミトロピツァのコ ンサートの会議出席	10,11	オフィスワーク
30	ID カード受取り、「Youth Congress 2003」 会議出席	12,13	休日
31	人権ワークショップ参加(ペイヤ)	14-18	ファンドレイジング
6/1	休日	19,20	休日(ギリシャへ)
2	人権ワークショップのまとめ、「Youth Congress 2003」の会議出席	21,22	ファンドレイジング
3	ミトロピツァ人権ワークショップについて スタッフ会議出席	23	ロバート・パイパー氏とインターン活動 まとめの会議
4.5	オフィスワーク	24,25	ファンドレイジング
6	人権ワークショップ(ミトロピツァ)	26,27	休日
7.8	休日	28	オフィスワーク
9	オフィスワーク	29	UNHCR フィールドワーク
10	KYN オフィスが立ち退きを要請される	30	活動のまとめ(ファンドレイジング、 ファイリング等)
11-13	オフィスの賃貸問題についてスタッフ会議出席	31	コソボ・ボスニアボランティアチームと合流
14,15	休日(15日、国連日本人スタッフの方と乗馬)	8/1-4	人権ワークショップ参加(ベヤ人権センター)
		5	お別れパーティー
		6	プリスチナ空港へ

参加の経緯

文教大学に入学し、文教ボランティアズが街頭で活動している姿を見たり、活動している友人の話の聞いたり、または国際問題を勉強していくなかで、私自身も世界を身近に感じ、「困っている人を助けたい」との思いが段々と強くなるのを感じていた。

2003年春チャンスがあり、中村教授のバルカン視察旅行に同行させて頂き、コソボも3日間ではあったが、歴史的事件が起こった現場や UNDP の復興プロジェクトの様子などを視察して回った。

旅行から帰ってすぐに、中村教授からコソボでの UNDP インターンシップのお話があり、最初は不安な気持ちから迷いがあったが、必ずや自分が今目指している道へのステップとなるであろうと思い、参加を決意した。

活動内容

コソボ・ユース・ネットワーク (KYN) での活動

現在、コソボには約 100 団体の青年中心の NGO があり、それぞれは資金面や情報量、ネットワークといった面で規模も小さく非常に弱いので、UNDP のプロジェクトの一つとして今年の 2 月、3 名の現地スタッフが任命され、KYN は本格的に活動を開始した。KYN の役割は、各 NGO 間に情報を発信したり、コソボ内外の青年の活動団体とのネットワークを広げたりすることによって、将来コソボを担う青年の声を社会に浸透させることが主である。

私の活動は主に KYN のアシスタントであり、拠点は州都プリスチナであった。KYN 自体も 5、6 月はまだ準備段階にあり、約 100 団体の NGO の登録は終わっているものの、あまり活発な動きは無かった時期でもあった。私が実際にやらせてもらった仕事は、各 NGO のデータをパソコンへ入力したり、KYN の委員会会議に出席したり、KYN 主催の人権ワークショップの手伝いをしたり、というようなことであった。

7 月は資金不足に悩まされている KYN のファンドレイジングに挑戦。コソボ内から日本の NGO が撤退してしまったように、資金援助もなかなか得られずコソボ内の現地 NGO やその他の活動団体は資金不足に悩まされているのが現状である。突然、KYN のオフィスが立ち退きを勧告された事もあった。そこで私は日本の企業や財団、政府など資金援助をしてくれそうな団体の情報を集め、また外務省の草の根無償資金

援助に申請もした。

KYN で活動して気付いた事は、失業率が約 60%といわれている社会で、一日カフェで過ごす青年たちも多い一方で、コソボの未来のために NGO の活動などに積極的に参加する活発な青年たちも大勢いるという事実である。実際に悲惨な紛争を経験した彼らが、明るい未来を築こうとしている姿に、コソボの将来の希望が見えた気がした。

UNDP での活動

UNDP の小型武器回収プロジェクトの仕事にも挑戦させてもらった。このプロジェクトも開始時期が7月末からということで、準備段階の仕事ではあったが国連の仕事に直接携われ、苦労の様子を見ることができ、大変貴重な体験であった。一つ目は、日本の雑誌に載せるためのプロジェクト概要の翻訳だった。翻訳作業は初めてで、比較的長い文章を英語から日本語へ訳す作業は大変困難であり、長い時間をかけてじっくり取り組んだ。

二つ目に、7月初旬にこのプロジェクトのオープニングレセプションがあり、準備やレセプションでのプログラムの配布などにも参加させてもらった。

私たちが滞在している間もコソボでは、小規模な爆破事件や民族間の対立に因る事件が発生している。そのような不安定な治安の中で、どのようにしたら各家庭が保有している武器を、不安を感じている市民から回収できるのかが大変難しいところだと、武器回収プロジェクト担当のスタッフが言われた。一つのプロジェクトを施行するには、大きな危険の起こる可能性が伴うことを学んだ。

UNHCR のフィールドトリップ

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の日本人スタッフの上野さんにアレンジして頂き、UNHCR のフィールドトリップに参加した。オブリッジという州都プリスチナから車で 20 分くらいのところに位置するセルビア人も比較的多く住む町に IDP（Internally Displaced People）のシェルターがあり、そこを視察する UNHCR 現地スタッフのケリーさんに同行した。

主に活動の中心が州都プリスチナで、比較的都会的なところで生活していた私にとって、ここを訪れたことで何かはっとさせられる思いがした。そこには約 60 世帯のマイノリティーの家族がプレハブの連なる敷地内で生活していた。水道は外に 3 箇所位しかなく、この人数にはとても足りないように思えた。聞くところによると、そこはコソボのなかでも最も衛生状態の良くないシェルターであるようだ。写真を求めて私達の周りに集まって来る子供達の笑顔はやはり無邪気かわいらしかったが、一方では事務所の中でスタッフに、いつ家に戻れるのかといった不満をぶつける大人たちの姿もあった。

紛争終結から 4 年経った今でも、こうして元の家に戻れず日々不満や不安を抱いて生活している人々がいることに気付かされた。

反省と感想

今回の 3 カ月間のインターンシップでは反省点と、そこから学ぶ事が多かった。私は出発前、国連機関の仕事を実際に見られる、自分も参加して肌で感じる事が出来ると期待して日本を離れた。しかし、現地で待ち受けていたのはそういう私では無く、この地域のために自らが何かを考え出し、進んで行動出来る人間だった。語学面だけをとっても意思疎通を図るのがやっとなであり、生活に慣れるにも時間がかかった。そこで感じた事は、やはり専門性を身に付けることの必要性。国際協力は現地に赴き、助けを必要とする人々のために何かをするということが本来の目的であり、それには当然「問題点を見つけて自発的に動ける人材」が必要である。当然のことではあるが、複数で行うボランティア活動等に参加する際、忘れがちになる自発的に何かを生み出すことのできる力は、参加する個人個人にとって非常に大切なものであると、改めて気付かされた。

3 カ月間、紛争終結から 4 年後の復興段階にあるコソボで暮らし、様々な人に出会い、様々な生活や文化を見た。そして、様々な経験もした。私の目には日常の一つ一つの小さな出来事も全て新鮮に映った。自分が何かをコソボに与える事が出来たかは定かではないが、たくさん大切な事をコソボから学んだ。それは、人が生きる上で大切な事と援助を行う一人の人間としてのあり方のようなものである。お世話になった人々の温かさ、国連で働くスタッフの方々の苦勞や葛藤のお話、そして懸命に働いておられる姿には感動や驚きを感じ、良い刺激を受けた。現地に暮らして、現地に住む人々に接し、彼らの心の中を覗いてみる。国際協力でとても大切なことだと思った。

ちょうど 3 カ月目で、生活や仕事にも慣れ、もう少し残っていたいという後ろ髪を引かれる思いで日本に戻って来たが、決してコソボでの感動や経験、お世話になった人々のことを忘れることなく、精進していきたいと思う。コソボの明るい未来を願いつつ・・・。

最後に、受け入れて下さった UNDP コソボのロバート・バイパー常駐代表を始め、生活全般で非常にお世話になったゼチャ・アデミ氏、UNDP 及びその他の国連機関のスタッフ。特に日本人職員の皆様、このような貴重な機会を与えて下さった中村先生、本当にありがとうございました。また特別なケースとして遠隔ゼミの指導を快く了解して下さったゼミ担当杉山富士雄先生並びに、温かい理解と計らいでこの機会を可能にしてくださった国際学部教授会の先生方にも心からお礼を申し上げます。

アノ思キ定不ウ爾不ヤ日セハ銀コ家の元了しきこ、まア今式ニ録キトル他録録作録
。スバチヤ付反コトコるハセヤ入るハアノ事ト

感謝と奮闘

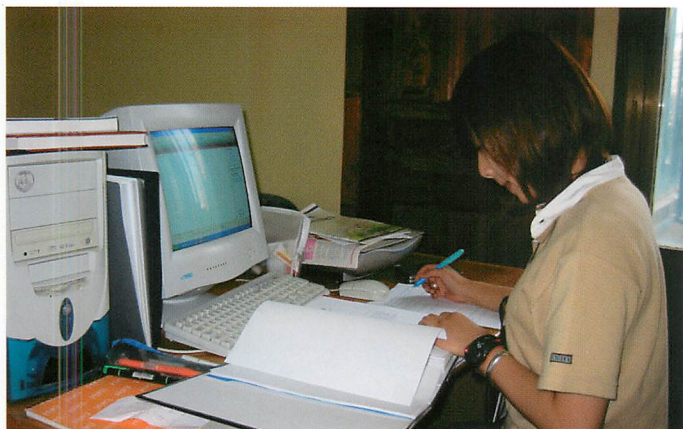
お話。スバチヤを以て申さるハコト、コノ点言及ハ付テマシク、コノ間日ハ8ノ回ハ
願ヒトモ未出候事ニシテ、コノ間日ハ8ノ回ハ、コノ間日ハ8ノ回ハ、コノ間日ハ8ノ回ハ、



コノ思キ定不ウ爾不ヤ日セハ銀コ家の元了しきこ、まア今式ニ録キトル他録録作録
。スバチヤ付反コトコるハセヤ入るハアノ事ト

コノ思キ定不ウ爾不ヤ日セハ銀コ家の元了しきこ、まア今式ニ録キトル他録録作録
。スバチヤ付反コトコるハセヤ入るハアノ事ト

コソボ・インターンシップ



コソボ・ユースネットワーク (KYN) オフィスにて、パソコンデータ入力。



通勤中に停電!信号機も機能せず、車はパニック。



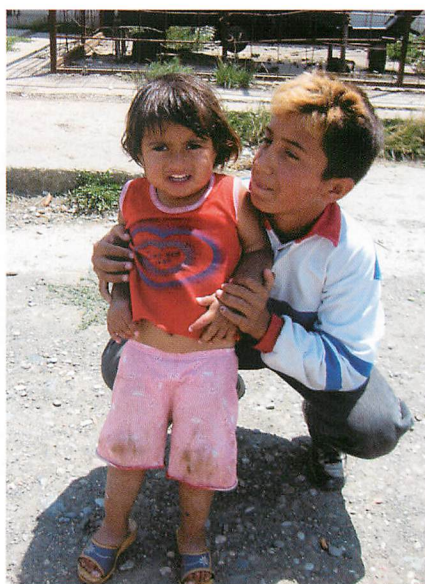
KYN主催の人権ワークショップ。各現地NGO代表者が参加。



民家の建築作業の様子。



10月に行われるYouth Congress 2003について、委員会のミーティングに参加。



帰還難民は、家がなくなり一時シェルターで暮らす。

ルワンダ



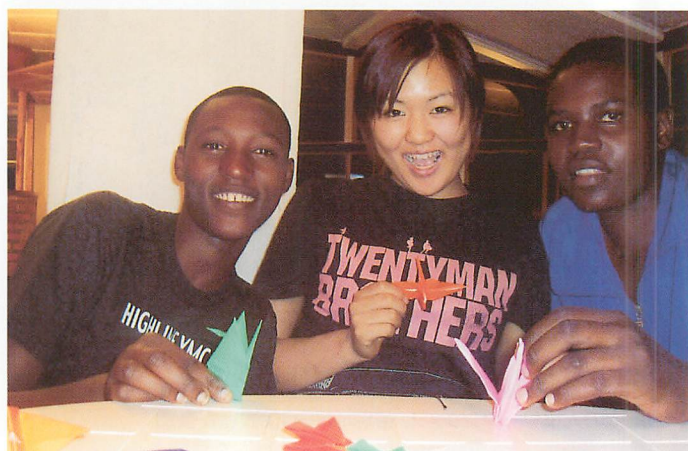
ルワンダ・ワンラブ事務所に届いた日本からの支援物資。



プロジェクトの義足製作所。彼も義足を装着している。



孤児院の病気の子供たち。



パラリンピックを目指す片腕のない少女たち。私も片腕で鶴を折る。



ジェノサイドミュージアムと化した学校の校舎。
収容した遺体が当時のまま残してある。



丘から見るルワンダの風景。

ルワンダ活動報告

2003年8月21日～9月19日

参加者

文教大学国際学部国際関係学科 4年 中島里紗

アドバイザー 文教大学国際学部教授 中村恭一

活動スケジュール

- 8月21日 成田出発 インド、ムンバイ到着
22日 インド、ムンバイ出発 ケニア、ナイロビ到着
23日 ケニア、ナイロビ出発 ルワンダ、キガリ到着
24日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
25日 同上/ルワンダ大統領選挙で当選したポール・カガメ大統領のスピーチを聞き
にスタジアムへ
26日 孤児院視察
27日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
28日 同上
29日 NGO アフリカ平和再建委員会（ARC）の事務所訪問、（ARC）の支援す
るバナナリーフカードの新デザイン選出のミーティングに参加
30日 虐殺現場、ニヤマタ教会視察
31日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い、
ワンラブで合宿中の障害者スポーツ選手のトレーニング参加
- 9月 1日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトの義足製作のアトリエ視察
2日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
3日 同上
4日 同上
5日 同上/在庫整理
6日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い/
ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのオフィスにて事務作業手伝
7日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
8日 同上/ ARC の支援する女性の自立のための洋裁訓練所、バナナリーフカー
ド製作訓練所、現地 NGO の ARTCF 事務所訪問
9日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
10日 同上
11日 同上/在庫整理
12日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
13日 同上
14日 同上
15日 同上/在庫整理
16日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
17日 ギコンゴロ、虐殺ミュージアム視察
18日 ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのレストラン業務手伝い
19日 ルワンダ、キガリ出発

ルワンダについて

アフリカの東部に位置し、千の丘の国とも呼ばれるルワンダはドイツ、ベルギーによる植民地支配以前、人口の85%を占める農耕民族のフツ族、14%の牧畜民族のツチ族と1%のトゥワ族が同じ言語を話し、同じ地域に入り混じって生活していた。しかし、1899年ドイツにより植民地化され、その後第一次世界大戦でドイツが敗退したため、1919年にベルギーの委任統治領となった。

ベルギーはルワンダを支配するためにツチ族とフツ族を完全に区別できる政策をとり、少数派であるツチ族を優遇、ツチ族にのみよい教育や仕事を与えるなどした。その結果、ツチ族とフツ族の関係は悪化し、1959年ついにフツ族の不満が爆発、フツ族がツチ族を襲撃するなどの暴動が起こり、多くのツチ族が国外へ脱出した。1962年の独立後もさらにフツ族の大統領が誕生するなどして、ルワンダのツチ族に対して襲撃や虐殺、日常的な弾圧が繰り返された。そんな状況の中、国外に逃れたルワンダ難民のツチ族が穏健派のフツ族も含めて1988年、RPF（ルワンダ愛国戦線）を結成、祖国のルワンダに帰ることを試み、1990年RPFはルワンダへ侵攻した。政府とRPFによる内戦状態へ突入したのである。

内戦が続く1994年4月、政府軍やフツ族強硬派民兵組織インテラハムウエなどにより、ツチ族に対する虐殺が発生。虐殺はラジオなどのメディアを使い促され（ツチ族を殺せというメッセージや歌が頻繁に流された）、ルワンダ各地で女性や子供も含んだ約100万人の人々が約3か月間の間に虐殺された。

活動の経緯と目的

私がルワンダに直接行ってボランティア活動を行うことを決めたきっかけは、私のゼミの研究テーマがルワンダ紛争であったことが大きな理由だった。しかしそれだけでなく、昨年コソボや東ティモールでのボランティア活動を通して、テレビのニュースや本の中でしか知らなかった紛争が現地に行ったからこそよく理解できたこと、現地の人々との交流を通してその国の現状、そして紛争を体験した人々の考えていることに対する理解が深まったことを実感すると共に、自分自身も多くの面で成長したと感じたことから、今回も日本では決して知ることのできないルワンダを知りたいと思ったのだった。

また今までの経験で、思い切って現地に飛び込むことで大学生である私個人にもできることを見つけることができると感じ、今回も少しでもルワンダの人々の役に立てたらと思

い、アフリカの地へ足を踏み入れることにした。

今年春から時々、ルワンダで主に義肢装具の製作と提供などの活動しているNGOムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト（以下ワンラブ）の日本事務所でお手伝いさせていただいており、日本での仕事のためにルワンダから一時帰国していた代表の吉田真美さんに、夏休みにルワンダでワンラブの活動をボランティアとしてお手伝いしたいとお願いすると快く受け入れてくれた。そして8月23日から9月19日の約1カ月間、ルワンダの首都キガリにあるムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトのルワンダ事務所でお世話になることになった。

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクトでの活動

ルワンダのムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト（ワンラブ）では主にルワンダの障害者のために義肢装具製作を行っている。（ルワンダでは94年の大虐殺の武器としておのが使用された結果、腕や足を失くした人も少なくない。）その義肢装具製作のアトリエのほかにも義肢装具の費用の自立を促すために営業しているレストランやゲストハウスがワンラブの敷地内で営業している。

そこでは多くのルワンダ人スタッフが働いていた。日本人のスタッフは代表の吉田さんだけでなく、約1年間の予定でボランティアとして働いている前田さんという日本人女性もいた。私がワンラブに着いた日も、もちろんスタッフはいつも通りに仕事をこなしていた。

私のルワンダでのボランティア活動は皆がいつもと変わらず仕事をしている中で、自分にできることを探すことから始めなければならなかった。しばらくして私はレストランの主な仕事をこなす前田さんの手伝いをするのが自分にもそして受け入れてくれたワンラブにもベストだと思い、毎日前田さんが行っていた次のような仕事を手伝った。

まず、朝レストランの掃除やゲストハウス（レストラン同様、資金の自立を促すため経営されている）の掃除に来たルワンダ人スタッフに部屋の鍵やその日に必要な洗剤などを渡す。そのあとレストランに行き、前日売り上げたジュースやビールの数が記録とあっているかピンを数えて確認し、足りないものを補充する。その後、午前の大きな仕事その日の食材を街へ買出しに行ったり、現地のスタッフの給料やレストランのお金の両替、保険や電話料金の支払などのため銀行に行くことである。

買出しといっても日本のようにスムーズにはいかない。人口密度の高い市場では私達は野菜などとても多くのものを購入しなくてはならないのに加え、重くなってしまう荷物や値段交渉をはじめ、ルワンダでは珍しい日本人に寄って来る人や荷物を持ってお金をもらおうとするたくさんの子供たちに常に取り囲まれ、動くのにさえ一苦勞。そして私が抱えていたニボシの袋の小さな穴から、気がつく子供がニボシをつまみ食いしていたことも

あたりと、市場は決して気を抜けない場所であり、市場に行く前はいつも「今日も負けない！！」と自然に気合が入っていた。

また市場の店にも常に同じものが置いてあるとも限らず、街中の店を探しまわったりすることも珍しくない。銀行の窓口が長蛇の列のときもあり、時間がもったいないので私が銀行に並び、その間に前田さんが買い物を済ますこともあった。

レストランの営業中も食材の管理など（洗剤などと同様にその日に使う分のみの食材を使う直前に倉庫から出し、現地のルワンダ人スタッフに渡す）も行う。

時々、レストランのお皿の数や調理器具、テーブルの数などを数えて前と変わらないかどうかの確認を行ったりもした。そしてレストランが閉まる時間（大体は23時頃）までレストランの様子を見て、最後に店を閉めるまで立ち会う。その後、私はその日の会計報告をつけている前田さんの隣でその日の売り上げを数えたり、翌日のつり銭の用意をした。

なぜ、手間ひまをかけてまで使う洗剤や食材をルワンダ人スタッフに直接渡さず管理しなくてはならないのか？やはりルワンダの人は私達日本人と環境も違うし、感覚も違う。吉田さんの話によると、ルワンダの人はもしそのような管理がきちんとされず、監視の目がなかったら罪の意識なく自分の家にレストランの物を持って帰ってしまうことも珍しくないからだ。

私も1カ月間これらのお手伝いをしている中で、給料をもらおうと突然次の日に仕事を休んだり、仕事にも関わらずうつぶせになり居眠りをしたり、営業中に自分のポジションを空けたまま勝手に昼食へ出かけてしまったというルワンダ人スタッフのもたらすいくつかのトラブルを目の当たりにした。そのような問題はすぐにきちんと対処しないとさらに事態は悪化するので、吉田さんや前田さんは常に真剣に対処していた。いつもはとても親切な現地スタッフだが、日本の常識では考えられないような彼らの仕事に対する態度を見たとき、正直私は裏切られたような気持ちになりショックだった。

レストランの仕事の空いた時間に日本から送られてきたたくさんの物資の仕分け、整理、数の確認を行う。在庫整理や義肢装具製作所の視察も行った。ワンラブの義肢製作所ではひとつひとつサイズの違う義足が丁寧に作られていた。そしてそこで働く技術者たちは自身も足を無くしている人がほとんどで、義足を装着している。今まで足がない＝障害者＝かわいそうというイメージを持っていた私だが、笑顔で自分の義足を装着した足を見せてくれたり、義足の足で跳んだり走ったりして義足のすばらしさを私に伝えてくれた彼らを見て、自然にこれまでの誤解は消えていた。そして義足は自由に歩くことを可能にしてくれるだけでなく、その人の未来や可能性を大きく開き、将来の目標をたてることもできるようにしてくれる。そのことが何よりも障害者の人々の心に光を与えてくれるのだとワンラブで義足を手にした人々と接して感じた。

私はこのワンラブでの活動を通して人を信頼することや現地で私達日本人とは環境や感覚の違う現地の人と一緒に仕事をしていくことの難しさ、そしてNGOを運営していくうえであまり表には見えないが大切な作業がたくさんあることなどを学ぶことができた。

孤児院、バナナリーフカードのアトリエ

8月26日、キガリ市内にある孤児院を訪問した。この孤児院は日本のNGOアフリカ平和再建委員会（ARC）が支援している。孤児院では紛争やエイズによって親を亡くした子供約100人をマリアンさんという女性がほとんど一人で面倒見ている。病気の孤児の部屋に入ると、ひとつのベッドに5～6人のやせ細った孤児がハエにたかられながらうつろな目をして横たわっていたり、エイズで成長が止まってしまった孤児もいた。この孤児たちは、私が笑いかけたり話しかけても応えてくれる力はなかった。この孤児院では毎月数人の孤児が亡くなるという。その孤児たちとは対照的に元気な孤児たちは近寄ってきても私達の手を離さなかったのが印象的だった。この孤児院に調布第五中学校の2年生が作成してくれたルワンダの子供たちへのメッセージとコワダスポーツから寄付していただいたボールを贈呈した。

9月9日、バナナリーフカードのアトリエへ。ここもARCが支援している施設で、バナナアートの芸術家のポシェット氏が約15人の生徒にバナナリーフカード（バナナの葉を切って貼り付けてルワンダの風景などが表現してあるカード）の製作の方法を教えていた。他にもたくさんの生徒が学びに来るようだ。ほとんどの生徒が未成年で、中にはまだ14歳の子もいた。「このような未成年が学校に行かずにバナナリーフカードの製作を学んでいることは時々批判されるが、ここにいる子供たちは学校に行くことができないので結局は自分でお金を稼がなくてはならない。そのためにここで技術を身につけることは間違っていない」とポシェット氏は言った。生きていくためにその方法を自分で見つけなくてはならないルワンダの子供がたくさんいることがわかった。

虐殺現場となった学校へ

9月17日首都キガリからオカピカというバスのような車とタクシーを利用して約2時間半かけてギコンゴロという地域にある虐殺ミュージアムへ向かった。着いてみるとミュージアムという言葉からはほど遠い、中が何も無い学校だった。出てきた女性にさらに敷地の奥へと案内されると、周りに丘がひろがる静かで美しい土地に校舎が並んでいた。これらの建物は中学校と小学校だったと現地の人が説明して、ひとつの校舎の部屋の鍵を開けてくれた。私は教会と同じく虐殺の犠牲者の人々の骨が置いてあることを想像していたが、その部屋には亡くなった人々が殺された当時のそのままの姿で、ミイラのような状態で並んでいた。私はそれを見たとき思わず声を上げてしまった。中に入ってみるとなんとと言

えないにおいもした。はじめは 1 分も部屋の中に入ることができなかった。他の部屋も見
てみると犠牲となった子供や赤ちゃんの遺体も少なくなかった。中には足がない人、頭が
割れている人、とても苦しそうな顔をしている人もいた。骨と皮だけになってしまった犠
牲者たちはとても小さく見えた。私は帰ってからもしばらくこの光景が頭から離れなかつ
た。これらの場所に実際に立ってみて、ルワンダで起こった虐殺は間違いなく実際にあつ
たことだと改めて思い知らされた。

東ティモール・コソボ・ボスニア会計報告

2003年度・夏 募金活動結果

場所	金額(円)
湘南校舎(在学生・学校職員・OB)	70,544
茅ヶ崎駅前募金活動(6/5・6 7/12・13)	139,904
春期活動繰越費	5,000
合計	215,448

(振り分け)

・東ティモール	65,000円
・コソボ/ボスニア	150,000円

今回の寄付金については事前の学内活動、大学教職員・OBの援助、そして駅前での募金活動によって得たものである。

学内活動では、コソボ・東ティモール活動参加者と今回は参加しなかった他の中村ゼミ生とが協力して、昼休み、構内聳塔前にて募金箱と垂れ幕を手に募金活動を行った。募金活動と同時に支援物資の収集も行った。

次に、大学教職員・OBからの援助である。大学内では先生方だけではなく、事務課の方々からの援助もあった。特に入試課では職員有志で課内の募金活動により、大きな支援をいただいた。文房具や衣類などの物資を寄付して下さった先生もおられた。学内活動と学校職員・OBからの援助を合わせて、合計70,544円にもなった。

駅前での募金活動は、7月の第1、2の土日に茅ヶ崎駅前で行われた。学内活動と同様、募金箱と垂れ幕を手に、そしてピラを配りながら活動をした。多くの方に募金していただき、合計139,904円。大学内外の活動総額は215,448円となった。これを東ティモールに65,000円、コソボに150,000円として分け合うことになった。

① 東ティモール募金用途報告

国内支出項目	金額(円)
文教大学湘南校舎から成田空港までの物資輸送費(ダンボール5個分)	9,090
国内での物資調達(お土産)	7,350
バギア村への物資輸送のためのレンタカー代	46,560
合計	65,000
残金	0

この資金の用途は、出発前の国内での物資調達に、7,350円、学内外の多くの皆様方からご協力いただいた文房具や衣類を成田空港まで輸送するための配送代に9,090円。また現地では、バギア村への物資輸送のためのレンタカー代の一部として残りの46,560円が充てられた。

今回の活動で行った、かまど用ブロック代は参加者が負担した。また航空運賃や国内及

び経由地での交通費、ホテル代、生活費などの一切（平均で約 20 万円）はすべて、これまでどおり参加者個人が負担した。

ご協力いただいた文教大学の学友、教職員、学外から支援していただいた皆様に心から感謝を申し上げます。皆様からいただいた文房具、衣類などは写真にもある通り、現地の子どもたちに渡し、これ以上ない笑顔と歌でお礼をいただきました。

② コソボ・ボスニア募金用途報告

国内支出項目	金額(円)
文教大学から成田空港までの物資輸送費(ダンボール箱7つ分)	13,930
墨汁 2本	210
筆 4本	420
習字用紙 2袋	525
空気入れ ひとつ	2,772
合計	17,857
残金	132,143

外貨換金 7月24日 100,000円 → 695ユーロ (1ユーロ=143.91円)
 7月29日 32,143円 → 220ユーロ (1ユーロ=144.26円)

計 915ユーロ 406円

日付	現地支出項目	金額(ユーロ)
7月29日	成田空港～ベオグラード 物資輸送費	176
8月3日	NGOへの協力金	500
8月7日	ペヤ～ドブロブニク バスによる物資輸送費	11
8月8日	ドブロブニク(国境)～宿舎 タクシーによる物資輸送費	80
8月9日	ドブロブニク内 タクシーによる物資輸送費	24
8月9日	ドブロブニク～サラエボ バスによる物資輸送費	15
8月9日	サラエボ内 タクシーによる物資輸送費	20
合計		826
残金		89

コソボ活動では NGO 団体への協力金 1,000 ユーロ（日本円で約 10 万円）を必要としたのだが、私達にはとうてい賄いきれない金額であったため、そのうちの半分 500 ユーロ（約 5 万円）を募金から拠出し、最終的にはコソボに割り振られた募金残高 89 ユーロを残りの協力金 500 ユーロの一部として充てることになった。

今回の活動は長距離移動が多く、ダンボール箱 7 つ分の物資を運ぶ為に私達はとりわけ資金問題に頭を悩ませていた。上の表からもわかるように、募金のそのほとんどは物資を現地まで輸送するための費用として使わせて頂くことになり、空港からの手荷物超過料金は当初 125,000 円にも上ると言われたが、中村教授の熱心な交渉の末 25,000 円にまで抑えることができた。また、できる限り負担を軽くしようとする都度強気の交渉をする先生方の姿は、私達にとって大変心強いものであった。

その他にも私事ではあるが宿泊代や食事代、レンタカー代など私達自身の出費も決して安いものではなく、また幾ばくかのサポートをして下さった中村先生、生田先生、そしてNGOの方々には本当に頭の下がる思いで一杯だった。

こうした活動は募金協力の上に成り立っており、募金活動を通して多くの方々からのご理解とご協力を頂いたことは活動関係者共々心から感謝の念で一杯である。

以上 報告を終わる。

お世話になった方々

—東ティモール・コソボ・ボスニア・ルワンダ・日本での協力者—

(順不同・敬称略・すべてお世話になった時点での肩書き)

東ティモール (春・夏)

長谷川祐弘	国連東ティモール支援ミッション事務総長副特別代表
旭英昭	在東ティモール大使館公使
新屋敷道保	オイスカ・インターナショナル東チモール駐在代表
佐藤俊三	同 東ティモール研修センター主任指導員
入船由加里	同 通訳兼事務スタッフ
Lito	オイスカ東ティモール支部代表
秋山真	オイスカ・インターン生 (埼玉大学大学院)
松枝研介	同上 (立命館大学大学院)
Toshihiro Nakamura	UNDP Programme Officer
田中俊昭	国際協力事業団 (JICA) 東ティモール駐在員事務所所長
竹原成悦	同 東ティモール事務所駐在員
山田大	同上
和田等	音楽普及活動家
山中努	AFMET (東ティモール医療友の会) 現地コーディネーター
松田ルミカ	同上
成田清恵	同上
シスター・ゴレッティ	シスター

コソボ・ボスニア (春・夏) ・ UNDP コソボインターン

ベオグラード・コソボ

辰巳 知行	ベオグラード大学講師
岡部 聡之	同大学留学生
Robert Piper	UNDP Resident Representative
Sofia Carrondo	UNDP Deputy Resident Representative
Alex Viver	UNDP Chief Technical Advisor-Housing Component
Takakazu Ito	UNDP Programme Analyst
Yukari Ota	UNDP Civil Society Coordination Officer/Licit Small Arms Control Project

Visare Gashi	UNDP National Programme Analyst -Employment & Community Outreach Team
Sawako Inae	UNDP Junior Professional Officer -Employment & Community Outreach Team
Anton Selitaj	
UNDP Programme Assistant	-Employment & Community Outreach Team
Pierre Weber	UNDP Programme Officer- Youth
Conor Lyons	UNV Programme Officer
Shpend Spahiu	UNDP Administrative Clerk
Zeqir Ademi	UNDP Driver
Visar Krusha	KYN Programme Coordinator
Shadija Ahmetaj	KYN Manager
Violeta Djokic	KYN Field Officer
Labinot Salihu	Pristina Youth Center
Takayuki Ueno	UNHCR Protection Officer
Sophie Bondesson	UNHCR Protection Officer
Shkelqim Shehu	UNHCR Field Clerk F.O.
Fumiko Hakoyama	UNICEF
Dr. Neshad R. Asllani	コソボ人権センター所長
Dipl. Ing. Ali R. Asllani	同 人権教育コーディネーター
Dipl. Ing. Xhevat B. Ahmetaj	同 同活動コーディネーター
Dr. Hivzi Muharremi	プリスティナ大学教授（民族問題）
Fehmi Mujota	Creator President
Ragip Rusta	文教大生ホームステイ・ホスト
ボスニア	
Judith Selman	国連開発計画（UNDP）ボスニア上級顧問
Moises Venancio	UNDP Deputy Resident Representative
Akemi Tanimoto	JEN Financial Officer/Liaison Officer
Yoshihide Nakai	First Secretary , Embassy of Japan in the Federal Republic of Yugoslavia
Petar Spremo	OSCE Education Officer
Aleksandra Stiklica	UNDP Deputy Programme Manager SRRP
Yves Van Frausum	UNDP Programme Manager SRRP

Alexandre Priet	国連開発計画（UNDP）スレブレニツツァ復興計画代表
Alexandra Stiklica	同 スレブレニツツァ復興計画副代表
Mijuk Svetlan	同 スレブレニツツァ上級プログラム・マネジャー
Chiarenza Barbara	同 スレブレニツツァ・ジェンダー問題専門家
Music Abdulah	同 スレブレニツツァ運転手

ルワンダ

吉田真美	ムンディ・ジャパン・ワンラブプロジェクト代表
Gatera Emmanuel Rudasingwa	ムリンディ・ジャパン・ワンラブプロジェクトルワンダ代表
前田理恵子	ムリンディ・ジャパン・ワンラブプロジェクト・ボランティアスタッフ
小峰茂	アフリカ平和再建委員会事務局長
高 美穂	アフリカ平和再建委員会ルワンダ事務所代表
Esperence Kayirebe	ARTCF スタッフ

日本での協力者

募金・物資支援をしてくださった茅ヶ崎市民の方々
 茅ヶ崎サポートセンター
 磯村柴郎／コワダスポーツ店店長
 新潟県荒川町立荒川中学校・保内小学校・金屋小学校
 調布第五中学校
 創価大学東南アジア研究会

「国際ボランティア活動に関する調査」・集計と要約

山田修嗣¹・鹿谷耕平²・一丸静香³

1. 調査の主旨と調査プロセス

本調査の表紙（依頼文）にも記載されているように、現在、「国際協力」への関心はまさに地球規模で広がっている。文教大学でも、国際ボランティア活動に関心を寄せる学生が増え続けていることを、中村恭一教授の「国際協力論」、「ボランティア論」の授業風景からもうかがうことができる。また、私達「文教ボランティアズ」も今年で結成3年目をむかえ、活動参加者も総勢39人を数えるに至り、これまでの活動を参加者の視点から評価するにふさわしい時期となった。

そこで今回、国際ボランティアに参加した学生を対象にアンケート調査を実施した。この調査は、文教ボランティアズがこれまで活動してきた実績をもとに、学生が国際協力を行う際の問題点、改善点そして、活動参加後の意識変化を中心に把握しようとしたものである。さらにこの結果から、今後の文教ボランティアズの活動をますます活性化するための有益な示唆を導出するのが目的である⁴。

調査票の作成にあたり、まず、アンケート調査作業部会が組織された。ボランティア委員会から中村・生田両先生がスーパーバイザーとなり、作業部会の責任者に山田が、学生代表の取りまとめ役として鹿谷・一丸が選出された。はじめに調査項目のリストアップを行い、それを作業部会で検討して原案を作り、再度校正・確認した後に印刷・発送・回収・集計という手順をとった。これら一連の作業のほぼすべては、山田の指示のもと、鹿谷・一丸が担当している。

以下、順に紹介するのは、その回答をデータ化したものである。まず、次節では回答者の基本属性（性別、大学入学年度、参加した活動）を要約し（鹿谷・一丸）、つづく3節では回答の単純集計結果を示した（山田）。最後に4節で、これら調査結果が示すいくつかの論点を簡単に指摘し（山田）、まとめとした。

1 文教大学国際学部

2 文教大学国際学部4年・中村ゼミ所属

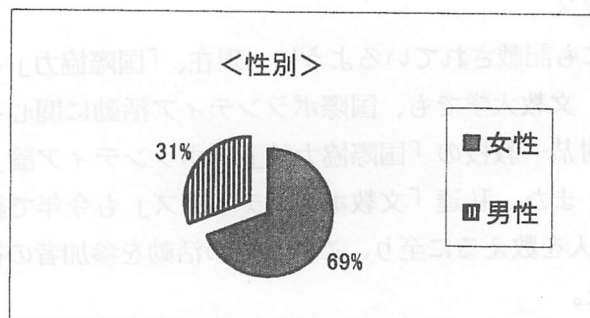
3 文教大学国際学部4年・中村ゼミ所属

4 本報告は、活動を改善するための指摘ができるまで踏み込んだ検討はしていない。むしろ、回答者にたいしての調査速報というスタイルをとっている。その理由に、調査票回収から報告書作成までの期間が短かったこと、回収サンプル数が少なく数的処理が十分になじまないこと、よって回収票をもとに回答者へのヒアリングを行うなどの質的な方法を採用すべきではないかとの判断がなされたことがある。これら問題をクリアーし、本格的な検討は、別稿で行うこととしたい。

2. 回答者の属性

本調査における回収票は 32 票であった。39 人を対象とした配布のため、回収率は 82% である。はじめにその男女比をみると、女性が 69%、男性が 31% と女性の回答者が多かった (図 1)。

図 1



次に、回答者の大学入学年度を見てみると、2000 年度入学の学生がもっとも多かった (図 2)。中村恭一ゼミに現在在籍する学生数 (現 4 年生) が多いためでもあるが、ゼミを中心とするボランティア活動が活発になってきた年代とも考えられるだろう。

図 2

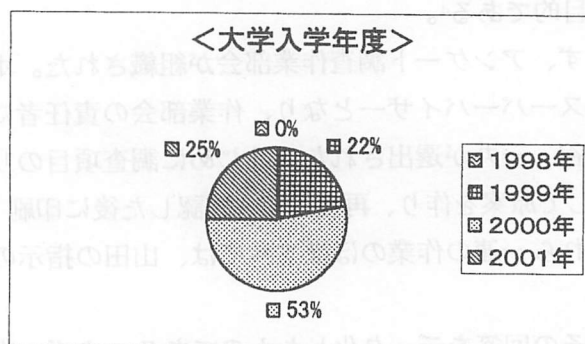


図 3

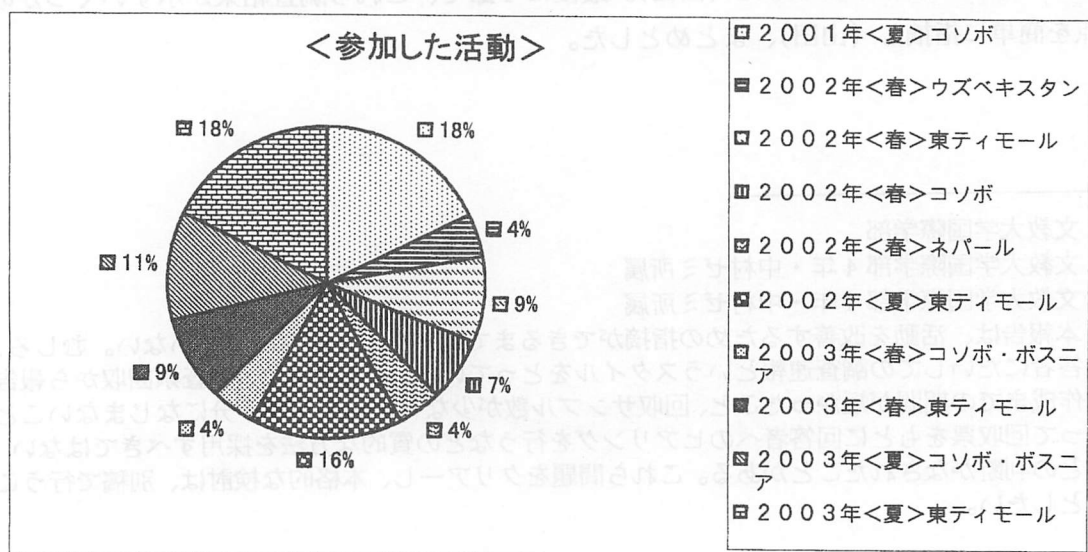


図3は、参加した時期と活動地域を示したものである。文教ボランティアズの活動は、コソボでの支援活動（2001年夏）に始まり、現在ではコソボ、東ティモールの2つの地域で継続的な活動が行われている。

なお、東ティモールでは、学生によるプロジェクトが立ち上がっている。独立後間もない東ティモールのニーズをキャッチしつつ、どういった協力が望ましいか、学生にどのような対応ができるかを模索・検討する場となっている。文教ボランティアズが成長している証左といえるだろう。

3. 調査結果の概要

以下、アンケート原票の記述をもとに、単純集計結果を示す。なお、自由記入欄については、回答に含まれるキーワードをひろい、それをカウントして回答者数（32）で割るといった方法をとった。したがって、複数回答の設問も含め、割合の合計が100%をこえるものがある。

1. 参加動機と周囲の反応について

問1. 大学での活動に参加する前に、ボランティア経験はありましたか。

⇒ [Yes : 15 (46.9%) / No : 17 (53.1%)]

【<Yes>と答えた方】 活動回数：国内＝〔平均1.14〕回、海外＝〔平均0.06〕回

問2. 何をきっかけにボランティアに興味を持つようになりましたか。自由にお書きください。

〔 中村先生＝12 (37.5%) 日常の関心＝12 (37.5%) 先輩・友人＝11 (34.4%)
その他＝4 (12.5%) なし＝2 (6.3%) 〕

問3. どのようにしてこの活動を知りましたか。（複数回答可）

1 : 授業＝15 (46.9%) 2 : ゼミ＝16 (50%) 3 : チラシ／ピラ＝5 (15.6%)
4 : 知人＝8 (25%) 5 : 先輩＝1 (3.1%) 6 : その他＝1 (3.1%)

問4. なぜ活動に参加しようと思いましたか。（複数回答可）

1 : その地域に興味があったから＝16 (50%)
2 : 活動内容に興味があったから＝16 (50%)
3 : 何かやりたかったから＝13 (40.6%) 4 : 友達が参加したから＝0 (0%)
5 : なんとなく＝0 (0%) 6 : その他＝2 (6.3%)

問5. 活動をすることを知った家族の反応はどのようなものでしたか。

- 1 : かなり反対した=3 (9.4%) 2 : 反対した=4 (12.5%)
3 : しつしつ賛成してくれた=16 (50%) 4 : 快く賛成してくれた=8 (25%)
5 : 反応なし=1 (3.1%)

問6. 活動をすることを知った親しい友人の反応はどのようなものでしたか。

- 1 : かなり心配した=3 (9.4%) 2 : 心配した=8 (25%)
3 : しつしつ応援してくれた=3 (9.4%) 4 : 快く応援してくれた=19 (59.4%)
5 : 反応なし=0 (0%)

II. 計画・資金調達プロセスについて

問7. 出発前に不安に感じていたことは何ですか。自由にお書きください。

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 金銭面=8 (25.0%) | コミュニケーション能力=58 (181.3%) |
| ボランティアについての理解=13 (40.6%) | 現地の状況=20 (62.5%) |
| その他=1 (3.1%) | 特になし=2 (6.3%) |

問8. 事前勉強は十分しましたか。

- 1 : 十分した=7 (21.9%) 2 : まあまあした=21 (65.6%)
3 : あまりしなかった=4 (12.5%) 4 : まったくしなかった=0 (0%)

問9. 『資金調達』についてお答えください (問9~12に共通)。

活動に参加するための費用はいくらでしたか ⇒ 約〔平均 259,166.7〕万円 (1回あたり)

問10. その費用のうち、家族の援助はどのくらいでしたか。

- 1 : 100%=2 (6.3%) 2 : 75%程度=4 (12.5%) 3 : 50%程度=8 (25%)
4 : 25%程度=9 (28.1%) 5 : 0%=7 (21.9%)

問11. その費用のうち、自己調達はどのくらいですか。

- 1 : 100%=7 (21.9%) 2 : 75%程度=9 (28.1%) 3 : 50%程度=9 (28.1%)
4 : 25%程度=5 (15.6%) 5 : 0%=1 (3.1%)

問12. 自己調達方法は何でしたか。(複数解答可)

- 1 : アルバイト=25 (78.1%) 2 : 貯金を崩した=12 (37.5%)
3 : 借金をした=6 (18.8%) 4 : その他=5 (15.6%)

【問12で「1：アルバイト」と答えた方】

付問1. 資金調達のために、何かアルバイトの変更をしましたか。(複数回答可)

- 1：出勤時間を増やした=19 (59.4%) 2：割のいいアルバイトに変えた=4 (12.5%)
3：アルバイトの種類を増やした=6 (18.8%) 4：特に変化なし=7 (21.9%)
5：その他=0 (0%)

付問2. アルバイトと学校(勉強)との両立はできましたか。

- 1：できた=9 (28.1%) 2：まあまあできた=8 (25%)
3：あまりできなかった=8 (25%) 4：できなかった=3 (9.4%)

問13. 学生がこのような活動をしていく上で、学校からの資金的な援助があったほうがよいと思いますか。

- [Yes=30 (93.8%) / No=1 (3.1%)]

III. 活動体験について

問14. 活動を通じて感激したこと、うれしかったことは何ですか。自由にお書きください。

- [現地の人との交流=44 (137.5%) 日本の再確認=3 (9.4%)
勉強のチャンス=9 (28.1%) その他=3 (9.4%)]

問15. ギャップを感じたり、衝撃を受けたりしたことはありましたか。自由にお書きください。

- [紛争の傷跡=17 (53.1%) 社会・文化の違い=17 (53.1%) 貧困=7 (21.9%)
自身の未熟さ=3 (9.4%) 援助の矛盾=3 (9.4%) その他=9 (28.1%)]

問16. また、(問15に関して) その思いにどのような対処をしましたか。(複数回答可)

- 1：現地国際スタッフに伺った=14 (43.8%) 2：他の参加者と話をした=26 (81.3%)
3：先生に伺った=8 (25%) 4：現地の人に伺った=0 (0%)
5：自分自身で処理した=15 (46.9%) 6：その他=3 (9.4%)

問17. 困難に感じたことはありましたか。自由にお書きください。

- [コミュニケーション=22 (68.8%) インフラの不備=12 (37.5%)
自身の未熟さ=5 (15.6%) 社会・文化の違い=2 (6.3%)
その他=2 (6.3%) 特になし=5 (15.6%)]

問 18. また、(問 17 に関して) どのように対処しましたか。自由にお書きください。

コミュニケーション=17 (53.1%)	現地で勉強=11 (34.4%)
自分の努力=11 (34.4%)	仲間の協力=2 (6.3%)
その他=4 (12.5%)	とくになし=5 (15.6%)

問 19. 現地の人々との交流はうまくできましたか。

- 1 : 良くできた=11 (34.4%) 2 : まあまあできた=17 (53.1%)
3 : あまりできなかった=3 (9.4%) 4 : できなかった=0 (0%)

問 20. 現地で怪我や病気をしましたか。 [Yes=15 (46.9%) / No=16 (50%)]

【問 20 で<Yes>と答えた方】

付問. どのような症状でどのような対処をしましたか。

下痢=6 (18.8%)	発熱=5 (15.6%)	カゼ=4 (12.5%)
軽い怪我=3 (9.4%)	その他=8 (25.0%)	病気・怪我はなし=15 (46.9%)
対処→薬を使う=9 (45.0%)	自身の体調管理=4 (20.0%)	その他=7 (35.0%)

問 21. 体調管理で気を付けたことは何ですか。

飲食物の注意=13 (40.6%)	よく食べる=6 (18.8%)	睡眠をとる=6 (18.8%)
防虫薬の利用=6 (18.8%)	体温調節=5 (15.6%)	無理をしない=2 (6.3%)
水分補給=2 (6.3%)	特になし=4 (12.5%)	その他=4 (12.5%)

IV. 参加後について

問 22. 図書館に行く回数は増えましたか。

- 1 : 増えた=9 (28.1%) 2 : まあまあ増えた=11 (34.4%) 3 : 少々減った=0 (0%)
4 : 減った=0 (0%) 5 : 変化なし=12 (37.5%)

問 23. 授業への意欲は増えましたか。

- 1 : 増した=15 (46.9%) 2 : まあまあ増した=8 (25%) 3 : 少々減った=0 (0%)
4 : 減った=0 (0%) 5 : 変化なし=3 (9.4%) 6 : 授業による=6 (18.8%)

問 24. 語学(英語)の勉強時間は増えましたか。

- 1 : 増えた=7 (21.9%) 2 : まあまあ増えた=15 (46.9%) 3 : 少々減った=3 (9.4%)
4 : 減った=1 (3.1%) 5 : 変化なし=4 (12.5%)

問 25. 学生にできるボランティア活動とはどのようなことでしたか。自由にお書きください。

現地の人との交流=17 (53.1%)	体験による学習=11 (34.4%)
体を使った援助=10 (31.3%)	楽しさを伝える=4 (12.5%)
物資の支援=3 (9.4%)	その他=2 (6.3%)

問 26. 活動での一番の反省点はどのようなことでしたか。

語学力不足=10 (31.3%)	自身の未熟さ=10 (31.3%)	知識不足=8 (25.0%)
コミュニケーション不足=7 (21.9%)	特になし=2 (6.3%)	
その他=3 (9.4%)		

問 27. また、(問 26 に関しての) 反省点を補うためにどのようなことが必要だとお考えですか。

自身の成熟=10 (31.3%)	社会情勢の勉強=9 (28.1%)		
コミュニケーション=5 (15.6%)	事前の準備=5 (15.6%)	語学=3 (9.4%)	
特になし=2 (6.3%)	その他=6 (18.8%)		

問 28. このような活動をする際、ぜひ身につけておきたい知識や技術はありますか。
(複数回答可)

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 : 国際運転免許=19 (59.4%) | 2 : 日本語教員免許=7 (21.9%) |
| 3 : その他資格=4 (12.5%) | |
| 4 : 現地の一般事情=26 (81.3%) | 5 : 日本の一般事情=23 (71.9%) |
| 6 : その他知識=12 (37.5%) | |

問 29. 活動後(現在)も現地とのつながりを持つことができますか。

[Yes=17 (53.1%) / No=14 (43.8%)]

問 30. 学生のうちに海外でボランティアを行い、変化した点はどのようなことですか。
(複数回答可)

- | | |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 1 : 読書量が増えた=8 (25%) | 2 : 国際ニュースに関心を持つようになった=24 (75%) |
| 3 : 環境への配慮が増した=11 (34.4%) | 4 : 外国人への感覚がかわった=17 (53.1%) |
| 5 : 無駄使いをしなくなった=5 (15.6%) | |
| 6 : 海外を身近に感じるようになった=22 (68.8%) | 7 : その他=7 (21.9%) |

問 31. 日本で得られる情報だけでなく、実際に出向いて分かったことは何ですか。

現地の状況=29 (90.6%)	紛争による社会問題=11 (34.4%)
国際援助の実態=6 (18.8%)	かたよったマスコミ報道=5 (15.6%)
インフラの不備=2 (6.3%)	その他=1 (3.1%)

問 32. 計画段階と実行段階の差はありましたか。

- 1 : かなりあった=14 (43.8%) 2 : 多少あった=14 (43.8%)
3 : あまりなかった=3 (9.4%) 4 : まったくなかった=0 (0%)

問 33. (問 32 に関して) その差とはどのようなことですか。

現地の人との認識の差=11 (37.9%)	活動の難しさ=7 (24.1%)	
交通のトラブル=3 (10.3%)	物資不足=2 (6.9%)	その他=6 (20.7%)

問 34. 活動に参加して、国際協力関連の仕事につきたいという気持ちについて、出発前と帰国後の変化はありましたか。もっともあてはまる項目 1 つに○をつけて下さい。

- 1 : 出発前も帰国後も、国際協力に関連する仕事をしたいと考えている。=15 (46.9%)
2 : 出発前は国際協力に関連する仕事をしたいと考えていたが、帰国後は考えなくなった。=3 (9.4%)
3 : 出発前は国際協力に関連する仕事をしたいとは考えていなかったが、帰国後は考えるようになった。=7 (21.9%)
4 : 出発前も帰国後も、国際協力に関連する仕事をしたいとは考えていない。=1 (3.1%)
5 : 判断はつかなかった。=6 (18.8%)

問 35. 就職活動で、国際協力関連の機関や会社にアプローチはしましたか(するつもりですか)。

[Yes=21 (65.6%) / No=11 (34.4%)]

【問 35 に<Yes>と答えた方】

付問. 具体的にどのようなことをしましたか(するつもりですか)。(複数回答可)

- 1 : 資料請求した(もしくは予定) =15 (46.9%)
2 : 会社訪問した(もしくは予定) =8 (25%)
3 : 選考を受けた(もしくは予定) =8 (25%)
4 : 就職した(もしくは予定) =3 (9.4%)
5 : その他=3 (9.4%)

問 36. 国際協力に関する仕事に就きたいと考えている学生にとって、国際ボランティア活動の機会は十分意義のあるものでしたか。

- 1 : そう思う=27 (84.4%) 2 : ややそう思う=3 (9.4%)
3 : あまりそう思わない=1 (3.1%) 4 : まったくそう思わない=0 (0%)
5 : どちらとも言えない=1 (3.1%)

問 37. このような活動の経験をこれからどう生かしていきたいですか。

- 〔 自身の成長=14 (43.8%) 進路決定=8 (25.0%) 勉強=3 (9.4%)
人とのつながり=3 (9.4%) 今後の活動=3 (9.4%)
後輩へのアドバイス=3 (9.4%) その他=1 (3.1%) 〕

問 38. このような活動に参加したことは、あなたにどのような影響をもたらしましたか。

- 〔 人間的な成長=12 (38%) 将来へのヒント=9 (28%) 価値観=9 (28%)
視野の拡大=6 (19%) 他人への配慮=5 (16%) その他=3 (9%) 〕

問 39. 国際協力関連の仕事を選ばなくともこの先、ボランティアなどで国際協力に関わりたいと考えていますか。

- 1 : 強く考えている=23 (71.9%) 2 : まあまあ考えている=9 (28.1%)
3 : あまり考えていない=0 (0%) 4 : まったく考えていない=0 (0%)

問 40. このような活動を今後、友人や後輩に勧めていきたいですか。

- [Yes=27 (84.4%) / No=4 (12.5%)]

問 41. 活動に関するご要望があれば、自由にお書きください。

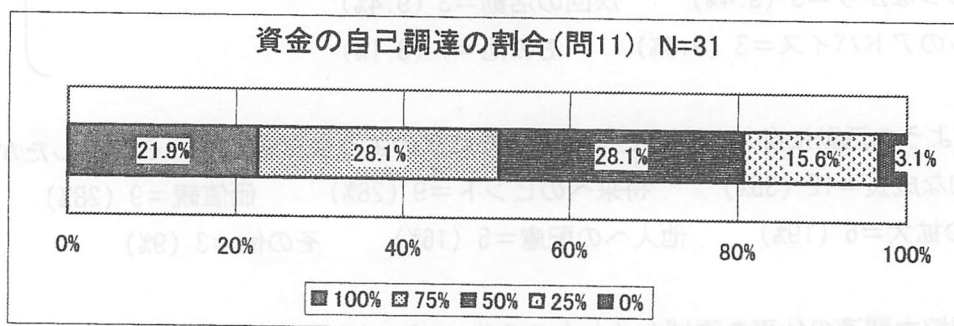
- 〔 参加学生へのフォロー、 金銭的支援、 活動がいつまでも続くように、
記録・分析をしっかりと、 活動場所との深い関係づくり、
国際協力分野を仕事とする学生の輩出を、 情報提供を継続的に行ってほしい など 〕

質問は以上です。御協力ありがとうございました。

4. 要約

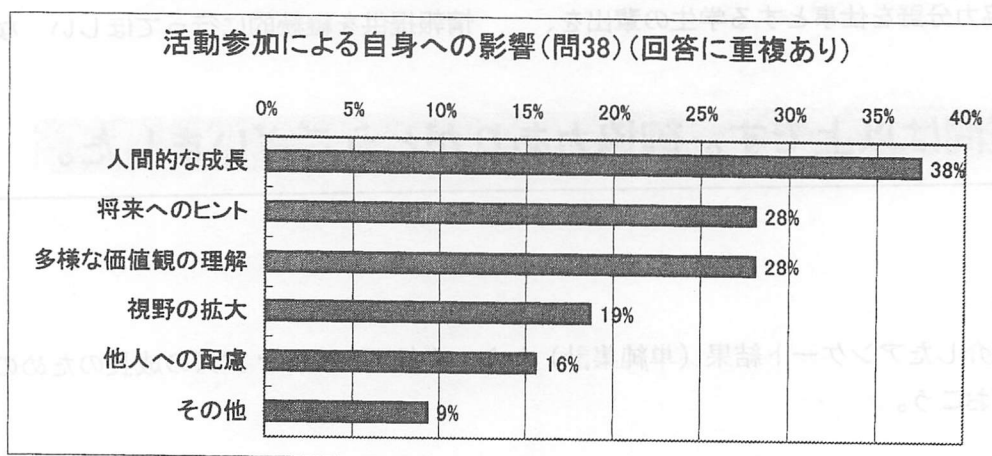
上に紹介したアンケート結果（単純集計）から、文教ボランティアズの成長のための指摘をしておこう。

- ① 海外ボランティア経験のほとんどない学生にとって、文教大学のなかでの活動紹介が、国際協力の機会を提供していると考えられる。とりわけ中村先生の講義やゼミ、経験者の活動紹介によって、情報が伝達されている。学内の人的なつながりが、参加に影響しているようである。よって、今後もボランティアズから発信される様々な情報が、多くの学生の参加を促すと予想される。
- ② 学生の活動参加にかんしては、経済面での課題が残されている。平均でおよそ 26 万円の費用のうち (問 9)、回答者の約 8 割はその 50%以上を、さらに約半数は 75%以上を自己負担していた (問 11)。



費用負担では、大半がアルバイトとなっており、その約 7 割の学生が時間や種類の点でアルバイトを増やしたと答えている (問 12)。学業とアルバイトの両立でも 4 割は「(あまり) できなかった」としており、問 13 に見られるように、資金的な援助を望む声が強いのもうなずける。

- ③ 活動参加後の変化では、向学心が培われた判断できる回答が寄せられている。図書館利用回数が「(まあまあ) 増えた」とする割合は 6 割をこえ (問 22)、授業への意欲でも 7 割以上が「(まあまあ) 増した」と答えている。語学についても同様に、7 割以上は勉強時間が「(まあまあ) 増えた」と回答している。体験型教育は、その前後にも、学生に対する学習の機会を提供している。同時に、一個人としての成長があったとの回答がよせられている (問 38)。



- ④ 卒業後の進路決定においても、実際の活動が良い判断材料となっているようである。問 36 にみられるように、この国際協力活動が職業選択上「意義がある」と感じられた割合は 9 割をこえている。体験後、国際協力関連の職業を希望する学生の割合も、就職活動としてこれらの組織に接触をとる学生も多い。今後は、このような希望をもつ学生に、職業としてどのような場所が案内できるか。学生・教員を含む大学全体での課題が突きつけられている。
- ⑤ 現地での不可欠な要素としては、コミュニケーション能力が指摘される。このなかには語学面も当然含まれるが、他者とコミュニケーションをとる際に必要な世界情勢の知識、日本にたいする認識、当該国の社会や文化の把握などが要求されたと感じた回答者が多いようである。おそらくこれは、国際学部に託された教育上の役割でもあるだろう。

上に述べた諸点は、経験者の貴重な意見によって析出された。これらをふまえつつ文教ボランティアズが活動をしていくとき、さらなる発展が期待される。自己評価の時期とはいえ、まだ 3 年である。のびしろは大きい。活動に実際に携わった先輩が、ボランティアズの今後について、継続・記録と分析・深い関係づくり・国際協力分野への積極的な進出を願っている。まずはその志を受け継ぐことを通じて、学生としての国際協力活動の研究を始めてもいいのだろう。つづく者によって、さらに経験が蓄積される。そのことが実感できる。

謝辞

本調査の実施にあたり、文教大学でのボランティア経験者から多大な協力を得た。本来ならば個別にお礼を申し上げるべきであろうが、本報告文ならびに調査結果を今後のボランティア活動推進のために有効活用することを約束して、お礼にかえさえていただきたい。

製作 文教ボランティアズ
発行 文教大学国際学部中村恭一研究室
神奈川県茅ヶ崎市行谷 1100
電話 (0467) 53-2111
e-mail : knkyo@shonan.bunkyo.ac.jp
協力 文教大学国際学部
印刷 株式会社 三光堂印刷
神奈川県藤沢市本町 1-3-33

